

令和 7 年度
老人保健事業推進費等補助金
老人保健健康増進等事業

令和 7 年度老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業

ケアプラン点検の効果的な実施方法に関する
調査研究事業

報 告 書

令和 8（2026）年 3 月

株式会社 NTT データ経営研究所



株式会社NTTデータ経営研究所

第1部	概要	1
第1章	本事業の概要	1
1.	背景・目的	1
2.	実施内容	2
3.	実施体制	4
4.	検討委員会の開催	5
第2章	結果の概要	8
1.	実施内容別の結果まとめ	8
2.	総括（今後の課題と展望）	10
第2部	詳細	13
第1章	「ケアプラン点検支援パッケージ」の保険者向け研修	14
1.	目的	14
2.	方法	14
3.	結果	23
4.	まとめ	29
第2章	ケアプラン点検項目のブラッシュアップ	31
1.	目的	31
2.	方法	31
3.	結果	31
4.	まとめ	43
第3章	ケアプラン点検支援ツールのブラッシュアップ	44
1.	目的	44
2.	方法	44
3.	結果	58
4.	まとめ	92
第4章	ケアプラン点検のためのアセスメント様式の検討	96
1.	目的	96
2.	方法	96
3.	結果	97
4.	まとめ	105
第5章	ケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールの検討	107
1.	目的	107
2.	方法	107
3.	結果	107

4.	まとめ	109
第6章	総括（今後の課題と展開）	111
1.	結果のまとめ（課題を含む全体の総括）	111
2.	今後の展望	113
第3部	参考資料	117

第 1 部 概要

第1章 本事業の概要

1. 背景・目的

高齢者の増加とともに、要介護者の状態も複雑化している（認知症、多疾患、独居等）。利用者・家族の価値観も多様化しており、多様なニーズや価値観に対応するケアマネジメントが求められている。こうした中、地域においてケアマネジメントの役割を担う介護支援専門員（以下、「ケアマネジャー」という）の育成や支援に関して保険者が果たす機能、役割もますます重視されている。

「ケアプラン点検」は、平成 18 年度に介護給付等費用適正化事業の一環として位置づけられた事業であり、保険者によるケアマネジメント支援の取組の一つである。点検を通じて「利用者のニーズや生活実態に即したプランになっているか」を第三者の目で確認することで、その人らしい暮らしを支えるケアマネジメントの支援、即ち地域包括ケアシステムの強化につながるものである。過剰・過小なサービス利用を防ぐことで給付の適正化にもつながり、介護保険制度の持続可能性確保に直結するものであるとも言える。

しかしながら、令和 3 年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業「AI を活用した効果的・効率的なケアプラン点検の方策に関する研究」（以下、「令和 3 年度事業」という）において実施したケアプラン点検全国実態調査（以下、「令和 3 年度全国実態調査」という）によれば、ケアプラン点検の実施方法は様々であり、多くの保険者で専門的な知識やスキルを有した職員の確保が課題となっている。

これを踏まえ、令和 4 年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業「AI を活用した効果的・効率的なケアプラン点検の方策に関する研究」（以下、「令和 4 年度事業」という）では、ケアプラン点検の平準化や事務負担軽減により、効果的・効率的なケアプラン点検の実施を支援するため、「ケアプラン点検項目」（以下、「点検項目」という）及び「ケアプラン点検支援ツール」（以下、「点検支援ツール」という）を策定した。これに続き、令和 5 年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業「AI を活用した効果的・効率的なケアプラン点検の方策に関する研究」（以下、「令和 5 年度事業」という）では、平成 20 年に策定された「ケアプラン点検支援マニュアル」（厚生労働省老健局振興課）の改定版を策定し、「ケアプラン点検項目」及び「点検支援ツール」と合わせて「ケアプラン点検支援パッケージ」として取りまとめた。また、令和 6 年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業「ケアプラン点検に係るマニュアル及び AI を活用した支援ツールに関する調査研究事業」（以下、「令和 6 年度事業」という）では、「ケアプラン点検支援パッケージ」が保険者の現場において適切に運用されるように、保険者向けに研修を通じて広く周知することを目指した。さらに、点検項目及び点検支援ツールのブラッシュアップ、ケアプラン点検のためのアセスメント様式の検討、ケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールの検討を進めてきた。

以上の調査結果を踏まえ、本調査研究事業（以下、「本事業」という）では、「ケアプラン点検支援パッケージ」がケアプラン点検の実務において適切かつ効果的に運用されるよう、保険者に向けた研修の在り方を検討することとした。さらに、ケアプラン点検項目、点検支援ツール、ケアプラン点検のためのアセスメント様式およびケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールについて、令和 6 年度事業において残された課題の検討を行い、改良を進めた。これらの取り組みを通じ、地域包括ケアにおける自立支援

に資するケアマネジメントの実現を目指す。

2. 実施内容

本事業では、「ケアプラン点検支援パッケージ」の保険者向け研修、点検項目及び点検支援ツールのブラッシュアップ及びケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールの検討を実施した。本事業の実施概要を図表 1-1 に示す。

図表 1-1 事業の全体像

実施事項	実施概要
保険者向け研修	・ ケアプラン点検支援パッケージの理解と活用を促進し、経験の浅い担当者を中心にケアプラン点検の質の平準化を図ることを目的に、研修を開催。 ・ 研修は、基礎編（講義動画のオンライン配信）及び実践編（対面形式）により構成。
ケアプラン点検項目のブラッシュアップ	・ 令和6年度事業において明らかとなった更なるブラッシュアップが必要な箇所を中心に、点検項目及び点検項目マニュアルの改定について検討。
ケアプラン点検支援ツールのブラッシュアップ	・ 点検支援ツールの社会実装に向けて、エクセル版をもとにしたWeb版ケアプラン点検支援ツールの試験開発、自治体におけるWeb版の実証、生成AIを活用したアセスメント様式への転記可能性の検証、Web版ケアプラン点検支援ツールのロードマップ案の更新を実施。
ケアプラン点検のためのアセスメント様式の検討	・ 令和6年度事業において開発したケアプラン点検のためのアセスメント様式案に関して現場での活用可能性を検証し、様式案のブラッシュアップを実施。
ケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールの検討	・ 令和6年度事業において開発した「セルフチェック版」に関して、今年度の点検項目のブラッシュアップに合わせて更新。 ・ 来年度の公開を目指し、ケアマネジャーへの周知方法を検討。

（１）「ケアプラン点検支援パッケージ」の保険者向け研修の実施

ケアプラン点検支援パッケージの理解と活用を促進し、経験の浅い担当者を中心にケアプラン点検の質の平準化を図ることを目的として、保険者のケアプラン点検担当者等を対象とした研修を実施した。

研修は、講義動画を各自で視聴する「基礎編」と、講義・演習を会場で実施する「実践編」の２部構成とし、ケアプラン点検の基本的な考え方から、点検項目に基づく書類点検・面談の進め方、支援パッケージの具体的な使い方までを体系的に学べる内容とした。基礎編では、ケアプラン点検の意義・位置づけ、点検項目の考え方、書類点検・面談の方法、実践事例の紹介、点検支援パッケージの概要を扱い、実践編では模擬ケアプランを用いた個人ワーク・グループワークを通じて、評価基準の読み取りや判断の差異の言語化、面談で確認すべき論点の整理等を行った。

（２）ケアプラン点検項目のブラッシュアップ

令和５年度事業において、介護保険やケアマネジメントに関わる動向等を踏まえながら、点検項目の内容や評価基準の修正を行うとともに、点検項目を確認する目的等が理解できるよう、点検のねらいや各項目の解説を行った点検項目マニュアル改訂版を作成した。令和６年度には令和５年度事業において更なる検討を要するものと位置付けた項目を中心にブラッシュアップを図り、第２.１版を作成した。

本事業においては、過年度事業において判断方法の分かりにくさが指摘された項目を中心に更なるブラッシュアップを図った。ブラッシュアップは、現行版の点検項目、点検項目マニュアルの課題を整理し、改訂案を作成の上、検討会及びワーキンググループにおける議論を経て実施した。

（３）ケアプラン点検支援ツールのブラッシュアップ

令和５年度の事業において、保険者のケアプラン点検業務の負担軽減と質の向上を実現するためには、「点検に係る書類の点検時間を短縮できる仕組みの社会実装」が不可欠であることが明らかになった。また、自然言語処理技術や生成 AI 等を活用し、ケアプラン点検対象の書類を自動で分析することで、一定の業務時間削減が期待できることが示唆された。このような示唆を受けて令和６年度には生成 AI を活用してケアプラン点検を支援する「WEB 版ケアプラン点検支援ツール」のロードマップ案を作成した。加えて、令和６年度事業の中で「ケアプラン点検のためのアセスメント様式」の検証を進めた結果、ケアプラン点検のためのアセスメント様式を運用する際にはケアマネジメント業務において用いられるアセスメント様式から本様式への転記の手間が利用のハードルになるという問題が抽出された。

これらの課題・問題を踏まえ、本事業におけるケアプラン点検支援ツールのブラッシュアップパートでは、次の４つのテーマに取り組んだ。

第１に「WEB 版ケアプラン点検支援ツールの試験開発」、第２に開発された WEB 版ケアプラン点検支援ツールを用いた「WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証」、第３に「生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証」、第４に１～３の検証結果を踏まえた、令和６年度に検討した『WEB 版ケアプラン点検支援ツール』のロードマップ案の更新である。

（４）ケアプラン点検のためのアセスメント様式の検討

現状、ケアマネジャーが用いるアセスメント様式は事業所によって異なる実態がある。本事業の実施過程において、ケアマネジャーが用いているアセスメント様式に記載枠がない項目はケアマネジャーによって記載／未記載が分かれ、点検結果やアセスメントの質に影響することが示唆された。また、ケアマネジャーごとにアセスメント様式が異なるため、点検支援ツールに自動的に情報を読み込めず、点検に手間がかかるというケアプラン点検上の課題があることも明らかとなった。

そこで、令和６年度事業において点検項目及び点検項目マニュアルに示される重要なポイントのうちアセスメント様式に記載すべき内容を整理し、「ケアプラン点検のためのアセスメント様式案」（以下、「アセスメント様式案」という）を作成した。

本事業においては、７つの保険者の点検者及びケアマネジャーの参画を得て実証を行い、アセスメント様式案の現場での活用可能性を検証した。また、実証で得られた意見をもとにアセスメント様式案のブラッシュアップも行った。ブラッシュアップは、実証で得られた意見からアセスメント様式案の課題を整理し、改訂案を作成の上、検討会及びワーキンググループにおける議論を経て実施した。

（５）ケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールの検討

令和６年度事業において、ケアマネジャーが自分のケアプランを客観的な視点で振り返り、ケアプラン作成において重要なポイントを押さえながら育成を行うことができる素材を提供することにより、ケアマネジ

メント力の向上を図ることを目的に、「ケアプラン点検項目及び項目マニュアルセルフチェック版」（以下、「セルフチェック版」という）を作成した。

本事業においては、セルフチェック版の公開方法、具体的には周知・活用促進のための施策を検討した。検討の結果、認知を広げる、理解を得る、実践を支えるという 3 つのステップで周知・活用を促進することとし、セルフチェック版の「使い方ガイド」の作成にも取り組んだ。

3. 実施体制

学識経験者と実務者から構成される検討委員会及びその下のワーキンググループを設置して方針等の検討を行った。検討委員会の委員一覧を図表 1-2、ワーキンググループの委員一覧を図表 1-3、厚生労働省 老健局 オブザーバー一覧を図表 1-4、事務局一覧を図表 1-5 それぞれに示す。

図表 1-2 検討委員会 委員（五十音順、敬称略）

	氏名	所属・役職名
委員長	遠藤 征也	一般財団法人長寿社会開発センター 調査研究開発部長
委員	石山 麗子	国際医療福祉大学大学院 医療福祉経営専攻 教授
	牛谷 義秀	一般社団法人 宮崎県介護支援専門員協会 会長
	落久保 裕之	一般社団法人 広島県介護支援専門員協会 相談役 理事
	梶間 晃道	福岡県介護保険広域連合 事業課長
	小出 顕生	公益社団法人 国民健康保険中央会 保健福祉部 審議役
	高田 陽介	武蔵野市 健康福祉部 高齢者支援課 介護保険係長
		NTT 株式会社
	田所 砂恵理	研究開発マーケティング本部 アライアンス部門ヘルスケア・メディカル担当 担当部長
	中澤 伸	社会福祉法人 川崎聖風福祉会 理事長
	能本 守康	一般社団法人 日本介護支援専門員協会 常任理事
オブザーバー	佐藤 秀樹	NTT テクノクロス株式会社 デジタルトランスフォーメーション事業部 第四ビジネスユニット 統括マネージャー

図表 1-3 ワーキンググループ 委員（五十音順、敬称略）

	氏名	所属・役職名
委員長	石山 麗子	国際医療福祉大学大学院 医療福祉経営専攻 教授
委員	遠藤 征也	一般財団法人長寿社会開発センター 調査研究開発部長
	岡島 潤子	株式会社やさしい手 経営企画部 顧問
	岸川 映子	井口台介護ステーション代表
	中澤 伸	社会福祉法人 川崎聖風福祉会 理事長
	吉川 幹紘	武蔵野市 健康福祉部 高齢者支援課 介護保険係 介護サービス担当
	渡部 功司	株式会社なないろ 代表取締役

氏名	所属・役職名
オブザーバー 佐藤 秀樹	NTT テクノクロス株式会社 デジタルトランスフォーメーション事業部 第四ビジネスユニット 統括マネージャー

図表 1-4 厚生労働省 老健局 オブザーバー（敬称略）

氏名	所属・役職名
オブザーバー 松山 政司	厚生労働省 老健局認知症施策・地域介護推進課 課長補佐
上柳田 雪花	厚生労働省 老健局認知症施策・地域介護推進課 人材研修 係長
藤井 風花	厚生労働省 老健局認知症施策・地域介護推進課 人材研修係
首藤 俊彰	厚生労働省 老健局認知症施策・地域介護推進課 人材研修係
村山 いずみ	厚生労働省 老健局認知症施策・地域介護推進課 人材研修係

図表 1-5 事務局

氏名	所属・役職名
米澤 麻子	株式会社 NTT データ経営研究所 ライフ・バリュー・クリエイションユニット マネージングディレクター
井上 裕章	株式会社 NTT データ経営研究所 ライフ・バリュー・クリエイションユニット マネージャー
青木 翔吾	株式会社 NTT データ経営研究所 ライフ・バリュー・クリエイションユニット シニアコンサルタント
事務局 石川 理華	株式会社 NTT データ経営研究所 ライフ・バリュー・クリエイションユニット シニアコンサルタント
佐藤 瞳	株式会社 NTT データ経営研究所 ライフ・バリュー・クリエイションユニット シニアコンサルタント
天童 空美	株式会社 NTT データ経営研究所 ライフ・バリュー・クリエイションユニット シニアコンサルタント
田口 怜乃	株式会社 NTT データ経営研究所 ライフ・バリュー・クリエイションユニット コンサルタント

4. 検討委員会の開催

検討委員会を全 3 回、ワーキンググループを全 3 回開催した。開催概要を図表 1-6、図表 1-7 それぞれに示す。

図表 1-6 検討委員会の開催概要

日時・場所	主な検討内容
第1回 令和 7 年 9 月 22 日（月） 14:00～16:00 株式会社 NTT データ経営研究所会議室	- 事業の全体像 - 保険者向け研修（ケアプラン点検担当者へのヒアリング結果、研修の方針案、実施概要、プ

日時・場所	主な検討内容
/オンライン会議 ※第1回ワーキンググループ合同開催	ログラム) ・点検項目のブラッシュアップ（昨年度残された課題と課題への対応方針） ・点検支援ツールのブラッシュアップ（昨年度までの成果、残された課題、今年度の実施概要） ・ケアプラン点検のためのアセスメント様式の検討（実施概要、実証の手順） ・ケアマネジャーのセルフチェックツールの検討（実施概要、進め方）
第2回 令和7年11月12日（水） 10:00～12:00 株式会社 NTT データ経営研究所会議室 /オンライン会議	・保険者向け研修（研修の目的・位置づけ、研修のタイムスケジュール） ・点検項目のブラッシュアップ（委員に寄せられた意見と改訂方針案） ・点検支援ツールのブラッシュアップ（転記機能の検証手法・観点の整理、社会実装に向けた検討） ・ケアプラン点検のためのアセスメント様式の検討（実証進捗報告） ・ケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールの検討（位置づけ、周知方法）
第3回 令和7年2月27日（金） 17:00～19:00 株式会社 NTT データ経営研究所会議室 /オンライン会議	・保険者向け研修（研修結果、事後アンケート調査の結果、今年度の研修の課題と来年度の方針） ・点検項目のブラッシュアップ（残された課題と今後の方向性） ・点検支援ツールのブラッシュアップ（実証結果、転記機能の現状、実現に向けた課題と対策、公開に向けたロードマップ案） ・ケアプラン点検のためのアセスメント様式の検討（実証結果報告、公開に向けたロードマップ案、残された課題と今後の方向性） ・ケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールの検討（セルフチェック版の使い方ガイド案、残された課題と今後の方向性）

図表 1-7 ワーキンググループの開催概要

日時・場所	主な検討内容
第1回 令和7年9月22日（月）	・事業の全体像

日時・場所	主な検討内容
14:00～16:00 株式会社 NTT データ経営研究所会議室 ／オンライン会議 ※第 1 回検討委員会合同開催	• 保険者向け研修（ケアプラン点検担当者へのヒアリング結果、研修の方針案、実施概要、プログラム） • 点検項目のブラッシュアップ（昨年度残された課題と課題への対応方針） • 点検支援ツールのブラッシュアップ（昨年度までの成果、残された課題、今年度の実施概要） • ケアプラン点検のためのアセスメント様式の検討（実施概要、実証の手順） • ケアマネジャーのセルフチェックツールの検討（実施概要、進め方）
第2回 令和 7 年 12 月 1 日（月） 16:00～18:00 オンライン会議	• 点検支援ツールのブラッシュアップ（転記機能の検証手法・観点の整理、社会実装に向けた検討） • 点検項目のブラッシュアップ（第 1 回 WG における意見を踏まえた改訂方針案） • ケアプラン点検のためのアセスメント様式の検討（実証進捗報告） • ケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールの検討（位置づけ、周知方法）
第3回 令和 7 年 2 月 4 日（水） 14:00～16:00 オンライン会議	• 点検支援ツールのブラッシュアップ（実証における検証項目、転記機能の検証状況） • 点検項目のブラッシュアップ（第 2 回 WG における意見を踏まえた修正案） • ケアプラン点検のためのアセスメント様式の検討（実証結果報告、公開に向けたロードマップ案） • ケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールの検討（セルフチェック版の使い方ガイド案）

第2章 結果の概要

1. 実施内容別の結果まとめ

(1) 「ケアプラン点検支援パッケージ」の保険者向け研修の実施

ケアプラン点検支援パッケージの保険者向け研修の受講申込者数は基礎編（配信期間は令和 7 年 12 月 1 日（月）～令和 8 年 3 月 13 日（金））513 名、実践編（令和 7 年 12 月 12 日（金）実施）24 名（参加者 20 名）であった。事後アンケートは基礎編 234 名、実践編 20 名から回答を得た。事後アンケートの結果、基礎編、実践編ともに研修内容の実務への関連性や理解度に関して肯定的な評価が多く、特に基礎編ではすべての回答者がケアプラン点検の目的や基本的な考え方を理解できたと回答した。また、今後の実践意欲についても肯定的な評価が多かったことから、本研修は点検業務の平準化や自立支援に資するケアマネジメントの推進に向けた基礎的な理解の形成に寄与することが示唆された。

(2) ケアプラン点検項目のブラッシュアップ

令和 6 年度事業において残された課題である「基準や判断方法の説明について追加検討が必要な項目」について、検討委員会及びワーキンググループでの検討を経て改訂を行った。改訂は、点検者がより判断しやすく、ケアプラン点検を通じたケアマネジメントの質の向上に資するものとなることを目指す一方で、ケアプラン点検支援ツールの開発と足並みを揃える観点から、点検項目の基準そのものは改訂せず「ケアプラン点検項目マニュアルの充実化」に焦点を絞って検討した。

結果、本事業では「はじめに」、「8. 認知機能や判断項目」、「10. 一日に摂取すべき水分量」等、計 18 の点検項目に改訂を加えることとした。

また今後、介護報酬改定や社会情勢の変化を踏まえ、3 年に一度は基準も含む大幅改定を行うことに加え、点検項目マニュアルについては適宜必要な修正を加えていくこととした。

(3) ケアプラン点検支援ツールのブラッシュアップ

令和 5 年度事業、令和 6 年度事業において残された課題を踏まえ、本事業では、「WEB 版ケアプラン点検支援ツールの試験開発」、「WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証」、「生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証」、「『WEB 版ケアプラン点検支援ツール』のロードマップ案の更新」の 4 つのテーマに取り組んだ。

まず、「WEB 版ケアプラン点検支援ツールの試験開発」においては令和 5 年度事業で開発された「ケアプラン点検支援ツール（WEB 版）のモックアップ」（模型版）及び令和 6 年度事業でブラッシュアップされたエクセル版のケアプラン点検支援ツールの仕様をインプットにして要件定義を行い、システム開発を行った。なお、本事業で開発する「WEB 版ケアプラン点検支援ツール」は保険者検証において活用することを想定し、実証として各保険者の庁舎内で利用しやすい形態とすることを目的に、オフラインで動作することを前提に機能を設計した。

次に、「WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証」を、9 の保険者を対象に実施した。各保険者には本事業で開発された「WEB 版ケアプラン点検支援ツール」をインストールした端末を配布し、実際にケアプラン点検（書類確認）を実施いただいたうえでアンケート・ヒアリング調査を行った。結果、生

成 AI を活用した書類確認の補助機能は保険者のケアプラン点検業務の効率化や地域のケアマネジメントに寄与する可能性があること、WEB 版ケアプラン点検支援ツールは多様な自治体から利用ニーズがあることが示唆された。

次に、「生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証」を実施した。実施にあたっては、まず「転記」という行為を①アセスメントシートから情報を単純抽出する処理、②抽出した情報を再構成する処理、③再構成された情報を所定の様式に成形する処理の 3 つの処理に分解した。その上で、③については既存の技術で比較的容易に実行できることを踏まえ、①・②の処理を生成 AI で行ったときの精度がどの程度か、期待する特定のアセスメント様式への転記が可能かについて検証を行った。結果、①アセスメントシートから情報を単純抽出する処理については、現状、実務で活用されているアセスメント様式には多様な記載パターンがあり、記載パターンによっては生成 AI を用いて高精度で単純抽出を行うことに課題があることが明らかになった。一方で、②抽出した情報を再構成する処理、③再構成された情報を所定の様式に成形する処理については完全ではないものの一定程度の精度が認められた。

最後に、『「WEB 版ケアプラン点検支援ツール」のロードマップ案の更新』では、これらの検証結果を踏まえ短期的に実現可能なモデルを整理した。さらに、介護情報基盤の整備の状況も踏まえるとともに、将来像として目指すべき姿について検討をし、令和 6 年度事業において検討したロードマップ案を更新した。

（４）ケアプラン点検のためのアセスメント様式の検討

令和 6 年度事業において開発したアセスメント様式案を用いた実証を実施した。実証には 7 保険者の点検者、ケアマネジャーの参画を得た。実証では 6 保険者においてアセスメント様式案を用いたケアプラン点検で、1 保険者においてケアプラン点検の場面を想定し机上でアセスメント様式案の精査を行い、その所感をヒアリングした。

結果、アセスメント様式案そのものについては、点検者、ケアマネジャー双方から掲載順、掲載項目は概ね妥当であり、今後細部の修正を行うことでケアプラン点検及びアセスメント場面における活用可能性が高まるとの意見が得られた。様式案を今後どのように位置づけるかについては、様式案の導入によりケアプラン点検の業務効率化や質向上への期待感がある反面、転記業務の負担が強く懸念され、転記機能とセットでの導入が必須であるとの意見が多かった。

これらの実証の結果をふまえ、ワーキンググループ及び検討委員会において、アセスメント様式案のブラッシュアップを検討した。検討過程で、アセスメント様式案をケアプラン点検のためだけの様式とするのか、アセスメント業務での活用を見据えたものとするのかによりブラッシュアップの方向性が変わることが指摘された。そこで、アセスメント様式案の位置づけを十分に検討し確定した上でブラッシュアップを進めることを今後の方針とした。

（５）ケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールの検討

本事業では主に、セルフチェック版の公開方法、具体的には周知・活用促進のための施策を検討した。検討の結果、認知を広げる、理解を得る、実践を支えるという 3 つのステップで周知・活用促進を進めることとした。

認知を広げるための方策としては、厚生労働省ホームページにおいてセルフチェック版を広く一般に公開することに加え、保険者や職能団体がケアマネジャーにセルフチェック版の利用を推奨する際に活用するツールが必要であることから、「ケアプラン点検マニュアルセルフチェック版 使い方ガイド」（以下、「使い

方ガイド」という)を作成した。使い方ガイドでは、ケアマネジャーのセルフチェック、OJT、研修という 3 つの想定活用場面ごとに、効果的な使い方の要点を簡潔に示した。

2. 総括（今後の課題と展望）

（１）「ケアプラン点検支援パッケージ」の保険者向け研修の実施

保険者向け研修の事後アンケート結果からは、研修内容の理解や実務への関連性に対する評価は高い一方で、研修が地域のケアマネジメント力の向上や点検の質のばらつきの是正等の成果につながるかについては他の項目と比べて評価が相対的に低く、学びを各保険者の実務改善・組織的実践へ橋渡しする支援が課題として示唆された。また、実践編のグループワークでは、評価基準の解釈の難しさ、複数の情報を統合して利用者の生活の全体像を判断することの難しさ、書面のみでは判断が完結しない場合に面談で補完する必要性等が参加者間で共有され、判断が分かれやすい論点について具体例・事例解説をより充実させる必要性が明らかとなった。さらに、受講者からは実践事例や動画コンテンツのさらなる充実、対面形式のグループワークの継続を求める声が寄せられており、研修設計上の参考として受け止める必要がある。

今後は、基礎編を継続的に実施してケアプラン点検の理解の促進と点検の質の底上げを図るとともに、実践編については受講者の役割・経験に応じたプログラムの整備を検討する必要がある。その際、判断の手がかりとなる具体例や事例解説を研修内容に組み込むことが有効と考えられる。また、ケアプラン点検の実態把握、好事例の収集、ならびにや点検支援パッケージの認知・活用状況の把握を目的とした全国的な実態調査を実施し、その結果を研修内容の充実に活用していくことが重要である。

（２）ケアプラン点検項目のブラッシュアップ

今年度事業においては、ワーキンググループ、検討委員会での議論を中心に、点検時の判断のしやすさを高めるための改訂を行った。

令和 6 年度事業において、点検項目の改訂は今年度を起点に 3 年に 1 回の頻度で実施していくことが望ましいとしたが、ケアマネジメントの潮流や社会情勢の変化をふまえ、必ずしも 3 年後を待たずして適宜軽微な修正を継続的に行っていく必要性が示唆された。そこで、今後も継続的な検討を行い、ケアプラン点検においてより効果的、効率的に活用されるものとなることを目指す。

（３）ケアプラン点検支援ツールのブラッシュアップ

今年度事業においては、「WEB 版ケアプラン点検支援ツールの試験開発」、「WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証」、「生成 AI によるアセスメント様式への転記可能性の検証」、「WEB 版ケアプラン点検支援ツールのロードマップ案の更新」の 4 つのテーマに取り組み、点検支援ツールの社会実装に向けた有用性の実証を行うとともに、今後の社会実装に向けたロードマップについて再検討を行い、その更新を試みた。結果、それぞれのテーマでいくつかの課題が残された。

「WEB 版ケアプラン点検支援ツールの試験開発」及び「WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証」では WEB 版ケアプラン点検支援ツールへの保険者の利用ニーズがあることは確認できたものの、

各種機能や UI¹の改善点について、保険者から複数の意見があがった。このような意見を踏まえ、更なる WEB 版ケアプラン点検支援ツールの UI の改善や、保険者が安心して生成 AI を活用した機能を利用できるように、精度を保証できる方策について検討していく必要がある。

「生成 AI によるアセスメント様式への転記可能性の検証」においては生成 AI の再構成処理への活用可能性が確認された。一方、アセスメント様式からの文字情報の単純抽出の精度については改善余地があることが分かっている。また、「（４）ケアプラン点検のためのアセスメント様式の検討」にて転記機能のニーズが確認されたことも踏まえると、生成 AI を転記機能として実装していくにあたり、どのような実装方法がとり得るかについて整理していく必要がある。また、本事業においては正解データを事務職にて作成し精度検証を行ったが、検討委員会においてケアマネジャーが転記機能を活用していく方針についても言及があった。このため、ケアマネジャーの目線からの精度検証を実施していくことも重要である。

最後に「WEB 版ケアプラン点検支援ツールのロードマップ案の更新」ではケアプラン点検支援ツールの社会実装に向けて検討を行った。その中で、点検支援ツールの有用性をより具体的に示していくためには、ケアプラン点検の意義や役割、実施方法について改めて整理していく必要があることが示唆された。また、制度面での位置付けについては、関係機関との連携を図りながら課題の整理を進めるとともに、介護情報基盤との関係性も含めた検討を深めていく必要がある。さらに、点検支援ツールの有効性を客観的に示すためには実際の運用を通じた効果の把握が重要であり、将来的にはモデル事業を通じた検証を行っていくことも求められる。これらの取組を通じて、ケアプラン点検の在り方の整理や関係者との協議、実証を積み重ねていくことが、点検支援ツールの社会実装につながるものと考えられる。

（４）ケアプラン点検のためのアセスメント様式の検討

本事業において実施した実証より、アセスメント様式案はケアプラン点検及びアセスメント場面において活用可能性が一定程度あることが示された。一方で、具体的な活用を想定した場合、細部において記入のしやすさへの対応の必要があることに加え、アセスメント様式案の位置づけにより整理すべき項目が異なるといった課題があることも示唆された。

今後、アセスメント様式案を確定し広く活用を促進するためには現状のアセスメント様式案をブラッシュアップする必要がある。一方で、様式の構成ブラッシュアップの方向性はアセスメント様式案の位置づけにより異なる。具体的には、アセスメント様式案をケアプラン点検の場面でのみ活用するものと位置付けて開発するのか、ケアマネジャーがアセスメント場面で活用することまで想定して開発するのかを、ケアプラン点検の実施実態をふまえて検討する必要がある。

そこで、アセスメント様式案の位置づけを検討した上で具体的な様式内容のブラッシュアップを進めることが必要である。アセスメント様式案の位置づけの検討にあたっては、全国的なケアプラン点検の実施状況、ケアプラン点検において提出される書類の種類、提出されるアセスメント様式の種類等を把握することが必要である。

（５）ケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールの検討

本事業においては、セルフチェック版の内容を確定させるとともに、セルフチェック版を広く公開していくた

¹ 利用者がシステムやツールを操作する際に接する画面、ボタン、入力欄、表示項目等の接点

めには、周知の方法についても慎重に検討していく必要があるという令和 6 年度事業で得られた示唆をもとに、周知方法の検討を行った。結果、第 1 段階として認知を広げる、第 2 段階として理解を得る、第 3 段階として実践を支えるという 3 つのステップで周知・活用を促進していく方針とし、認知を広げるためのツールとして使い方ガイドを開発した。

今後、セルフチェック版と使い方ガイドを公開するとともに、両者を用いたケアマネジメントの質向上の取組事例を創出し、効果的な活用方法を広く周知し横展開につなげる取組が必要である。

第2部 詳細

第1章 「ケアプラン点検支援パッケージ」の保険者向け研修

1. 目的

ケアプラン点検の意義・位置づけを周知すること経験の浅い職員を中心に、保険者のケアプラン点検の質を平準化することを目的に、保険者のケアプラン点検担当者等を対象とした研修を実施した。

2. 方法

(1) 研修の企画

1) 受講対象者

保険者のケアプラン点検の担当者のうち、ケアプラン点検の経験が浅い者（事務職/専門職を問わない）、ケアプラン点検事業を受託する居宅介護支援事業所のケアマネジャーのうち、ケアプラン点検の経験が浅い者を主な対象とした。

2) 研修プログラム

研修は基礎編、実践編の2部構成とした。基礎編は講義、模範演技、事例紹介の5科目とし、動画を各自で期間内に視聴するオンデマンド配信の形式、実践編は講義・演習の1科目とし、東京都内の会場での対面開催の形式で実施した。科目については、ケアプラン点検の基本的な考え方から、実際の点検業務を想定した実践的な内容で構成することとした。研修プログラムの全体像を図表 2-1 に示す。

図表 2-1 研修プログラムの全体像

#	区分	科目	講師	概要
1	講義	ケアプラン点検の考え方	一般財団法人長寿社会開発センター 調査研究開発部長 遠藤征也	ケアプラン点検を行う上で必要な考え方をケアプラン点検支援マニュアルに沿って説明した。
2	講義	ケアプラン点検項目の考え方	国際医療福祉大学大学院 医療福祉経営専攻 教授 石山麗子	ケアプラン点検を行う上で必要な考え方をケアプラン点検項目マニュアルに沿って説明した。
3	模範演技	書類点検の方法／面談の方法	国際医療福祉大学大学院 医療福祉経営専攻 教授 石山麗子 社会医療法人 仁生会 西堀病院 経営企画部 在宅支援事業部部長 齊藤眞樹	ケアプラン点検のうち、書類の点検方法を模範演技として提示した。
4	事例紹介	実践事例の紹介	公益社団法人石川県理学療法士会 会長 北谷正浩	ケアプラン点検パッケージを活用し、ケアプラン点検を行っている

#	区分	科目	講師	概要
				自治体での取組を事例として紹介した。
5	講義	ケアプラン点検支援パッケージの概要	株式会社エヌ・ティ・ティ・データ経営研究所 ライフ・バリュー・クリエイションユニット マネージャー 井上裕章	ケアプラン点検支援パッケージの概要と使い方を説明した。
6	講義・演習	ケアプラン点検の実践	一般財団法人長寿社会開発センター 調査研究開発部長 遠藤征也	「経験の浅い初任者でも『ケアプラン点検ができる』ことを実感してもらおう」こと、「『利用者の自立支援に資する』ケアプランとケアプラン点検の役割について考える」ことをねらいとし、講義と個人・グループワークを行った。
			国際医療福祉大学大学院 医療福祉経営専攻 教授 石山麗子	
			社会医療法人 仁生会 西堀病院 経営企画部 在宅支援事業部部長 齊藤眞樹	

(2) 受講者の募集

1) 募集方法

厚生労働省 老健局 認知症施策・地域介護推進課の協力により、都道府県の担当部署宛てにメールで通知を行い、オンラインで受講者を募集した。

2) 募集期間

基礎編は令和 7 年 11 月 20 日（木）～令和 8 年 3 月 12 日（木）、実践編は令和 7 年 11 月 20 日（木）～12 月 5 日（金）²の約 2 週間とした。

3) 申込者数

基礎編は 513 名、実践編は 24 名から申込みが寄せられた。

(3) 申込時アンケート調査の結果

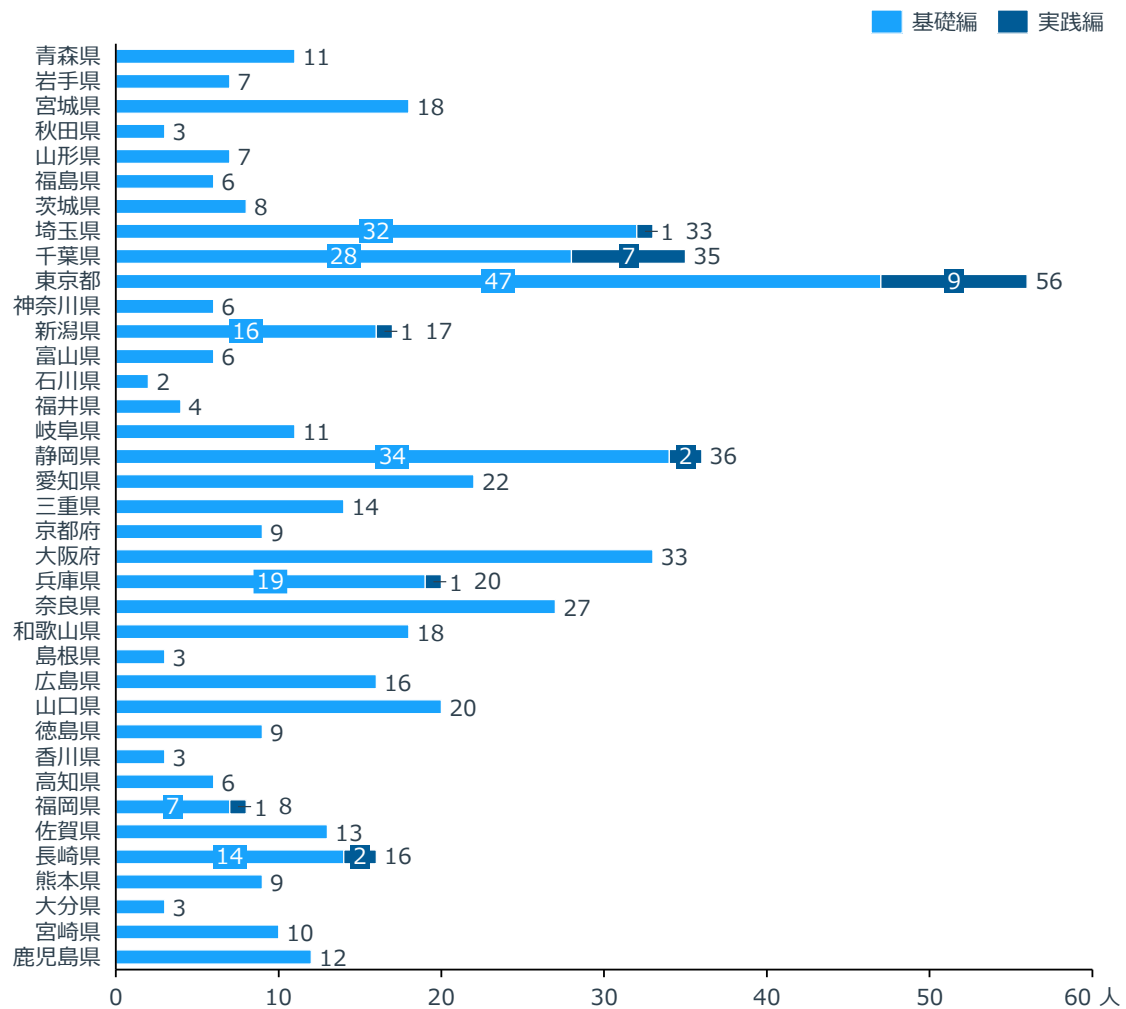
1) 受講申込者の所属

受講申込者は東京都からが最も多く、次いで、静岡県、千葉県、埼玉県、大阪府と続いた。オンデマンド配信の基礎編は全国から申し込みがあった一方、東京都内の会場において対面開催で実施した実践編は首都圏からの申し込みが多い傾向であった。

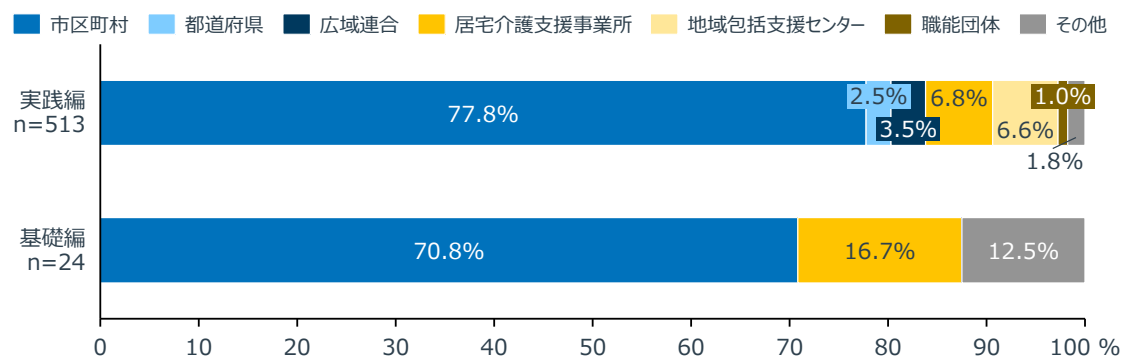
受講申込者の所属は基礎編、実践編ともに市区町村が最も多く、約 7 割を占めた。一方で、基礎編、実践編ともにケアプラン点検業務の受託先と考えられる居宅介護支援事業所、地域包括支援センター、職能団体等が 15%ほどを占めた。

² 当初締切の 11 月 28 日（金）から 1 週間延長した。

図表 2-2 都道府県別の受講申込者数



図表 2-3 所属別の申込者の割合



2) 受講申込者の属性

ケアプラン点検に関連すると考えられる資格³の有無を確認したところ、基礎編、実践編ともにおよそ半

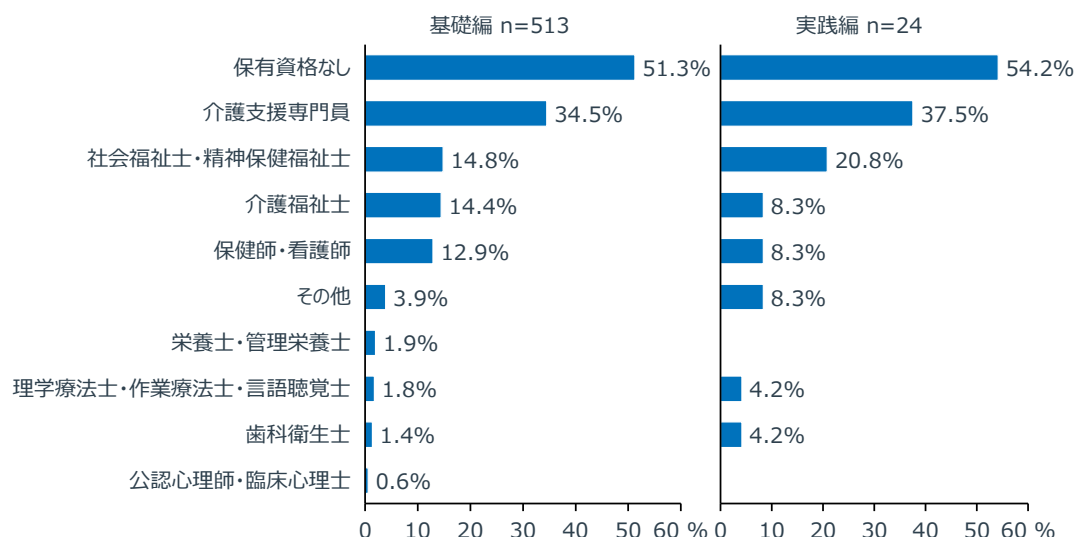
³ 申込時アンケートでは、高齢者福祉の専門職が保有していることのある資格（介護支援専門員、社会福祉士・精神保健福祉士、介護福祉士、保健師・看護師等）の有無を確認した。以降、これらの資格を「ケアプラン点検に関連する資格」ということとする。

数が関連する資格を保有していなかった。一方で、ケアマネジャーが3分の1を占めた。

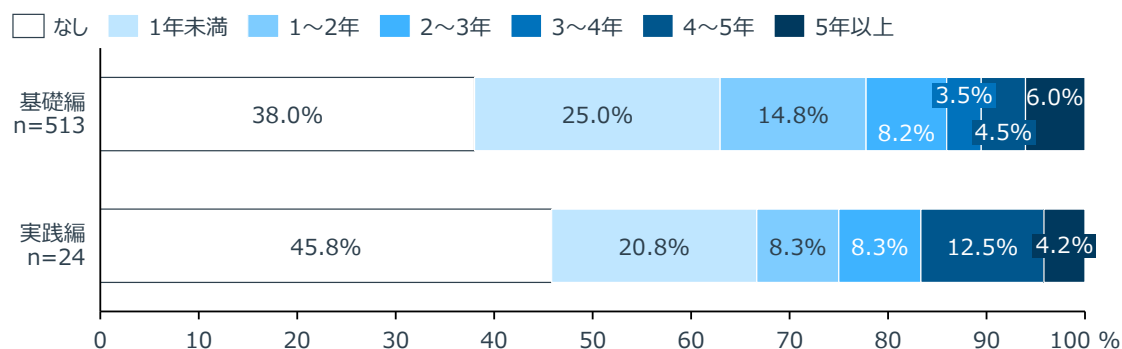
ケアプラン点検の業務経験をみると、基礎編と実践編で構成比の傾向に大きな違いはなく、経験がない者が最も多かった。基礎編、実践編ともに、経験なし～2年未満までで8割弱を占めた。

一方で、社会福祉に関する業務経験をみると、基礎編、実践編ともに1年以上4年未満が最も多いものの、経験なし～20年以上まで受講申込者の経験年数は多様であった。

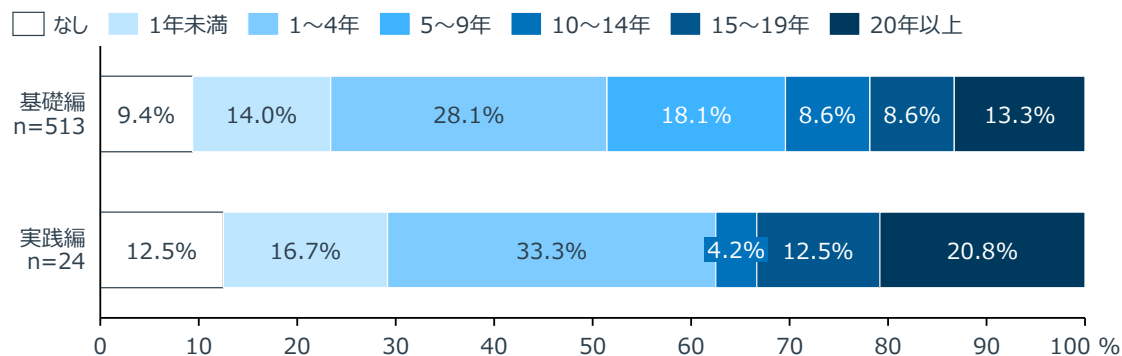
図表 2-4 受講申込書の保有資格



図表 2-5 ケアプラン点検の経験年数



図表 2-6 社会福祉に関する業務の経験年数

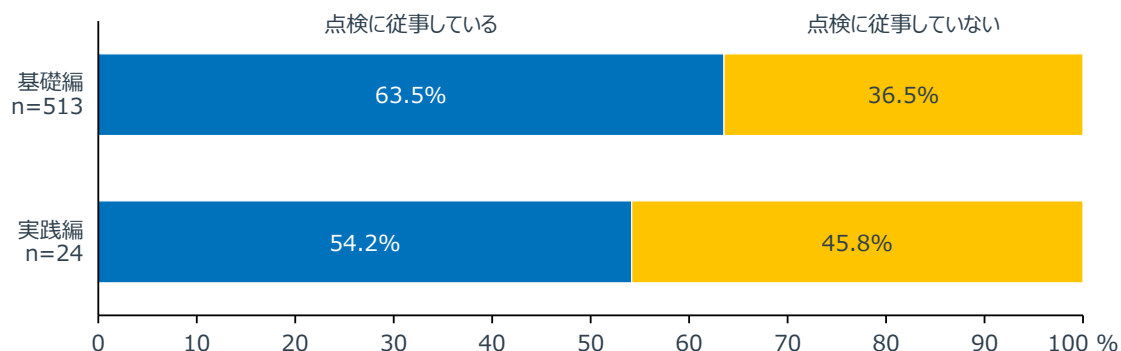


3) ケアプラン点検の業務

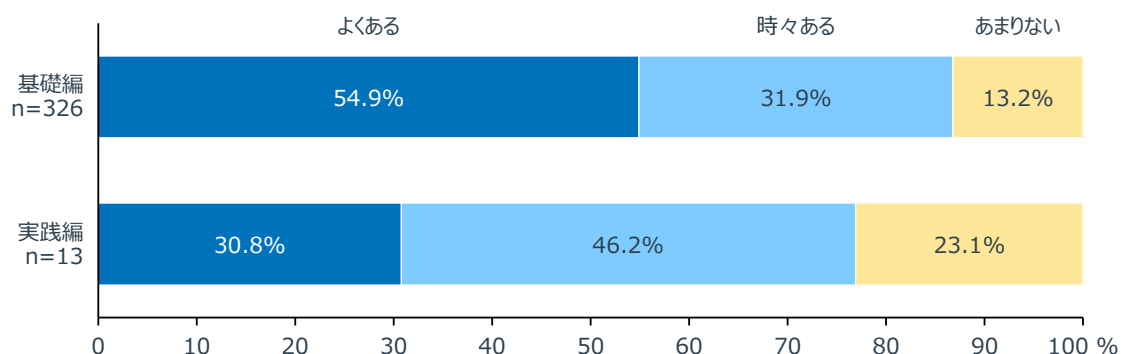
ケアプラン点検業務との関わりをみると、基礎編、実践編ともに過半数がケアプラン点検の業務経験を有していた。ケアプラン点検に従事している者のうち、およそ 8 割が点検の際に困ることが『ある』と回答した。

所属する保険者の点検の目的は、基礎編と実践編で傾向に大きな違いはなく、ケアマネジャーの資質の向上が最も多く、次いで、自立支援に資するケアプランの作成、介護給付費の適正化であった。

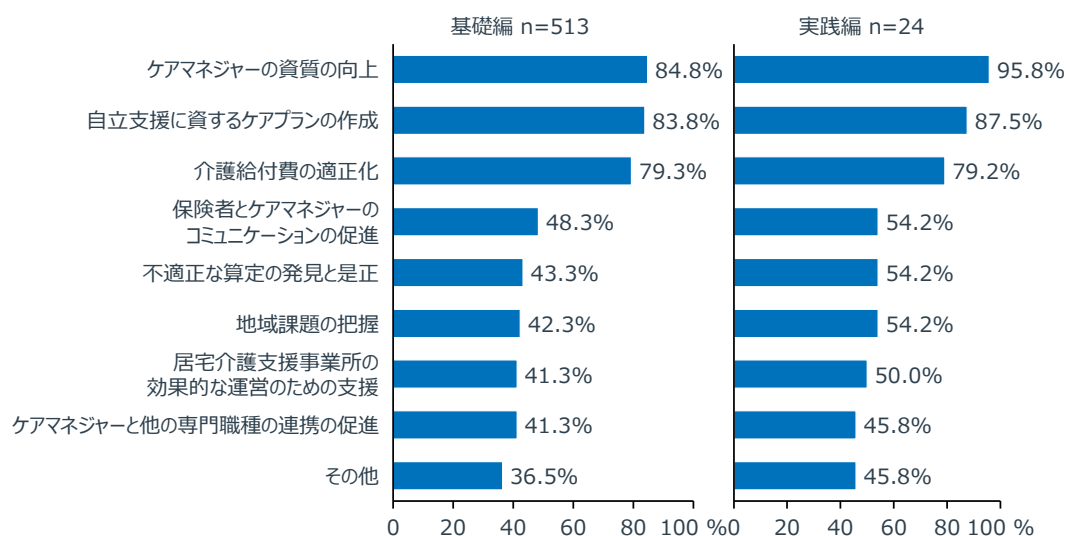
図表 2-7 ケアプラン点検業務との関わり



図表 2-8 ケアプラン点検の際に困ること



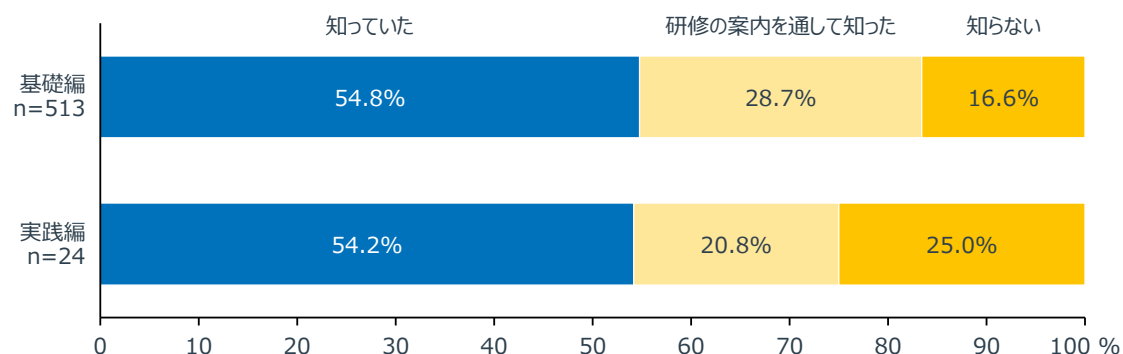
図表 2-9 ケアプラン点検の目的



4) ケアプラン点検支援パッケージの認知状況

ケアプラン点検支援パッケージの認知状況をみると、基礎編、実践編ともに研修の案内を読む前にケアプラン点検支援パッケージを『知らなかった』受講申込者が半数弱を占めた。

図表 2-10 ケアプラン点検支援パッケージの認知状況



(4) 基礎編の開催

1) 開催期間・方法

全科目を事前に撮影し、講義動画をオンデマンド配信した。配信期間は令和7年12月1日（月）～令和8年3月13日（金）の約3.5か月間とし、受講者は期間内の任意のタイミングで受講した。

2) カリキュラム

前期研修の講義動画は3つの講義科目と2つの模範演技でオンデマンド配信を行った。

図表 2-11 基礎編のカリキュラム

#	区分	科目	講師	時間
1	講義	ケアプラン点検の考え方	遠藤征也	45 分

#	区分	科目	講師	時間
2	講義	ケアプラン点検項目の考え方	石山麗子	45 分
3	模範演技	書類点検の方法/面談の方法	齊藤眞樹	30 分
4	事例紹介	実践事例の紹介	北谷正浩	30 分
5	講義	ケアプラン点検支援パッケージの概要	井上裕章	30 分

(5) 実践編の開催

1) 開催日時・方法

令和7年12月12日（金）14時～17時に、東京都内の会場で対面開催の形式で実施した。

2) カリキュラム

各科目の実施に当たっては講師と事前のオンライン打合せを行い、当日の進め方について調整を行った。

図表 2-12 実践編のカリキュラム

時刻	時間	タイトル	講師	実施内容
14:00-14:05	5 分	開会の挨拶	厚生労働省	－
14:05-14:25	20 分	説明①	石山麗子 事務局	・ ケアプラン点検のねらいの説明 ・ 個人ワーク、グループワーク①の説明
14:25-14:55	30 分	個人ワーク	－	・ ケアプラン点検項目に沿った模擬ケアプランの点検（#6、7、23、任意で#33）
14:55-15:05	10 分	休憩	－	－
15:05-15:45	40 分	グループワーク①	遠藤征也 石山麗子 齊藤眞樹	・ 個人ワークの結果（#6、7、23）をグループで共有 ・ 3名の講師が各グループを巡回
15:45-16:00	15 分	説明②	石山麗子 事務局	・ 個人ワークの解答例（#6、7、23、33） ・ グループワーク②の説明
16:00-16:30	30 分	グループワーク②	遠藤征也 石山麗子 齊藤眞樹	・ 説明②を踏まえたグループでの意見交換 ・ 3名の講師が各グループを巡回
16:30-16:40	10 分	発表	－	・ グループワーク①②で話し合ったことを発表
16:40-16:55	15 分	講評	遠藤征也 石山麗子 齊藤眞樹	・ ケアプラン点検人材養成研修【実践編】のまとめ
16:55-17:00	5 分	終了の挨拶	事務局	－

3) 研修の様子

研修は説明①から始まり、ケアプラン点検のねらいおよび個人ワーク・グループワーク①の進め方について説明を行った。その後、受講者は模擬ケアプランを用いて、点検項目#6 ADL、#7 IADL、#23 現在の生活状況の3項目を対象とした個人ワークに取り組んだ。なお、#33 利用者及び家族の生活に対する意向を踏まえた課題分析の結果は任意項目として後半で扱った。

続くグループワーク①では、個人ワークの結果をグループ内で共有し、判断が異なった項目についてなぜそのような判断をしたかを話し合うとともに、評価基準に関する疑問をグループ内で共有した。グループワーク②は講師3名が各グループを巡回した。その後、説明②として、個人ワークの解答例の説明およびグループワーク②の進め方の説明を行った。

グループワーク②では、解答例を踏まえたグループでの意見交換を行い、今後のケアプラン点検の実践に向けた議論が行われた。3名の講師が引き続き各グループを巡回した。最後に、グループワーク①②で話し合った内容を各グループの代表者が発表し、3名の講師が研修全体のまとめとして講評を行った。

会場の様子を図表 2-13 に、グループワーク①②で挙げられた主な意見を図表 2-14 に示す。

図表 2-13 実践編の会場の様子





図表 2-14 グループワークで挙げられた意見

点検項目	主な意見
#6 ADL	・ 食事摂取を含む自立度の判断が難しく、2点・3点の差が付けにくい。 ・ 「転倒リスクが高い」等の記載があっても、なぜ高いのか／どの状況で危ないのかの評価根拠が不足すると判断しづらい。 ・ 見守りにチェックがついていても、普段の生活での見守りの実態（誰が、いつ、どの程度）が不明だと判断が難しい。 ・ 装具や介護ベッドの利用などが記載されても、具体的な動作（自分で操作しているか、介助が必要か）が書かれていないと評価が難しい。 ・ ADL 評価の前提となる情報（利き手など）が欠けると、状態像の把握が難しい。
#7 IADL	・ 洗濯などは工程（回す／干す／取り込む／たたむ等）があり、どこまでを評価対象とするか迷う。 ・ 「一部介助」の基準が曖昧に感じられる。状態像からは「全介助では」と感じるなど、判断が分かれる。 ・ 金銭管理の分担（夫婦それぞれか等）や家族の介入が想定される場合、本人が実施しているか、支援を受けているかが不明だと判断に迷う。 ・ 認知機能に関する情報（認知症高齢者日常生活自立度）がある場合、IADL の「自立」評価とどうやって整合をとるか。
#23 現在の生活状況	・ 個々の項目は評価できても、複数情報を統合して「生活全体像」を最終判断するのが難しい。総合的に見られるかは点検者の力量に左右される。 ・ 「歩けるようになりたい」等は読み取れても、それ以外のニーズや人物像（性格、価値観、日々の楽しみ）が見えないと「その人らしさ」の評価が難しい。 ・ 目標が転倒予防・リハビリ等の一般論に留まり、「その先の生活像」や長期目標に反映されていない。 ・ 生活歴の聞き取り（まず聞き手になる）、ストレングス把握、過去・現在・未来の整理、利用者・家族の気持ちと第三者視点の両立を通じて、アセスメントと第1表・第2表の連続性を高める必要がある。

点検項目	主な意見
	・ 利用者の強みをどうとらえているかをケアマネジャーに気づいてもらえるよう関わる。 ・ 不足している点を指摘するだけでなく、ケアプランで「できていること」「強み」を探す視点が重要である。情報は一か所に書かれないため、ケアプラン全体から情報を収集し、項目に偏らず総合判断する必要がある。
#33 利用者及び家族の生活に対する意向を踏まえた課題分析の結果	・ 利用者・家族の意向を中心に課題を整理するか、できないことを中心に課題を整理するか。意向のみだとケアプランとしての現実性（達成可能性）に課題が生じ得る。 ・ 書面のケアプランだけでは判断が完結しない場合がある。点検者によって、判断が割れた点や、記載されていない背景、ケアマネジャーの意図などは、面談時でケアマネジャーに確認して補完する必要がある。 ・ 評価基準の「利用者及び家族の意向が、固有の具体性をもって記載されている」について、「固有の具体性」の意味・判断基準がわかりづらい。どの程度の記載があれば、「固有の具体性をもって記載されている」と言えるかがわからない。

3. 結果

（1）回答結果の概要

基礎編は 234 名、実践編は 20 名から事後アンケートの回答を得た。回答率はそれぞれ 45.6%と 100.0%であった。結果の概要を図表 2-15 に示す。

図表 2-15 結果の概要

研修区分	申込者数	受講者数	アンケート回答数	アンケート回答率
基礎編	513 名	513 名	234 名	45.6%
実践編	24 名	20 名	20 名	100.0%

（1）基礎編の事後アンケート調査の結果

1) 定量データの結果

カークパトリックの評価モデルに基づく 4 段階（反応・学習・行動・成果）で評価を行った結果、全項目において肯定的評価（「やや思う」「とてもそう思う」の合計）が 9 割を超えた。基礎編の量的アンケート調査の結果を図表 2-16 に示す。

レベル 1（反応）では、「ケアプラン点検業務に直結する内容だと感じたか」で 98.3%、「ケアプラン点検の全体像を理解するうえで役立つ内容だったか」で 99.1%が肯定的に回答しており、研修内容の実務への関連性・有用性について受講者から高い評価を得た。

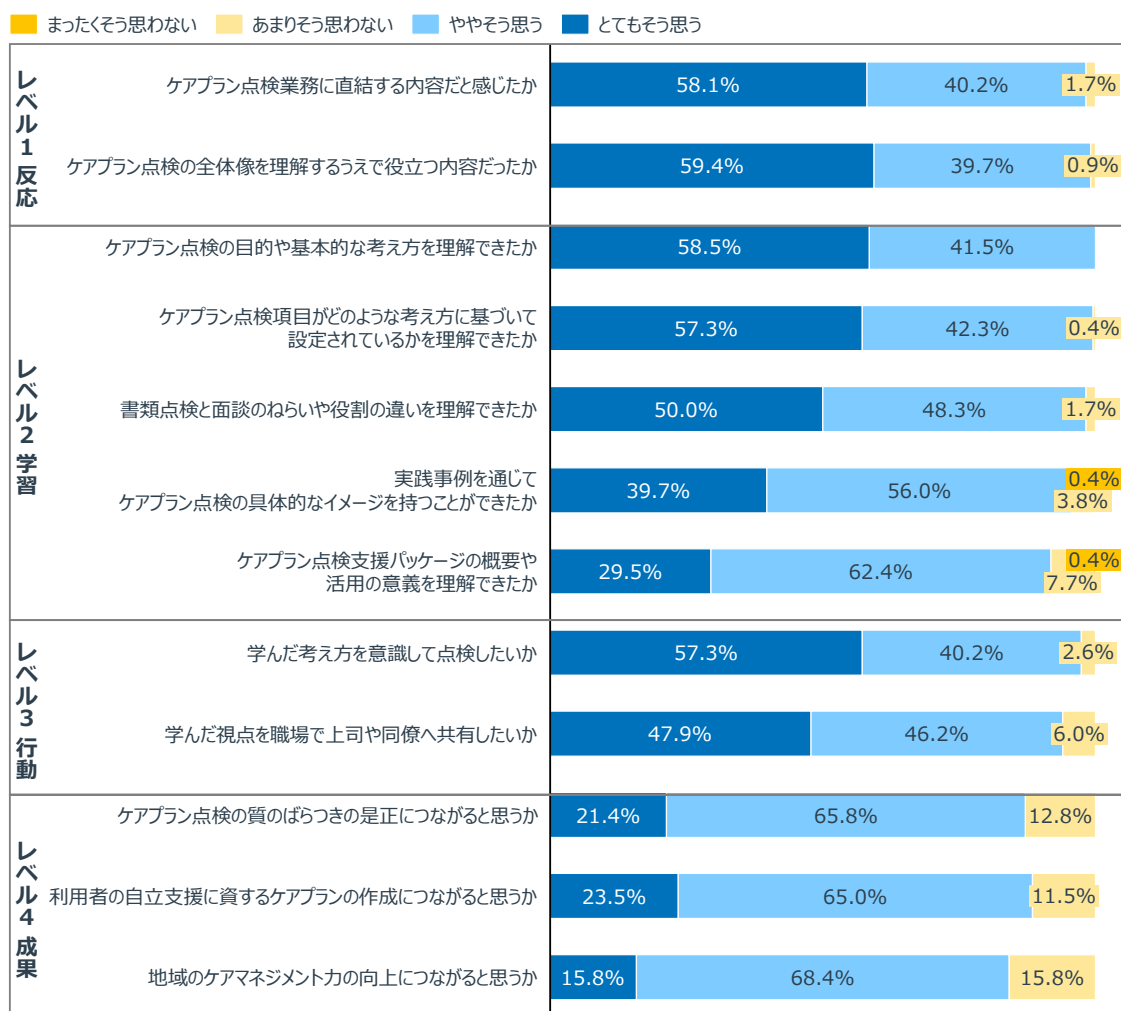
レベル 2（学習）では、「ケアプラン点検の目的や基本的な考え方を理解できたか」（100%）、「書類点検と面談のねらいや役割の違いを理解できたか」（98.3%）など、基本的な理解に関する項

目で特に高い評価が得られた。一方、「ケアプラン点検支援パッケージの概要や活用の意義を理解できたか」では「とてもそう思う」の割合が 29.5%にとどまり、他の項目と比較して「やや思う」の割合が相対的に高かった。

レベル 3（行動）では、「学んだ考え方を意識して点検したいか」が 97.5%、「学んだ視点を職場で上司や同僚へ共有したいか」が 94.1%と高く、研修内容を職場での実践へ転移させる意欲が高いことが確認された。なお、レベル 3 の 2 項目はレベル 1・2 と比較すると「とてもそう思う」の割合がやや低下する傾向がみられた。

レベル 4（成果）では、「ケアプラン点検の質のばらつきの是正につながると思うか」（87.2%）、「利用者の自立支援に資するケアプランの作成につながると思うか」（88.5%）、「地域のケアマネジメント力の向上につながると思うか」（84.2%）と、いずれも 8 割を超える受講者が研修の施策的波及効果を肯定的に見込んでいた。ただし、レベル 4 は他のレベルと比較して肯定的評価の割合がやや低く、また「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」の否定的回答も一定数みられた。

図表 2-16 基礎編 事後アンケート調査結果（量的調査）



n=234

2) 定性データの結果

自由記述回答は、「印象に残ったこと・理解が深まったこと」「今後のケアプラン点検業務で実践したい

こと」「本研修に期待する効果・意見」の3つの大区分に整理された。基礎編の質的アンケート調査の結果を図表23に示す。

「印象に残ったこと・理解が深まったこと」については、点検の基本理念・考え方として、評価・指摘ではなく共に考えるという視点や、ケアマネジャーの仕事への理解と共感の重要性に関する記述がみられた。点検の具体的手法については、実践事例の紹介や、点検後の面談の進め方、学びとなるケースの選定方法に関する記述がみられた。支援ツールの活用については、ケアプラン点検支援ツールを用いることで要点を端的に伝えられること、経験の浅い職員でも従事できることに関する記述がみられた。

「今後のケアプラン点検業務で実践したいこと」については、面談における姿勢・コミュニケーションの工夫として、指摘ではなく共有という視点での点検や、ケアマネジャーに寄り添う面談の実践に関する記述がみられた。自立支援の視点を意識した点検については、フォーマル・インフォーマルのサービスを活用した自立支援の実現につながるプランになっているかを確認するといった記述がみられた。支援ツール・パッケージの活用については、支援ツールの積極的な利活用に関する記述がみられた。

「本研修に期待する効果・意見」については、研修運営への要望として、介護予防ケアプランの考え方に関する研修内容の追加や、研修時期の前倒しを求める記述がみられた。実践事例・動画の充実については、今後の研修においても実践事例の紹介や面談場面の事例をさらに充実させてほしいという記述がみられた。点検の質・基準の統一については、全国的に統一した点検の実施や、地域間で点検の厳しさに極端な差が生じないようにすることを求める記述がみられた。ツール・システムへの要望については、県独自の報告様式との併用による二重チェックの負担を指摘しつつも、支援ツールの評価グラフ等を活用して点検方法の質の統一化を目指したいとする記述がみられた。現場の課題・制約については、点検者の意識や経験による差異が生じていることを指摘する記述がみられた。

図表 2-17 基礎編 事後アンケート調査結果（質的調査）

大区分	小区分	主な回答内容
印象に残ったこと・理解が深まったこと	点検の基本理念・考え方	・ ケアマネジャーの仕事への理解と共感が大切であると気づきました。 ・ 評価・指摘ではなく共に考える機会の充実という観点
	点検の具体的手法	・ 実践事例の紹介がとても興味深かった。 ・ ケアプランは不適切な事例ではなく学びとなるケースを選定することや、点検後の面談の進め方が勉強になった。
	支援ツールの活用	・ ケアプラン点検支援ツールを利用すると、伝えたいことを端的に伝えられそうだと感じました。 ・ ツールを利用し経験の拙い一般事務職でも従事できること
今後のケアプラン点検業務で実践したいこと	面談における姿勢・コミュニケーションの工夫	・ 指摘ではなく共有という視点で点検に臨みたいと思います。 ・ ケアマネ自身が寄り添ってくれていると感じるようなケアプラン点検ができたと思う。
	自立支援の視点を意識した点検	・ ニーズが把握されて、自立支援の実現の方法にフォーマル・インフォーマルのサービスを使うことで立てた計画の支援が活きてくるプランになっているか、を見ていきたい

	支援ツール・パッケージの活用	・ 支援ツールを用いた点検。 ・ ツールをもっと利活用すること
本研修に期待する効果・意見	研修運営への要望	・ 予防プランは、簡素化について国から提示がありますが、考え方について研修があると参考になると思われます。 ・ 時期がもう少し早めだとよいと思った。
	実践事例・動画の充実	・ 今後の研修も、実践事例の紹介があると、大変ありがたいです。 ・ 実際の面談時の例があつたが、もっと事例を充実していただくと大変うれしい。
	点検の質・基準の統一	・ 全国的に統一した点検ができる。 ・ 点検内容や基準を統一し、地域によって「この地域は厳しい」「この地域は甘い」といった極端な差が生じないようにすることで、より公平性が保たれると考える。
	ツール・システムへの要望	・ 県で報告が必要な点検項目があるので、支援ツールを用いると二重チェックをすることになって使いにくいと感じていました。しかし、点検ツールは評価グラフなども出るので、活用して点検方法の質の統一化を目指していきたいと思います。
	現場の課題・制約	・ ケアプラン点検の方法の共有が期待されるが、点検者（行政職や専門職等）の意識や経験による差異が否めない

（２）実践編の事後アンケート調査の結果

１）定量データ

カークパトリックの評価モデルに基づく４段階（反応・学習・行動・成果）で評価を行った結果、全項目において肯定的評価（「やや思う」「とてもそう思う」の合計）が８割を超えた。実践編の量的アンケート調査の結果を図表２-18に示す。

レベル１（反応）では、「ケアプラン点検業務に直結する内容と感じたか」で１００％、「個人ワークはケアプラン点検の理解を深めるのに役立ったか」で１００％が肯定的に回答した。「説明とワークの組み合わせは適切だったか」については９０％が肯定的に回答した一方、「あまりそう思わない」が１０．０％みられた。

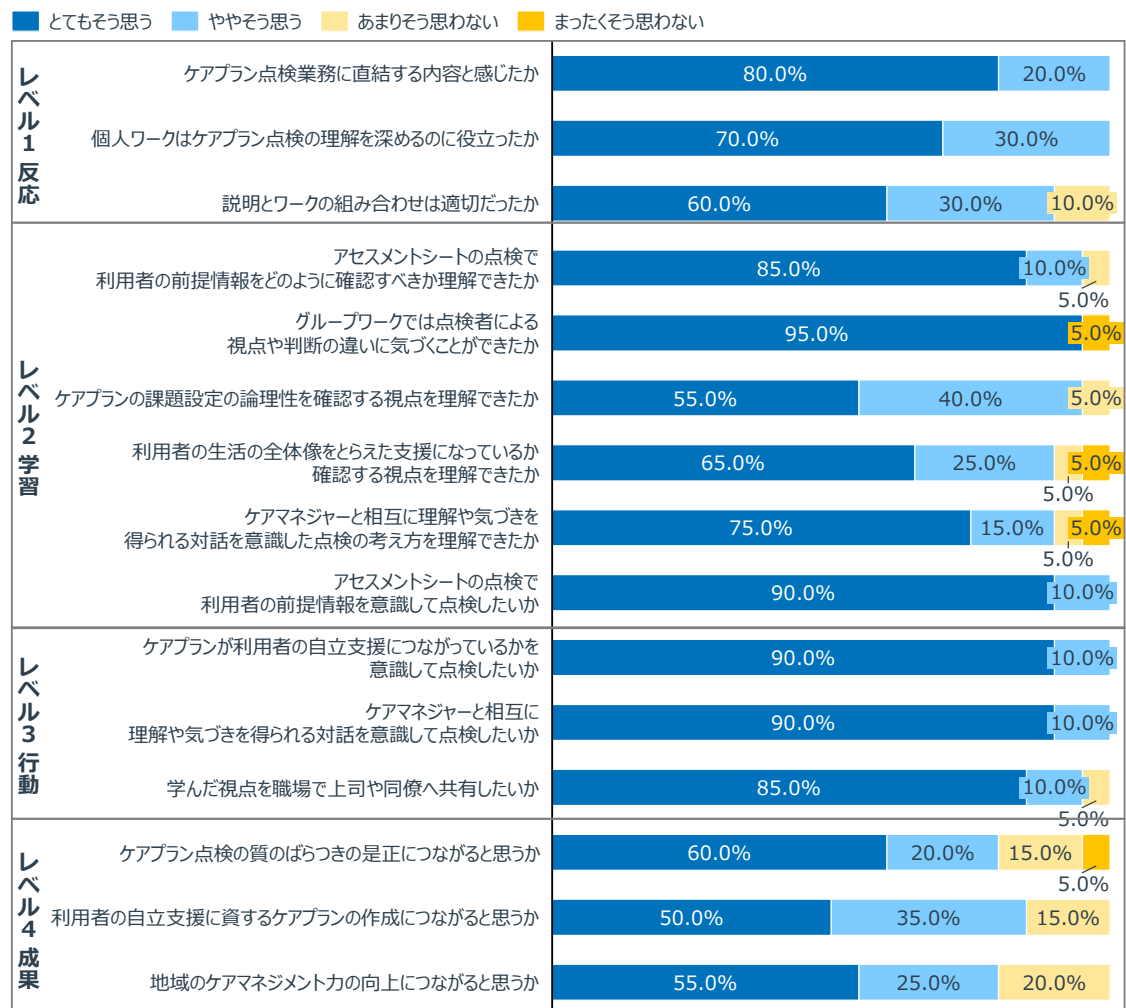
レベル２（学習）では、「グループワークでは点検者による視点や判断の違いに気づくことができたか」が１００％、「アセスメントシートの点検で利用者の前提情報を意識して点検したいか」が１００％と最も高かった。「ケアプランの課題設定の論理性を確認する視点を理解できたか」（９５．０％）、「ケアマネジャーと相互に理解や気づきを得られる対話を意識した点検の考え方を理解できたか」（９０．０％）、「アセスメントシートの点検で利用者の前提情報をどのように確認すべきか理解できたか」（９５．０％）など、各項目で高い肯定的評価が得られた。一方、複数の項目で「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の回答が５．０％みられた。

レベル３（行動）では、「ケアプランが利用者の自立支援につながっているかを意識して点検したいか」（１００％）、「ケアマネジャーと相互に理解や気づきを得られる対話を意識して点検したいか」

(100%)、「学んだ視点を職場で上司や同僚へ共有したいか」(95.0%)と、いずれも高い肯定的評価が得られた。

レベル4（成果）では、「ケアプラン点検の質のばらつきの是正につながると思うか」(80.0%)、「利用者の自立支援に資するケアプランの作成につながると思うか」(85.0%)、「地域のケアマネジメント力の向上につながると思うか」(80.0%)と、いずれも8割の受講者が肯定的に回答した。ただし、レベル4は他のレベルと比較して肯定的評価の割合がやや低く、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の否定的回答も一定数みられた。

図表 2-18 実践編 事後アンケート調査結果（量的調査）



n=20

2) 定性データ

自由記述回答は、「印象に残ったこと・理解が深まったこと」「今後のケアプラン点検業務で実践したいこと」「本研修に期待する効果・意見」の3つの大区分に整理された。実践編の質的アンケート調査の結果を図表 2-19 に示す。

「印象に残ったこと・理解が深まったこと」については、ケアプラン点検に対する理解として、知識・経験が十分でない保険者でも点検できるよう設計された点検方法であることや、各項目の評価基準に関する記述がみられた。利用者に対する理解については、複数人での意見交換を通じてケアプランから利用者

像をイメージする力が深まったとする記述がみられた。保険者とケアマネジャーの役割・視点の違いについては、模擬事例を用いたグループワークを通じ、保険者は記載の有無に着目する一方、ケアマネジャーはアセスメント内容の充実に着目するという視点の違いに気づいたとする記述がみられた。地域の実態把握への活用については、ケアプラン点検が地域の状況把握にも活用できることに関する記述がみられた。

「今後のケアプラン点検業務で実践したいこと」については、職場での共有として、判断基準が明確で未経験者でも取り組みやすい点検方法を他職員と共有し点検に取り入れたいとする記述がみられた。気づきが得られる対話を意識した点検については、記載内容に疑義が生じた場合は面談で確認することの重要性に触れ、事務職であっても疑問点をケアマネジャーに質問し相互に気づきを得られるよう努めたいとする記述がみられた。利用者の生活の全体像を見ることについては、ケアマネジャーを通して利用者の生活を見る視点を持って点検業務に臨みたいとする記述がみられた。

「本研修に期待する効果・意見」については、ケアマネジャーと保険者の相互理解として、ケアマネジャーへの配慮を意識した点検の効果に関する記述がみられた。研修形式に対する意見については、対面でのグループワークによって気づきが得られたとして今後も対面開催を希望する記述がみられた。ケアプラン点検の質の平準化については、点検のばらつき是正への期待や、すべての保険者が参加することを望む記述がみられた。

図表 2-19 実践編 事後アンケート調査結果（質的調査）

大区分	小区分	主な回答内容
印象に残ったこと・理解が深まったこと	ケアプラン点検に対する理解	・ ケアプラン点検支援の意義 ・ 今回の点検方法は、知識・経験があまりない保険者でも点検できるようにしたものであるということだったこと。 ・ 主任ケアマネということもあり、厳しい視点でみてしまいましたが、各項目の評価基準が理解することができてとても参考になりました。
	利用者に対する理解	・ 複数人で意見交換を行ったことで、ケアプランを通して、利用者像をイメージする力が深まったと感じた。
	保険者とケアマネジャーの役割・視点の違い	・ 模擬事例のアセスメントシートの点検をしましたが、保険者は「記載がされているか否かのための視点」ケアマネジャーは「アセスメント内容の充実」にそれぞれ異なった視点で点検に臨んでいる事がわかりました。
	地域の実態把握への活用	・ 地域の状況把握もできるということ
今後のケアプラン点検業務で実践したいこと	職場での共有	・ 判断基準が明確であり、多少の理解があれば未経験者でも点検に取り組むことのできる点について、他職員とも共有し、点検に取り入れていきたいと思います。
	気づきが得られる対話を意識した点検	・ 記載があるが、疑義が生じることは、面談で確認することが重要だと伺った。今後の点検時は、書いてあれば問題ないと判断するだけでなく、事務職であっても疑問点は、CM に質問してお互いに気づきを得るように努める。

大区分	小区分	主な回答内容
	利用者の生活の全体像を見ること	・ ケアマネさんを通して利用者さんの生活を見る視点を持って点検業務を行いたい。
本研修に期待する効果・意見	ケアマネジャー・保険者の相互理解	・ 全体を見てから、他所で取りあげていることなど、ケアマネジャーに確認をして、点検していくというケアマネジャーに配慮した効果は高いと思います。
	研修形式に対する意見	・ 対面でグループワークすることによって、気づきを得ることができたので、今後も対面で行う機会をいただきたいです。ZOOMだと情報収集のみになってしまい、細かい相談等が班内のかたと行いにくかったです。今回は、気軽に聞けてとても有意義でした。
	ケアプラン点検の質の平準化	・ バラツキの是正に繋がりますし、ケアマネと共同して点検する利点についても理解できたのでとても勉強になりました。全保険者が参加して欲しいなと思いました。

4. まとめ

(1) 令和7年度研修のまとめ

1) 申込時アンケート

受講申込者の所属は市区町村が中心であり、基礎編・実践編ともに 7～8 割を占めた。半数以上がケアプラン点検に関連する資格を有しておらず、ケアマネジャーは 3～4 割にとどまった。ケアプラン点検の経験については、経験なし又は 2 年未満の者が約 8 割を占め、初任者層が中心であった。また、経験者の約半数が点検時に困りごとを抱えていると回答しており、実務上の支援ニーズの高さがうかがえた。

2) 基礎編の事後アンケート

基礎編では、全体として 9 割前後が肯定的に回答し、内容の理解や今後の実践意欲は高い水準にあった。一方で、「とてもそう思う」の割合は評価レベルが上がるにつれて低下し、特に成果（レベル 4）では 2 割前後にとどまった。基礎的な知識・視点の習得は進んだものの、実務改善や地域への波及効果に対する確信は十分とはいえなかった。

3) 実践編の事後アンケート

実践編では、すべての評価レベルにおいて肯定的回答が高水準（概ね 8～10 割）を示した。特に、実務との関連性、点検の視点の理解、今後の実践意向について強い評価が得られ、成果面についても約 8 割が効果を見込んでいると回答した。自由記述では、点検に対する理解の深化や、保険者とケアマネジャーの視点の違いへの気づきが多く挙げられた。

4) 実践編グループワークで挙げられた意見

実践編のグループワークでは、各点検項目において評価根拠となる情報の不足や判断基準の曖昧さが点検の難しさにつながる事が参加者間で共有された。また、不足点の指摘にとどまらず利用者の「強み」を探す視点や、書面のみでは判断が完結しない場合における面談での補完の重要性についても認

識が共有された。

（２）研修の実施結果から得られた示唆

基礎編、実践編ともに、受講者の約 7 割は保険者、約 3 割はケアプラン点検事業の委託先と考えられる団体等であり、両者では業務の前提や役割が大きく異なる。このため、受講者の立場や経験に応じた研修内容・方法の設計が重要である。

ケアプラン点検支援パッケージの認知は十分とはいえず、本研修を通じた周知の継続が必要である。併せて、全国的な認知・活用状況を把握するための調査を実施することも有効と考えられる。

研修内容は実務との関連性が高く、受講者のニーズに概ね適合していたと評価できる。また、実践への意欲を高め、視点や判断の違いへの気づきを促したことから、ケアプラン点検に関する意識や行動の変容の契機となった可能性がある。

一方、成果に関する評価は全体として高いものの、他の評価項目と比較すると強い確信には至っていない受講者も一定程度存在する。研修内容が具体的な成果に結び付くよう、より実践的・応用的な内容の充実が求められる。グループワークでは、評価基準の解釈や情報統合による総合判断の難しさが具体的に示された。特に「固有の具体性」等の評価基準の表現については、判断の手がかりとなる具体例や補足説明を提供することが有効と考えられる。

また、評価基準は提示されているものの、その適用の厳密さには個人差があると考えられる。ケアプラン点検支援マニュアル、ケアプラン点検項目マニュアルの公開だけでなく、継続的な研修の実施を通じて、ケアプラン点検の意義や役割、評価の考え方を共有していくことが重要である。

（３）今後の方向性

１）ケアプラン点検人材養成研修の企画・運営

今年度の人材養成研修を基礎編と実践編に整理したうえで、継続的に企画・運営する必要がある。受講者アンケートの結果を踏まえ、受講者の役割や経験に応じて実践編を複数の内容に分けて実施することが望ましい。

また、グループワークで把握された評価基準の解釈の難しさを踏まえ、判断の手がかりとなる具体例や事例解説を研修内容に組み込むことが有効と考えられる。さらに、ケアプラン点検に関するアンケート調査で把握した好事例を研修内容に組み込むことで、受講者に対してより具体的かつ実践的な知見を提供することが有用と考えられる。

２）ケアプラン点検に関する全国実態調査の実施

ケアプラン点検の実態把握、好事例の収集、ならびに点検支援パッケージの認知・活用状況の把握を目的として、全国的な実態調査を実施してはどうか。

第2章 ケアプラン点検項目のブラッシュアップ

1. 目的

令和6年度事業において、点検項目及び点検項目マニュアルを更にケアプラン点検の質の向上に資するものとするを目的に、点検者による評価のばらつきの生じやすさや、ケアプランの実態を踏まえた適切な評価基準が設定されているか等の観点から更なるブラッシュアップを図った。一方で、基準や判断方法の説明について追加検討が必要な項目があるとして、これらの項目を残された課題と位置付けた。

本事業においては、令和6年度事業において残された課題を検討し、ケアプラン点検の実施にあたりケアプラン点検項目及び点検項目マニュアルを用いた判断がしやすくなることを目指し、改訂を行った。

2. 方法

(1) 令和5年度事業における残された課題の整理

令和6年度事業において得られた保険者意見、ケアマネジャー意見等を整理し、ブラッシュアップすべき項目とその内容を明確化した。

(2) ワーキンググループ及び検討委員会における検討

上記において明確化した項目をもとに、ワーキンググループ及び検討委員会意見において具体的なブラッシュアップ内容を議論した。

なお、本事業において改訂を行うにあたっては、令和6年度事業においてケアプラン点検項目とケアプラン点検支援ツールの開発を両輪で行ったことを踏まえ、両者の整合性に乖離が生じないよう、点検基準は変更せず点検項目マニュアルに補記を行うに留めることを前提とした。

3. 結果

ワーキンググループ及び検討委員会における検討をもとに、ケアプラン点検項目及び項目マニュアルを用いた判断のしやすさを高めるため、ケアプラン点検項目マニュアルを以下の通り改訂することとした。

(1) はじめに

主語の欠落や活用方法における点検の流れの分かりにくさ、ならびに用語表記の不統一といった意見が得られたことから、主語を補足したうえで全体を修文するとともに、点検の流れに関する全体像は『ケアプラン点検支援マニュアル』を参照する構成へ見直し、あわせて表記を「介護支援専門員」に統一する改訂を行うこととした。

図表 2-20 はじめに_新旧対照表

新	旧
ケアプラン点検においては、ケアマネジメントのプロセスを踏まえながら、利用者の「尊厳の保持」や「自立支援」に資する適切なケアマネジメントとなっているかを確認することが大切です。その際、保険者と介護支援専門員が基本となる事項とともに検証・確認することで介護支援専門員の「気づき」を促すとともに、「自立支援に資するケアマネジメント」とは何かをともに考えていくことが重要です。 □活用方法・留意点 ケアプラン点検全体の進め方については、『ケアプラン点検支援マニュアルを参照してください。	上記の実現のため、ケアプラン点検においては、ケアマネジメントのプロセスを踏まえ利用者の「尊厳の保持」、「自立支援」に資する適切なケアマネジメントとなっているかを、基本となる事項を介護支援専門員とともに検証確認しながら、介護支援専門員の「気づき」を促すとともに「自立支援に資するケアマネジメント」とは何かを追求することが重要です。 □活用方法・留意点 - ケアプラン点検は以下の手順で進めることを想定しています。 - 点検項目及び本マニュアルの解説を基に、書類（アセスメントシート、ケアプラン第 1 表～第 5 表、モニタリングシート）の記載内容を点検する。 - 書類の点検結果を踏まえ、面談で確認を行うプランを抽出する。 - 抽出したプランの点検結果を踏まえ、面談の際に具体的に確認すべき項目を抽出する。 - 介護支援専門員と面談を行い、プランの内容や記載の考え方等について確認を行う。

（２）点検項目 8：認知機能や判断能力

医師と調査員との間で認識の差異が生じていないか、また認知症と診断する根拠として HDS-R 等の評価結果を把握しているかが重要であるとの意見が得られたことから、これらの観点をケアプラン点検項目マニュアルに追記する改訂を行うこととした。

図表 2-21 点検項目 8：認知機能や判断能力_新旧対照表

新	旧
□ この項目を確認する必要性 日常生活における選択において、本人の意向が表明・反映されるように、意向の表明を支える体制を整える必要があります。そのためには、認知機能の程度や判断能力の状況を把握することが大切です。	□ この項目を確認する必要性 日常生活における選択において、本人の意向が表明・反映されるように、意向の表明を支える体制を整える必要があります。そのためには、認知機能の程度や判断能力の状況を把握することが大切です。

新	旧
・ 認知症のある利用者の支援では、中核症状や行動・心理症状の影響により、一見して意思決定が困難であるとみられる場合であっても、本人にとって適切な意思決定がなされながら尊厳を持って暮らしていくことを重視することが大切です。 ・ <u>また、認知症は進行性であり、症状の出現も日内変動や環境・体調の影響を受けやすいものです。そのため、医師の診断（主治医意見書）と認定調査の結果に乖離がないか確認することや、診断の根拠を確認することも重要です。</u>	・ 認知症のある利用者の支援では、中核症状や行動・心理症状の影響により、一見して意思決定が困難であるとみられる場合であっても、本人にとって適切な意思決定がなされながら尊厳を持って暮らしていくことを重視することが大切です。

（３）点検項目 10：一日に摂取すべき水分 11：実際に摂取した水分量

ワーキンググループにて、点検項目 14 は口腔衛生に限定せず口腔の状態について確認すべきであること、及び項目タイトルを「口腔衛生」から「口腔内」へ変更することが望ましいとの意見があった。そこで、評価基準を見直し、項目名を「口腔内」へ修正することとした。

図表 2-22 点検項目 10：一日に摂取すべき水分 11：実際に摂取した水分量_新旧対照表

新	旧
☐ この項目を確認する必要性 ・ 高齢者は代謝機能の変化によって、水や電解質のバランスを保つ調整能力の低下や、細胞内の水分量の低下がみられます。そのため、高齢者は水分のバランスを崩して脱水状態を起こしやすい状態にあります。一方で、排尿回数を減らすために、水分を控える傾向がみられたり、のどの渇きの認識が遅れたりする等、身体が必要とする水分の補給が難しくなる場合があります。水分補給に留意が必要です。 ・ 必要十分な水分量を摂取しないと、認知機能の低下への影響とともに、併発疾患がある場合その療養への影響も懸念されるため、予防の観点からも必要な水分量と日常の摂取量を把握することが重要です。 ・ なお、水分や食事の摂取量は自立度が高い利用者であっても不足している場合があります、体	☐ この項目を確認する必要性 ・ 高齢者は代謝機能の変化によって、水や電解質のバランスを保つ調整能力の低下や、細胞内の水分量の低下がみられる。そのため、高齢者は水分のバランスを崩して脱水状態を起こしやすい状態にあります。一方で、排尿回数を減らすために、水分を控える傾向がみられたり、のどの渇きの認識が遅れる等、身体が必要とする水分の補給が難しくなる場合があります。水分補給に留意が必要です。 ・ 必要十分な水分量を摂取しないと、認知機能の低下への影響とともに、併発疾患がある場合その療養への影響も懸念されるため、予防の観点からも必要な水分量と日常の摂取量を把握することが重要です。 ・ 摂取量をアセスメントすることが難しい場合、日常で使用している湯飲みの大きさ、湯飲み

新	旧
調変化の原因をアセスメントする際に重要な情報となることがあります。利用者の自立度を問わず、十分な水分や食事を摂取できているかをアセスメントすることが大切です。 - 一方で、<u>心疾患や腎疾患などを有する利用者においては、状態に応じて水分摂取量の制限が必要となる場合もあります。こうした利用者に対しては、主治医の指示や医療職の助言を踏まえ、必要な範囲で水分摂取の管理を行うことが重要です。過剰な水分摂取による心不全や浮腫の悪化等を防ぐとともに、必要な栄養や水分が不足しないようバランスを考慮した支援が求められます。</u> - 摂取量をアセスメントすることが難しい場合、日常で使用している湯飲みの大きさ、湯飲み に何杯ほどの水やお茶を飲むかを質問する等、問いかけの工夫をすることで情報収集ができることもあります。	に何杯ほどの水やお茶を飲むかを質問する等、問いかけの工夫をすることで情報収集ができることもあります。 なお、水分や食事の摂取量は自立度が高い利用者であっても不足している場合があり、体調変化の原因をアセスメントする際に重要な情報となることがあります。利用者の自立度を問わず、十分な水分や食事を摂取できているかをアセスメントすることが大切です。

（４）点検項目 19：「一部介助」項目の特記

デイサービス等のサービス利用による外出を「外出」とみなすかどうかについて統一した基準が必要であるとの意見が得られたことから、サービス利用による外出を含むものとして扱う旨をマニュアルに追記する改訂を行うこととした。

図表 2-23 点検項目 19：「一部介助」項目の特記_新旧対照表

新	旧
☐ 評価における留意事項 外出していない場合は、外出の有無が記載されていれば「2」としてください。 <u>「外出」には、デイサービス等の通所系サービスを利用した外出も含まれます。こうした外出も、利用者の社会参加や心身の活性化に寄与していると考えられます。</u>	☐ 評価における留意事項 外出していない場合は、外出の有無が記載されていれば「2」としてください。

（５）点検項目 23：現在の生活状況

評価基準②に示された「その人らしさを象徴する情報」について、判断が難しく、基準に示された内容すべての記載が必要か分かりにくいとの意見が得られたことから、記載が必要な事項の例示や解釈の考

え方をマニュアルに追記する改訂を行うこととした。

図表 2-24 点検項目 23：現在の生活状況_新旧対照表

新	旧
☐ 評価における留意事項 <u>基準②に示す情報（大切にしてきたこと、価値観等）は、必ずしもすべて記載されている必要はありません。</u>	☐ 評価における留意事項 特になし

（６）点検項目 26：経済状況

評価基準 2「利用可能な介護以外の費用額」について、イメージが湧きにくいケアマネジャーもいるのではないかと意見が得られ、基準表記を「収入」や「介護費用額」とする案も示されたが、基準の文言自体は変更せず、当該基準における考え方や内容についてマニュアルで補足する改訂を行うこととした。

図表 2-25 点検項目 26：経済状況_新旧対照表

新	旧
☐ この項目を確認する必要性 - サービスや支援等の検討においては、介護保険以外の社会保障制度の利用状況も踏まえ、利用者の健康、障害、経済等の情報を把握する必要があります。これらの情報を把握することで、利用者に必要な情報提供を行うとともに、公費情報も踏まえた適切な介護保険利用のためのサービス調整と給付管理が可能となります。 - おおよその収入、年金の種類、介護と介護以外に毎月どの程度の金額が使えるのかなどを把握することで、より個別化の進んだ支援の検討が期待できます。 <u>なお、「介護以外の費用額」とは、医療費、日用品費、交際費などの日常生活に必要な支出に加え、本人の希望に応じた社会参加や趣味活動の実現に充てることができる費用も含まれます。これらを把握することは、本人の意欲や生活の質の向上を支える支援に資する視点として重要です。</u> - 利用者本人への聞き取りにより経済状況を把握することが難しい場合には、家族への聞き	☐ この項目を確認する必要性 - サービスや支援等の検討においては、介護保険以外の社会保障制度の利用状況も踏まえ、利用者の健康、障害、経済等の情報を把握する必要があります。これらの情報を把握することで、利用者に必要な情報提供を行うとともに、公費情報も踏まえた適切な介護保険利用のためのサービス調整と給付管理が可能となります。 - おおよその収入、年金の種類、介護と介護以外に毎月どの程度の金額が使えるのかなどを把握することで、より個別化の進んだ支援の検討が期待できます。 - 利用者本人への聞き取りにより経済状況を把握することが難しい場合には、家族への聞き取りを行う、複数回に分けて対話する等の工夫により、経済状況を把握するよう努めることが大切です。

新	旧
取りを行う、複数回に分けて対話する等の工夫により、経済状況を把握するよう努めることが大切です。	

（７）点検項目 27：本人の役割

評価基準の表記が「現在・希望・想定」の三つに分かれているとも読め、解説がないと判断が難しいことや、点検対象書類をアセスメントシートに限る必要はないのではないかとの意見が得られた。そこで、現在の状況と将来に向けた視点の双方が必要である旨を補足するとともに、書類全体から読み取れる内容を重視する考え方をマニュアルに追記する改訂を行うこととした。

図表 2-26 点検項目 27：本人の役割_新旧対照表

新	旧
☐ この項目を確認する必要性 - 本人の心身の状況に関わらず、できるかぎり本人が自分の慣れ親しんだ役割を継続できるようにすることが大切であり、そのためには役割を継続できるような支援体制を整えることが重要です。本人の状況によらず、できるかぎり地域及び家庭の一員として役割を担い続けられるよう、本人の IADL や社会参加を支援することが重要であり、具体的な支援を考えるためにもまず、本人がそれまでに培ってきた地域や家庭での役割と、現在の実行状況を把握する必要があります。 <u>その上で、現在の役割に加え、これから担いたいと希望する役割や想定する役割についてもアセスメントすることが大切です。</u> - また、日常生活において、できることは自ら行い、できないところを介助するという支援のスタンスが、本人の身体機能の維持・向上や生きがいにつながります。したがって、家族等介護者が、過度の支援をすることは、本人の身体能力を発揮する機会を奪う場合もあることに留意が必要であり、家族等介護者が、本人のできることはなるべく本人自身が行えるよう見守り、必要な支援を見極める姿勢が重要です。	☐ この項目を確認する必要性 - 本人の心身の状況に関わらず、できるかぎり本人が自分の慣れ親しんだ役割を継続できるようにすることが大切であり、そのためには役割を継続できるような支援体制を整えることが重要です。本人の状況によらず、できるかぎり地域及び家庭の一員として役割を担い続けられるよう、本人の IADL や社会参加を支援することが重要であり、具体的な支援を考えるためにもまず、本人がそれまでに培ってきた地域や家庭での役割と、現在の実行状況を把握する必要があります。 - また、日常生活において、できることは自ら行い、できないところを介助するという支援のスタンスが、本人の身体機能の維持・向上や生きがいにつながります。したがって、家族等介護者が、過度の支援をすることは、本人の身体能力を発揮する機会を奪う場合もあることに留意が必要であり、家族等介護者が、本人のできることはなるべく本人自身が行えるよう見守り、必要な支援を見極める姿勢が重要です。 ☐ 評価における留意事項 特になし

新	旧
☐ 評価における留意事項 <u>役割に関する記載は、アセスメントシートに限定せずケアプラン全体（第 1～3 表等）を通じて読み取れるかを確認してください。</u>	

（８）点検項目 31：家族関係や周辺の社会資源との状況

「三世代をさかのぼる」という表現について、「三世代を把握する」としたほうが適切ではないかとの意見が得られたことから、当該表記を「三世代を把握する」に改訂することとした。

図表 2-27 点検項目 31：家族関係や周辺の社会資源との状況_新旧対照表

新	旧
☐ この項目を確認する必要性 ・ ジェノグラムは、利用者を中心とした家族関係や、原則として三世代を把握する世代関係を一つの図に表したもので、同居関係は円を描くことで表現します。利用者への支援は、その人のみならず、その家族の状況や関係も視野に入れて行うことが必要となります。家族の全体像をつかみ、その抱える問題を整理することや、誰にどう働きかけたら良いかなど、支援の在り方を検討するために役立ちます。 ・ エコマップは、利用者と家族やさまざまな社会資源との関係を、地図のように系統的、図式的に描き出したもののことです。作成することで、利用者を取り巻く人間関係や社会関係が明確に把握できるという利点があります。 ・ ジェノグラムやエコマップは、利用者の問題状況が生み出された理由を理解したり、援助を提供すべき部分がどこかを考えたりする際に役立ちます。 ・ ジェノグラムやエコマップは、本人や家族の状況を客観的に把握することに役立ちます。例えばヤングケアラー等の存在を把握するためには 3 世代の記載が推奨されます。	☐ この項目を確認する必要性 ・ ジェノグラムは、利用者を中心とした家族関係や、原則として三世代をさかのぼる世代関係を一つの図に表したもので、同居関係は円を描くことで表現します。利用者への支援は、その人のみならず、その家族の状況や関係も視野に入れて行うことが必要となります。家族の全体像をつかみ、その抱える問題を整理したり、誰にどう働きかけたら良いかなど、支援の在り方を検討するために役立ちます。 ・ エコマップは、利用者と家族やさまざまな社会資源との関係を、地図のように系統的、図式的に描き出したもののことです。作成することで、利用者を取り巻く人間関係や社会関係が明確に把握できるという利点があります。 ・ ジェノグラムやエコマップは、利用者の問題状況が生み出された理由を理解したり、援助を提供すべき部分がどこかを考えたりする際に役立ちます。 ・ ジェノグラムやエコマップは、本人や家族の状況を客観的に把握することに役立ちます。例えばヤングケアラー等の存在を把握するためには 3 世代の記載が推奨されます。

（９）点検項目 33：利用者及び家族の生活に対する意向を踏まえた課題分析の結果

評価基準②において家族の属性を記載することとしている一方、評価における留意事項で「続柄や名前がなくても誰の意向か明らかであれば該当あり」とするのは判断が矛盾するのではないかとの意見が得られた。そこで、基準の考え方を優先し、評価における留意事項の該当記載を削除する改訂を行うこととした。

図表 2-28 点検項目 33：利用者及び家族の生活に対する意向を踏まえた課題分析の結果_新旧対照表

新	旧
☐ 評価における留意事項 <u>特になし</u>	☐ 評価における留意事項 ②について、具体的に続柄や名前の記載がなくても、アセスメント内容等から判断し、家族のうち誰の意向なのかが明らかに判断できる場合は、該当ありとしてください。

（１０）点検項目 34：総合的な援助の方針における自立の具体性

評価基準②の記載について、必要な情報である一方で判断基準が難しく、緊急時の対応機関やその連絡先、または緊急事態の考え方や対応方法のすべてを記載すべきか、いずれを記載すべきかが分かりにくいとの意見が得られた。現場では対応機関や連絡先までの記載が一般的であるとの指摘も踏まえ、求められる記載内容を整理したうえでマニュアルに追記する改訂を行うこととした。

図表 2-29 点検項目 34：総合的な援助の方針における自立の具体性_新旧対照表

新	旧
☐ 評価における留意事項 <u>基準②に列挙された事項は、必ずしもすべて記載してある必要はありません。これらは例示であり、利用者の心身状態や生活環境に合わせて必要な情報が記載されているかを確認します。</u>	☐ 評価における留意事項 特になし

（１１）点検項目 35：アセスメントで抽出した課題に基づくニーズの記載

この項目を確認する必要性のうち、「ニーズを解決するために何をを目指すのか」という表現について、ニーズは目指す生活像があって初めて解決されるものであり違和感があるとの意見が得られたことから、「解決するために何をを目指すのか」の文言を削除する改訂を行うこととした。

図表 2-30 点検項目 35：アセスメントで抽出した課題に基づくニーズの記載_新旧対照表

新	旧
☐ この項目を確認する必要性 ・ 第 2 表は、居宅サービス計画書全体の中核となるものです。 <u>どのような課題（ニーズ）があるのかを明確にしていくことが必要になります。</u>	☐ この項目を確認する必要性 ・ 第 2 表は、居宅サービス計画書全体の中核となるものです。どのような課題（ニーズ）があり、それを解決するために何をを目指すのかとい

新	旧
・ 利用者及び家族の抱える問題点や困りごとに対して、安易に即サービスで対応するというのではなく、利用者及び家族とともに、その問題や困りごとの本質（原因や背景）や、解決するためには何が必要なのかを明らかにしていく過程が大切になります。 ・ 「できない」「できるのにしていない」「している」などの行為の現状把握だけではなく、その状況を招いている原因や背景についての整理が必要です。その上で、「できるようになる」「するようになる」などの改善の可能性を探ります。 サービスは課題（ニーズ）を解決するための1つの手段であることを理解し、利用者が自立を目指していけるような内容となっていることが大切になります。	・ うことを明確にしていけることが必要になります。 ・ 利用者及び家族の抱える問題点や困りごとに対して、安易に即サービスで対応するというのではなく、利用者及び家族とともに、その問題や困りごとの本質（原因や背景）や、解決するためには何が必要なのかを明らかにしていく過程が大切になります。 ・ 「できない」「できるのにしていない」「している」などの行為の現状把握だけではなく、その状況を招いている原因や背景についての整理が必要です。その上で、「できるようになる」「するようになる」などの改善の可能性を探ります。 ・ サービスは課題（ニーズ）を解決するための1つの手段であることを理解し、利用者が自立を目指していけるような内容となっていることが大切になります。

（12）点検項目 39：本人の役割設定

第2号被保険者に限らず受障前の役割を把握することが重要であり、あわせて第2号被保険者の受傷前の状態についてはアセスメントシートも点検対象としたほうがよいこと、また主体が利用者であるにもかかわらず「利用者にも」という表現には違和感があるとの意見が得られた。そこで、第2号被保険者に限定する記載を削除するとともに主な点検対象書類の見直しを行い、表記を「利用者」へ修正する改訂を行うこととした。

図表 2-31 点検項目 39：本人の役割設定_新旧対照表

新	旧
☐ この項目を確認する必要性 ・ 日常生活において、できることは自ら行い、できないところを介助するという支援のスタンスが、本人の身体機能の維持・向上や生きがいにつながります。 ・ したがって、本人のできることはなるべく本人自身が行えるよう見守り、必要な支援を見極める姿勢が重要です。利用者の意欲が高まるような内容を提案したり、もしくは<u>利用者自身に</u>どのような取組が必要かを考えてもらった上で、合意した内容を援助内容として決定する	☐ この項目を確認する必要性 ・ 日常生活において、できることは自ら行い、できないところを介助するという支援のスタンスが、本人の身体機能の維持・向上や生きがいにつながります。 ・ したがって、本人のできることはなるべく本人自身が行えるよう見守り、必要な支援を見極める姿勢が重要です。利用者の意欲が高まるような内容を提案したり、もしくは利用者自身にもどのような取組が必要かを考えてもらった上で、合意した内容を援助内容として決定する

ことが大切です。 本人の心身の状況に関わらず、できるかぎり本人が自分の慣れ親しんだ役割を継続できるようにすることが大切であり、そのためには役割を継続できるような支援体制を整えることが重要です。 □ 評価における留意事項 本項目については第 1 表～第 3 表の記載から判定してください。 <u>但し、受障前（要介護となる前）の役割等についてはアセスメントシートもあわせて確認してください。</u>	ことが大切です。 本人の心身の状況に関わらず、できるかぎり本人が自分の慣れ親しんだ役割を継続できるようにすることが大切であり、そのためには役割を継続できるような支援体制を整えることが重要です。 □ 評価における留意事項 本項目については第 1 表～第 3 表の記載から判定してください。 但し、第 2 号被保険者のプランの場合は、受障前（要介護となる前）の役割等についてはアセスメントシートもあわせて確認してください。
--	---

（１３）点検項目 43：利用者の意思を反映したサービス事業所の利用

本項についても、主体は利用者であるにもかかわらず「利用者にも」という表現には違和感があるとの意見が得られたことから、当該表記を「利用者に」へ修正する改訂を行うこととした。

図表 2-32 点検項目 43：利用者の意思を反映したサービス事業所の利用_新旧対照表

新	旧
□ この項目を確認する必要性 - 短期目標達成のために具体的に何を行うのが明確であり、<u>利用者の意欲が高まるような内容を提案することや、もしくは利用者自身にどのような取り組みが必要かを考えてもらった上で、合意した内容を援助内容として決定することが大切です。</u> 「サービス内容」の記載にあたっては、利用するサービスの内容を単に記載するのではなく、短期目標を達成するために必要な支援のポイントや、セルフケア・家族の役割等を記載するという視点を持つことが大切になります。	□ この項目を確認する必要性 - 短期目標達成のために具体的に何を行うのが明確であり、利用者の意欲が高まるような内容を提案したり、もしくは利用者自身にもどのような取り組みが必要かを考えてもらった上で、合意した内容を援助内容として決定することが大切です。 「サービス内容」の記載にあたっては、利用するサービスの内容を単に記載するのではなく、短期目標を達成するために必要な支援のポイントや、セルフケア・家族の役割等を記載するという視点を持つことが大切になります。

（１４）点検項目 58：サービス事業所との連絡・モニタリング内容

「内容の詳細は問わない」との記載のみでは基準 3 と基準 2 の違いが分かりにくいとの意見が得られたことから、各評価基準の差異が明確に理解できるよう、その考え方をマニュアルに追記する改訂を行うこととした。

図表 2-33 点検項目 58：サービス事業所との連絡・モニタリング内容_新旧対照表

新	旧
☐ 評価における留意事項 <u>No.58 サービス事業所との連絡・モニタリング</u> <u>内容：</u> <u>基準 2 は、サービス提供事業所との連絡・モニタリングが行われている何らかの記録が存在することを確認するものです。基準 1 に示す「サービス担当者より個別サービス計画を受領した記録」や「当該月に行ったサービス事業所との連絡・調整や利用者に関する情報」以外の何らかの記録があればこれに該当するものとします。例えば、サービス提供に関する意見交換、サービスの実施状況の確認の記録等があげられます。</u>	☐ 評価における留意事項 記載なし

(15) 点検項目 60：本人の心身状態に関する変化の医療者への報告

「長期的な変化」がどのような意味を指すのか分かりにくいとの意見が得られたことから、モニタリング実施月の変化に限定せず、一定期間を通じた長期的な変化を指す旨をマニュアルに追記する改訂を行うこととした。

図表 2-34 点検項目 60：本人の心身状態に関する変化の医療者への報告_新旧対照表

新	旧
☐ 評価における留意事項 <u>No.60 本人の心身状態に関する変化の医療者への報告：</u> 利用者の変化を捉えているかは、次の 2 点から総合的に判断します。 ① 前回モニタリング時以降の変化が記載されているか。 ② 必要に応じて、居宅サービス計画作成（変更）日以降の長期的な変化（ <u>モニタリング実施月に限定しない変化</u> ）が記載されているか。	☐ 評価における留意事項 利用者の変化を捉えているかは、次の 2 点から総合的に判断します。 ③ 前回モニタリング時以降の変化が記載されているか。 ④ 必要に応じて、居宅サービス計画作成（変更）日以降の長期的な変化が記載されているか。

(16) 点検項目 61：ケアプランに位置付けられている多職種との連携

基準の文言である「日常的な」連携は実質的に難しいことから、「定期的に」としたほうがよいのではないかと意見が得られたが、基準そのものの修正を要するため、基準表記は現行のままとし、評価におけ

る留意事項において「日常的に」の意味合いを補足する改訂を行うこととした。

あわせて、次回の基準改定においては、「日常的に」を「サービス利用時やモニタリングの時期等、定期的に」とする表現への修正を検討することとする。

図表 2-35 点検項目 61：ケアプランに位置付けられている多職種との連携_新旧対照表

新	旧
☐ 評価における留意事項 ・ <u>基準 3 に示す「日常的に」双方向のやり取りが行われているかどうかは、例えばサービス利用の際や毎月のモニタリングの時期等に多職種と双方向のやり取りが行われているかどうかで判断してください。</u> ・ 多職種との連携状況はケアプラン（及びセサメントシート等）の記載内容から確認が難しいため、必要に応じて面談において確認を行ってください。	☐ 評価における留意事項 多職種との連携状況はケアプラン（及びセサメントシート等）の記載内容から確認が難しいため、必要に応じて面談において確認を行ってください。

（17）点検項目 62：ケアプランに位置付けられていない多職種との連携

ケアプランに位置付けられていない多職種との連携について、現行の表記ではイメージが湧きにくく例示があるとよいとの意見が得られたが、「この項目を確認する必要性」の中で既にリハビリテーション職の視点が例示されていることから、当該点に関する追記は行わないこととした。

加えて、面談での確認を前提とする項目であるにもかかわらず基準に掲載されている点の実態にそぐわないとの意見も得られた。そこで、書類点検時点では確認対象とするものの、結果としてレーダーチャートに反映される項目ではないことを明確にする説明を追記する改訂を行うこととした。

図表 2-36 点検項目 62：ケアプランに位置付けられていない多職種との連携_新旧対照表

新	旧
☐ 評価における留意事項 ケアプランに位置付けられていない多職種との連携状況は <u>重要かつ発展的な内容である一方、ケアプラン（及びアセスメントシート等）の記載内容からは確認が難しいため、評価基準 2 に示す検討の記録があれば 2 点、なければ 1 点を付けた上で面談において確認を行ってください。書類点検の段階で確認及び採点を行います、本項目の採点は点検結果を示すレーダーチャートには反映されません。</u>	☐ 評価における留意事項 ケアプランに位置付けられていない多職種との連携状況はケアプラン（及びアセスメントシート等）の記載内容から確認が難しいため、面談において確認を行ってください。

4. まとめ

(1) 改訂の実施

令和6年度事業において残された課題である「基準や判断方法の説明について追加検討が必要な項目」について、検討委員会及びワーキンググループでの検討を経て改訂を行った。改訂は、点検者がより判断しやすく、ケアプラン点検を通したケアマネジメントの質の向上に資するものとなることを目指す一方で、ケアプラン点検支援ツールの開発と足並みを揃える観点から、基準そのものは改訂せずマニュアルの充実化に焦点を絞って検討した。

結果、本事業では「はじめに」、「8. 認知機能や判断項目」、「10. 一日に摂取すべき水分量」等、計18の項目に改訂を加えることとした。

(2) 残された課題

今年度事業においては、ワーキンググループ、検討委員会での議論を中心に、判断のしやすさを高めるための改訂を行った。

令和6年度事業において、点検項目の改訂は今年度を起点に3年に1回の頻度で実施していくことが望ましいとしたが、ケアマネジメントの潮流や社会情勢の変化をふまえ、3年に一度は基準も含む見直しを行うことに加え、マニュアルについては軽微な修正を継続的に行っていく必要性が示唆された。今後、ケアプラン点検におけるケアプラン点検項目及び項目マニュアルの活用実態を把握しながら、活用されている場合にどの項目において判断の難しさがあるか等を確認し、より活用しやすいマニュアルとしていく必要がある。

第3章 ケアプラン点検支援ツールのブラッシュアップ

1. 目的

令和5年度の事業において、保険者のケアプラン点検業務の負担軽減と質の向上を実現するためには、「点検に係る書類の点検時間を短縮できる仕組みの社会実装」が不可欠であることが明らかになった。また、自然言語処理技術や生成AI等を活用し、ケアプラン点検対象の書類を自動で分析することで、一定の業務時間削減が期待できることが示唆された。このような示唆を受けて令和6年度には生成AIを活用してケアプラン点検を支援する「WEB版ケアプラン点検支援ツール」のロードマップ案を作成した。加えて、令和6年度事業の中で「ケアプラン点検のためのアセスメント様式」の検証を進めた結果、ケアプラン点検のためのアセスメント様式を運用する際にはケアマネジメント業務において用いるアセスメント様式から本様式への転記の手間が利用のハードルになるという問題が抽出された。

これらの課題・問題を踏まえ、本事業におけるケアプラン点検支援ツールのブラッシュアップパートでは、次の4つのテーマに取り組んだ。

第1に、「WEB版ケアプラン点検支援ツールの試験開発」。第2に、開発されたWEB版ケアプラン点検支援ツールを用いた「WEB版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証」。第3に、「生成AIによる所定のアセスメント様式への転記可能性の検証」。第4に、第1～3の検証結果を踏まえた、令和6年度に検討した『WEB版ケアプラン点検支援ツール』のロードマップ案の更新である。

本章ではこれら4つのテーマの実施方法・結果について記す。

2. 方法

(1) WEB版ケアプラン点検支援ツールの試験開発

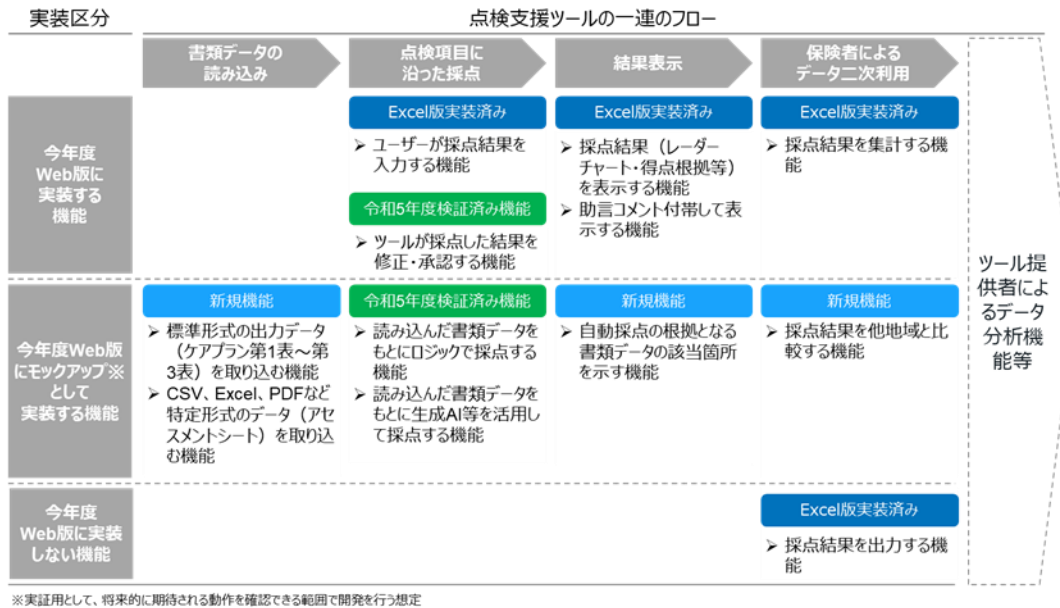
令和5年度の事業において、保険者のケアプラン点検業務の負担軽減と質の向上を実現するためには、「点検に係る書類の点検時間を短縮できる仕組みの社会実装」が不可欠であることが明らかになった。また、自然言語処理技術や生成AI等を活用し、ケアプラン点検対象の書類を自動で分析することで、一定の業務時間削減が期待できることが示唆された。

このような結果を踏まえ、「(1) WEB版ケアプラン点検支援ツールの試験開発」では、開発の要件に盛り込むべき機能を検討した。まず、エクセル版ケアプラン点検支援ツールに備わっている機能については網羅的に実装することとした。その上で、生成AI等を活用した自動書類確認機能（標準形式のケアプラン第1から第3表のデータ、及びアセスメントシートPDFを取り込み、当該データをもとに生成AI等を活用してケアプラン点検支援項目に沿って書類の確認を行う機能）の試験的実装を行うこととした。加えて、ケアプラン点検支援ツールが将来的にクラウド上に構築されるWebアプリケーション等として提供されることを意識し、ケアプランの書類確認結果を集計し地域比較できる機能の試験実装を行うこととした。なお、自動書類確認機能の実装の仕様については、令和5年度に精度検証や一部機能仕様を検討した結果を踏まえ、検討を行った。

図表 2-37 本事業におけるケアプラン点検支援ツールの開発範囲

(参考) Web版ケアプラン点検支援ツールの開発範囲

・これまでの検討を踏まえて、今年度Web版ケアプラン点検支援ツールに具備されるべき機能を整理した。



このような検討のもと、実際に検討された要件定義書について図表 2-38～図表 2-49 の通り示す。ただし、本開発はアジャイル形式で実施をしたため、詳細仕様については要件定義時から変更した部分に留意が必要である。

なお、本事業で開発する「WEB 版ケアプラン点検支援ツール」は本事業内で実施する保険者実証で利用することを目的に開発した。このことから、保険者環境での試験を行いやすくすることを目的に、セットアップ時を除く運用時に完全ローカル環境（インターネットその他の外部ネットワークに接続しない環境）で動作することを前提に要件定義を行った。具体的には1台の端末にサーバ・クライアント環境を両方構築し、生成AIサービスとのリアルタイム連携は行わず、開発環境で生成AIに作成させたデータを適時表示する仕様でツールを開発した。

図表 2-38 ケアプラン点検支援ツール要件定義資料 | ログイン画面

1.ログイン画面
1. 前提 本製造ではローカルPCでの実現を前提としているため、セキュリティ・ユーザ管理については最低限とする。 ユーザ名・パスワードは事前発行し、同一端末を利用する全てのユーザが発行された1つのユーザを利用する。 2. 機能概要 以下の機能を持つものとする。 ・パスワード・ユーザ名によるログイン認証 3. 機能詳細 1. 入出力に関して ・ログイン認証に失敗した場合はエラーメッセージを出力する。 2. ユーザ認証に関して ・ログイン画面以外の画面はすべて、ログインによるユーザ認証を必要とする。 ・ブラウザを開いた場合ユーザは再ログインを必要とする。 ・ユーザ情報を利用したデータの閲覧制限は行わない。

図表 2-39 ケアプラン点検支援ツール要件定義資料 | メニュー画面

2.メニュー画面	
1. 前提	本機能はUI/UXに重点に置いた本プロジェクトにおいてユーザが各主要機能に迅速かつ直感的にアクセスするためのメニュー画面を提供するためのものである。
2. 機能概要	以下の機能を持つものとする。 ・各主要機能への画面遷移
3. 機能詳細	1. 遷移可能な画面について ・メニュー機能、共通ヘッダ共に以下の画面への遷移を可能とする。 1. ケアプラン書類確認画面 2. ケアプラン書類確認・評価結果データ管理画面 3. アセスメントシート統一様式転記画面

図表 2-40 ケアプラン点検支援ツール要件定義資料 | 共通ヘッダ

共通ヘッダ	
1. 前提	本機能は、ログイン後の全ての画面に共通するヘッダを提供する。主にメニュー画面の持つ機能を元として、共通的な遷移処理を行う。
2. 機能概要	ログイン後の全画面に共通するヘッダは以下の機能を持つものとする。 ・各主要機能への遷移 ・ログアウト
3. 機能詳細	1. 遷移可能な画面について ・「3.メニュー画面」と同様の遷移先を持つものとする。

図表 2-41 ケアプラン点検支援ツール要件定義資料 | ケアプラン書類確認画面（1/2）

3.ケアプラン書類確認画面	
1. 前提	本機能では、アセスメントシートとケアプラン表を利用した自動書類確認および手動書類確認機能を提供する。 UIデザインについては製造工程で確定とし、本要件定義では保持・処理が必要な項目・機能仕様を定義する。 本製造では自動書類確認機能はモックとし、結果については入力に紐づき事前設定した値が出力されることとする。
2. 機能概要	以下の機能を持つものとする。 ・手動書類確認機能（属性情報、項目ごとの書類確認） ・自動書類確認機能
3. 機能詳細	1. 手動書類確認機能について ユーザがケアプランを確認し、確認結果を入力する。 1. 記入内容 ・属性情報 「データー一覧.xlsx」の分類「ケアプラン書類確認入力内容、属性情報」 ・各項目の書類確認結果 「データー一覧.xlsx」の分類「ケアプラン書類確認入力内容」 2. 備考 ・書類確認日はAPI取得で画面上にテキストとして表示するが、処理上はフォームの一部として扱う。 ・入力内容に不正な値が設定された場合はバリデーションエラーのメッセージを表示する。 ・入力途中に別画面への遷移を行おうとした場合、入力途中の内容が消える旨のアラートを表示する。 3. 書類確認入力完了時処理 ボタン押下をきっかけに、書類確認結果をデータベースに保存し、評価を行う。その後、評価結果画面へと遷移する。 評価のロジックについては、前年度Excel版の評価ロジックに準拠する。

図表 2-42 ケアプラン点検支援ツール要件定義資料 | ケアプラン書類確認画面（2/2）

3.ケアプラン書類確認画面
2. 自動書類確認機能について ユーザが用意した資料をアップロードすることで、自動で書類確認を行い、結果を書類確認機能の入力フォームに反映する。 1. 入力内容 ・ アセスメントシート(pdf) ・ ケアプラン表 3種(csv) 必須項目：アセスメントシート pdfがアップロードされたらアセスメントシートとして、csvが入力されたらアップロード時にケアプラン表として認識する。 アップロード済みであることを示すチェックボックスを表示し、アップロード状況を利用者が確認できることとする。 2. 処理内容 本製造では内容をモックとし、今後のAIを利用した判定をイメージできる内容とする。 pdfのファイル名を読み込み、それに紐づいた点数（「データ一覧.xlsx」の分類「ケアプラン書類確認入力内容」）と根拠を出力する。 ・ 点数の出力は、手動書類確認入力フォームに格納する形で行われる。 ・ 根拠の出力は、付与情報としてモーダル・アコーディオン等でクリックを契機に確認できることとする。 ・ 本機能により入力された値については、自動入力されたものであることがわかる印を持たせることとする。

図表 2-43 ケアプラン点検支援ツール要件定義資料 | 評価結果画面（1/2）

4.評価結果画面
1. 前提 本画面は「3.ケアプラン書類確認画面」で入力した確認結果から、本ツール独自の指標を用いて算出したケアプラン記載の充実度の評価を表示するものである。 UIデザインについては製造工程で確定とし、本要件定義では保持・処理が必要な項目・機能仕様を定義する。 2. 機能概要 以下の機能を持つものとする。 ・ ケアプラン評価、面接時のアドバイスポイントの表示 ・ ケアプラン評価のPDF形式でのエクスポート 3. 機能詳細 1. ケアプラン評価、面接時のアドバイスポイントの表示について 1. 表示内容 ・ 属性情報 「データ一覧.xlsx」の分類、属性情報 ・ 評価結果 「データ一覧.xlsx」の分類、ケアプラン評価結果 ・ 面接時アドバイス 「データ一覧.xlsx」の分類、ケアプランアドバイス ・ 書類確認入力内容 「データ一覧.xlsx」の分類、ケアプラン書類確認入力内容 ・ 各アドバイスの追加説明（書類確認項目の意義・対応例） 2. 表示形式 ・ 必須項目についてのみ常に表示し、一部項目についてはモーダル・アコーディオン等での表示制御を行う。Excel版に基づいた方針は以下。 ・ 属性情報・評価結果、面接時アドバイス（評価内容に応じたアドバイス）は常に表示する。 ・ 書類確認入力内容は初期非表示としてクリックを契機に表示する。（3. 書類確認入力内容との比較の表示形式についてを参照） ・ 面接時アドバイスの項目、書類確認項目の意義、対応例については一部初期非表示としてクリックを契機に表示する。（4. 面接時のアドバイス項目の表示形式についてを参照） ・ 評価結果の項目、分類評価はレーダーチャートでの表示を想定する。

図表 2-44 ケアプラン点検支援ツール要件定義資料 | 評価結果画面 (2/2)

4.評価結果画面	
	3. 書類確認入力内容との比較の表示形式について ・ 評価結果に紐づく書類確認入力内容が比較できるように、モーダル・アコーディオン等で表示の制御を行う。
	4. 面接時のアドバイス項目の表示形式について 評価内容に応じたアドバイスの項目について、以下の観点でフィルタ・ソートし、表示する。 1. 重点ポイントアドバイス 書類確認結果が「1」だった項目のうち、評価区分に影響が高い上位5項目のアドバイス 2. カテゴリごとのアドバイス 書類確認結果が「1」だった項目のうち、各分類評価に影響が高い上位5項目のアドバイス 3. 運営判断基準 運営判断基準項目のうち評価が「1」の項目のアドバイス
	3. PDF出力ファイルに関して ・ 以下の内容をPDFファイルとして出力する。 ・ 属性情報 「データ一覧.xlsx」の分類、属性情報 ・ 評価結果 「データ一覧.xlsx」の分類、ケアプラン評価結果 ・ 面接時アドバイス 「データ一覧.xlsx」の分類、ケアプランアドバイス

図表 2-45 ケアプラン点検支援ツール要件定義資料 | データ管理画面 (1/2)

5.ケアプラン書類確認・評価結果データ管理画面	
	1. 前提 本機能では、DBに保存されたケアプラン書類確認・評価結果データを一覧表示するとともに、当該データを帳票として一括出力する機能を提供する。 UIデザインについては製造工程で確定とし、本要件定義では保持・処理が必要な項目・機能仕様を定義する。
	2. 機能概要 以下の機能を持つものとする。 ・ ケアプラン書類確認・評価結果データの一覧表示 ・ ケアプラン書類確認・評価結果データの一覧出力 ・ ケアプラン書類確認完了入力 ・ 各画面への遷移（評価結果画面、集計結果画面）
	3. 機能詳細 1. ケアプラン書類確認・評価結果データ一覧表示について ・ 表示内容：「データ一覧.xlsx」の分類「ケアプラン書類確認入力内容」および「ケアプラン評価結果」に該当する項目を保持・表示する。 ・ 表示方法： ・ 一覧は表形式での表示とする。 ・ 全量を表示せず、必要項目・必要件数の表示とし、非表示項目についてはボタン等の押下で表示可能とする。モーダル・アコーディオンでの表示切り替え、ページングでの件数制御を想定する。具体的な項目については製造時に確定する。 ・ 以下項目について、ソート可能とする。：書類確認日 ・ 以下項目について、フィルタ可能とする。：書類確認日、市区町村名、点検者名、ケアマネージャー名、事業所名、被保険者名

図表 2-46 ケアプラン点検支援ツール要件定義資料 | データ管理画面 (2/2)

5.ケアプラン書類確認・評価結果データ管理画面	
	2. ケアプラン書類確認完了入力について ・ 実務でのデータ管理時、ケアプラン書類確認（ケアマネージャーへのフィードバックまで含めた書類確認作業）が完了したデータとそうでないデータで閲覧の優先順位に大きく差がある事が考えられる。そのため、以下機能を提供する。
	1. ケアプラン書類確認の完了入力 2. ケアプラン書類確認完了データの非表示（フィルタ） 3. ケアプラン書類確認・評価結果データの一覧出力について ・ ケアプラン書類確認・評価結果データをCSV形式で一括出力する。 ・ 出力内容については、フィルタ・ソートの状態を反映したものとする。
	4. 各画面への遷移について ・ データ一覧の中から1件を押下することで、対象データの評価結果確認画面へ遷移する。 ・ リンクを選択することで、集計画面へ遷移する。

図表 2-47 ケアプラン点検支援ツール要件定義資料 | 集計結果画面 (1/3)

6.集計結果画面	
1. 前提	本機能では、特定の期間内での評価の傾向について比較・検討するため、保存済みの評価結果データを元とした集計結果の閲覧機能を提供する。 実際の表示UIデザイン・集計ロジックについては製造時に確定とし、ここでは対象となるデータ、処理想定を記載する。 利用者が社会実装時のイメージを持てるように、一部のデータ（都道府県・全国のデータ）について固定値のモックデータを用意する。
2. 機能概要	以下の機能を持つものとする。 ・データ集計表示 ・帳票出力
3. 機能詳細	1. データ集計表示について ケアプラン書類確認・評価で入力されたデータを元に、以下の集計を表示する。 1. 集計内容 1. 集計対象データ 「データ一覧.xlsx」の分類「ケアプラン評価結果」に該当するデータを元に集計を行う。 2. 集計の分類軸 以下の縦軸単位は組み合わせて同時集計できる。 ・事業所別、ケアマネージャー別、範囲別[自治体（市区町村）・都道府県・全国]（モックとしての用意） ・評価区分別 3. 集計期間 ・全期間、年次 4. 集計ロジック ・平均値、中央値、カウント合計数、閾値越えのカウント合計数

図表 2-48 ケアプラン点検支援ツール要件定義資料 | 集計結果画面 (2/3)

6.集計結果画面	
2.表示形式	前年度作成のExcel版の表示内容を元に、基本の表示形式は表形式とする。補足として一部の値について、視覚化された図での表示を想定する。 1. 表形式での表示内容 画面での表示が直感的になる範囲で同時に集計内容を表示できるとし、excel版に基づいて以下項目を基本表示する。 1. 集計の分類軸になった対象（事業所名 / ケアマネージャー名 / 範囲名） 2. 対象データの総数 3. 評価区分別の件数 4. 分類評価の平均値 / 中央値 / 閾値越えの件数 表示切り替え可能な項目の想定は以下。 1. 集計の分類軸対象（事業所名 / ケアマネージャー名 / 範囲名） 2. 分類評価の集計ロジック（平均値 / 中央値 / 閾値越えの件数） 2. 図としての表示内容 以下の方式で表示を想定する。 ・レーダーチャート ・棒グラフ 表示対象となるデータについては、対象データの総数、分類評価の値とする。

図表 2-49 ケアプラン点検支援ツール要件定義資料 | 集計結果画面 (3/3)

6.集計結果画面	
2. 帳票出力について	・ユーザからの要求に応じ、PDFやCSV形式のファイルを出力する。 ・出力内容については、ソートの状態を反映したものとする。

（２）WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証

１）実証方法の全体像整理

まず、WEB 版ケアプラン点検支援ツール実証の目的・全体像を整理した。実証の目的・全体像の整理は、「WEB 版ケアプラン点検支援ツール」の要件定義（実装する機能）や、開発完了時期の想定も踏まえ行った。

２）リクルート

WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証のリクルートは本事業内で実施する保険者向け研修の申し込みとあわせて広く全国の自治体に協力を依頼した。結果、31 の保険者から参加の申し出があり、対象の保険者に個別に実証内容を説明した。その上で、実証に対応可能と回答頂いた保険者に実証を依頼した。

３）アンケート調査

アンケート項目の検討は、実証の目的と照らし、「現状のケアプラン点検の手法」、「WEB 版ケアプラン点検支援ツール活用による効果」、「WEB 版ケアプラン点検支援ツールの機能ごとの UI⁴/UX⁵」の分類のもと、検討した。なお、「WEB 版ケアプラン点検支援ツール活用による効果」及び「WEB 版ケアプラン点検支援ツールの機能ごとの UI/UX」については「（１）WEB 版ケアプラン点検支援ツールの試験開発」を利用したときに生ずる効果を仮説として設定し、仮説に対応するようなかたちで設問を検討した。具体的設問項目については図表 2-50～図表 2-52 の通り示す。

図表 2-50 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証 | アンケート項目（現状のケアプラン点検の手法）

分類	番号	設問項目
現状のケアプラン点検の手法について	1	現状、ケアプラン点検の際にケアプランに関連する書類を確認していますか。
	1-1	点検を行う対象書類について教えてください。
	1-2-1	1 事例のケアプランに関連する書類を確認するのにかかるおおむねの時間をお答え下さい。（平均：分）
	1-2-2	1 事例のケアプランに関連する書類を確認するのにかかるおおむねの時間をお答え下さい。（最大：分）
	2	ケアプランに関連する書類を確認する際に、確認項目を使用していますか。

⁴ 利用者がシステムやツールを操作する際に接する画面、ボタン、入力欄、表示項目等の接点

⁵ 利用者がシステムやツールの利用を通じて得る体験全体。操作のしやすさ、分かりやすさ、満足感等

分類	番号	設問項目
	2-1	確認項目を使用している場合、どのような項目を使用しているか教えてください。

図表 2-51 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証 | アンケート項目（WEB 版ケアプラン点検支援ツール活用による効果）

分類（仮説）	番号	設問項目
業務効率の向上が実現する	3	実証の中で、WEB 版ケアプラン点検支援ツールの自動書類確認機能を活用してケアプラン点検の書類確認を行ったときにかかったおおむねの時間をお答え下さい。（分）
	4	実証の中で確認した事例を 1 から目検で、ケアプラン点検項目に沿ってケアプラン点検の書類確認を行った場合、どの程度の時間がかかると思うかお答え下さい。（分）
	5	WEB 版ケアプラン点検支援ツールの自動書類確認機能を利用することで、点検項目に沿って書類を確認するにあたって必要な情報を探す時間が短縮されると思うかお答えください。
	5-1	（そう思わない、全くそう思わないと答えた場合）その理由をお答えください。
	5-2	そのほか、自動書類確認機能があることによって、そのような作業で書類の確認時間が短縮すると思う要因があればお答えください。
書類確認観点の統一化が実現する	6	ケアプラン点検支援ツールを使うことで、点検者ごとのスキル差があっても、同じ観点でケアプランを確認できると思うかお答えください。
	6-1	（そう思わない、全くそう思わないと答えた場合）その理由をお答えください。
面談の質向上が実現する	7	WEB 版ケアプラン点検支援ツールの結果確認画面で示される情報は、実際にケアマネジャーとの面談時に活用しやすい内容だと思うかお答えください。
	7-1	（そう思わない、全くそう思わないと答えた場合）その理由をお答えください。
ケアプラン点検結果の二次利用が可能になる	8	WEB 版ケアプラン点検支援ツールの集計画面で示される情報は、業務に活用できると感じましたか。
	8-1	（そう思わない、全くそう思わないと答えた場合）その理由をお答えください。
	8-2-1	業務のどのような場面で役立つと感じたかお答えください。（事業所別の集計結果）
	8-2-2	業務のどのような場面で役立つと感じたかお答えください。（ケアマネジャー別の集計結果）

分類（仮説）	番号	設問項目
	8-2-3	業務のどのような場面で役立つと感じたかお答えください。（全国・所属する都道府県との比較結果）
地域のケアマネジメントの質の向上が実現する	9	設問 3～8 の内容を踏まえ、WEB 版ケアプラン点検支援ツールの活用は地域のケアマネジメントの質の向上につながると考えるかお答えください。
	9-1	（そう思わない、全くそう思わないと答えた場合）その理由をお答えください。
その他	10	WEB 版ケアプラン点検支援ツールが社会実装された場合、利用したいと考えるかお答えください。
	11	（とてもそう思う、そう思うと答えた場合）利用にあたって程度の費用負担ができると考えるかお答えください。

図表 2-52 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証 | アンケート項目（WEB 版ケアプラン点検支援ツールの機能ごとの UI/UX）

分類（仮説）	番号	設問項目
メニュー画面は適切な UI/UX 備える	12	メニュー画面全体のレイアウトは見やすいと感じたかお答えください。
	13	各メニューの名称や説明はわかりやすいと感じましたか
	14	各メニューの名称や説明はわかりやすいと感じましたか
書類確認画面は適切な UI/UX 備える	15	書類確認画面のレイアウトは見やすいと感じたかお答えください。
	15-1	書類確認画面の各入力欄は入力しやすいと感じたかお答えください。（属性情報入力欄）
	15-2	書類確認画面の各入力欄は入力しやすいと感じたかお答えください。（書類確認結果入力欄）
自動書類確認機能は適切な UI/UX 備える	16	自動書類確認機能を使用するとき、対象書類は簡単に指定できましたか。
	17	AI が示す自動書類確認結果は見やすいと感じましたか。
	18	AI が示す自動書類確認結果（項目ごとの評価点・理由）は妥当だと感じましたか。
	18-1	（そう思わない、全くそう思わないと答えた場合）その理由をお答えください。
	19	AI が示す根拠となる箇所の範囲は妥当だと感じましたか。
	19-1	（そう思わない、全くそう思わないと答えた場合）その理由をお答えください。
評価結果画面は適切な UI/UX 備える	20	評価結果画面のレイアウトは見やすいと感じたかお答えください。

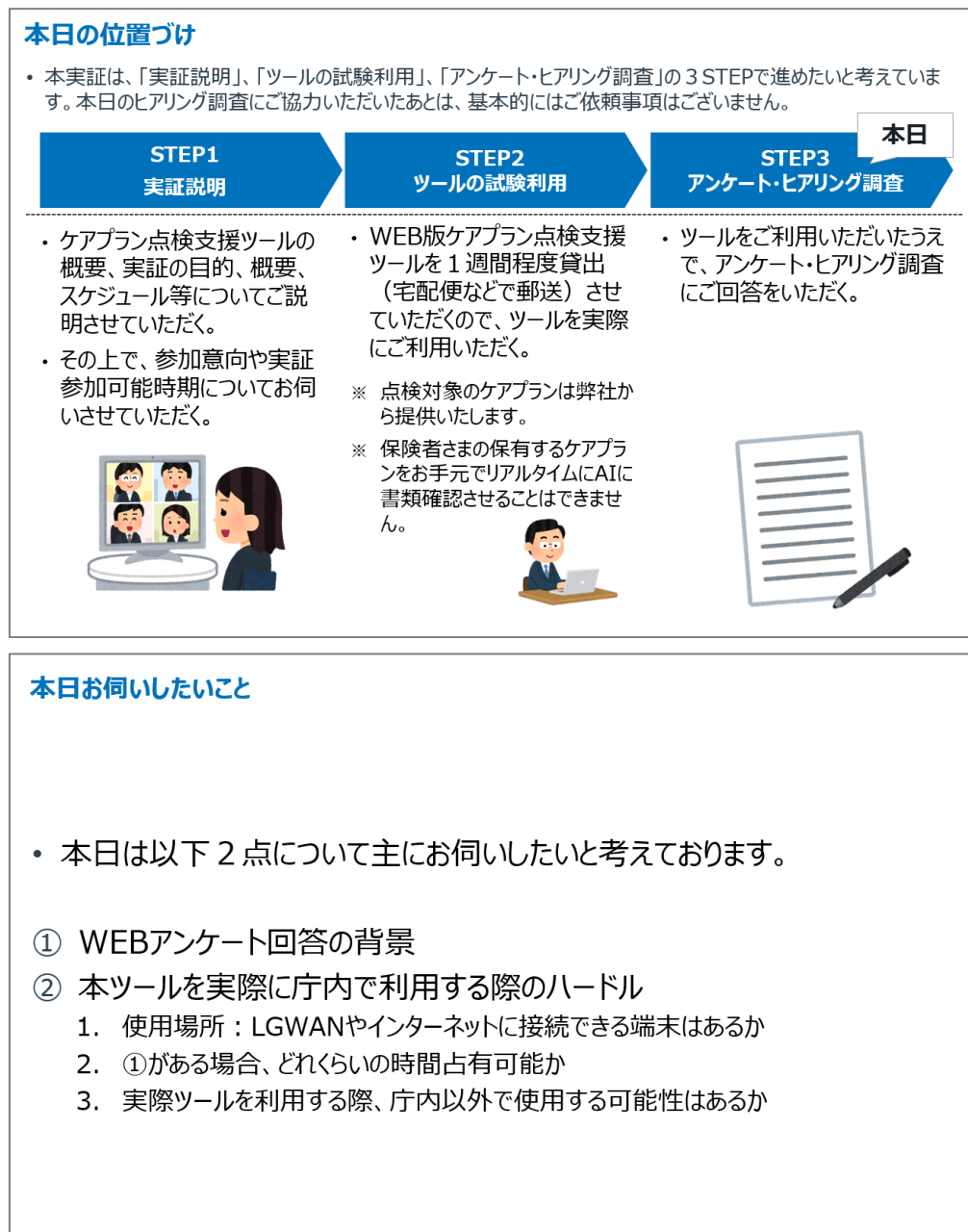
データー一覧画面は適切な UI/UX 備える	21	データー一覧画面のレイアウトは見やすいと感じたかお答えください。
	22	目的のケアプランが探しやすいと感じたかお答えください。
	23	業務上必要な順番で並べ替えができる（並べ替え項目が十分）と感じたかお答えください。
	24	業務上必要な順番で並べ替えがしやすい（操作がしやすい）と感じたかお答えください。
集計画面は適切な UI/UX 備える	25	集計画面のレイアウトは見やすいと感じたかお答えください。
全画面共通は適切な UI/UX 備える	26	文字の大きさは見やすい大きさと感じたかお答えください。
	26-1	（そう思わない、全くそう思わないと答えた場合）その理由をお答えください。
	27	フォントの種類は見やすいと感じたかお答えください。
	27-1	（そう思わない、全くそう思わないと答えた場合）その理由をお答えください。
	28	画面間の移動は迷わず操作できると感じたかお答えください。
	28-1	（そう思わない、全くそう思わないと答えた場合）その理由をお答えください。
トラブル	29	実証時、トラブルはありましたか。
	29-1	（はいと答えた場合）トラブルの内容をお答えください。

4）ヒアリング調査

ヒアリング項目は、アンケート項目で確認しきれない回答の背景や、インターネットや LGWAN⁶環境下で保険者がクラウドサービス使用する際の障壁について確認することを目的に設定した。具体の項目については図表 2-53 の通り示す。なお、ヒアリングはアンケート後 30 分・オンライン会議形式で行った。

⁶ LGWAN（Local Government Wide Area Network。総合行政ネットワーク）とは、地方公共団体の組織内ネットワークを相互に接続し、地方公共団体間のコミュニケーションの円滑化及び情報共有による情報の高度利用を目的とする、高度なセキュリティを維持した行政専用のネットワークである。

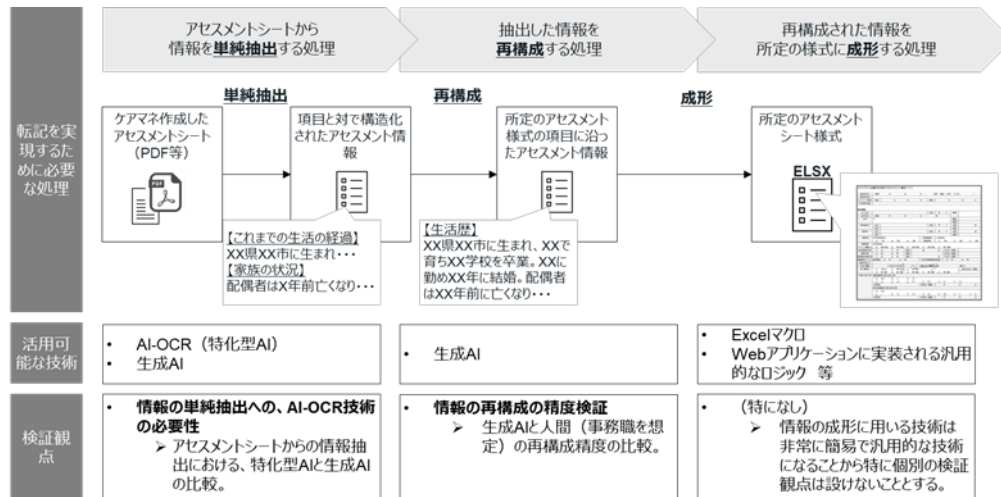
図表 2-53 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証 | ヒアリング資料



（3）生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証

生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証では、まず「転記」機能を①単純抽出②再構成③成形の3機能に分解をし、それぞれの機能についてどのような検証観点を設定すべきか図表 2-54 の通り検討した。

図表 2-54 生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証 | 転記機能の分解と検証観点

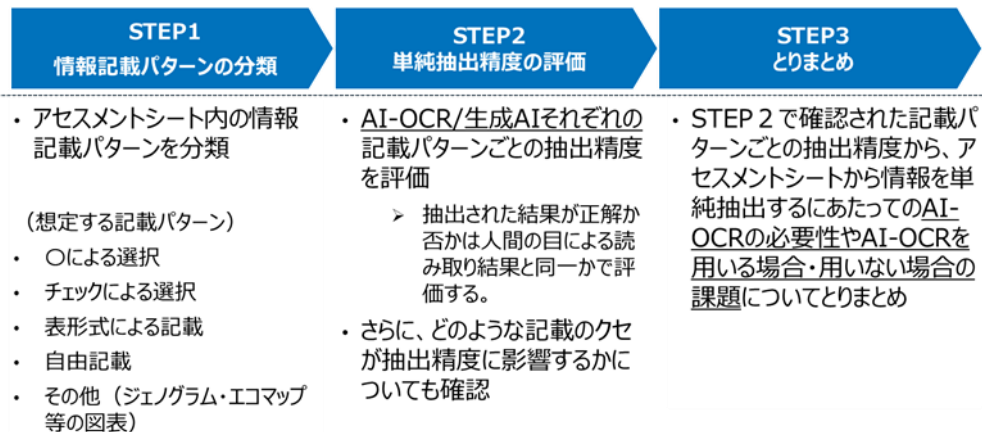


そのうえで、①単純抽出②再構成について検証対象と定め、各検証のステップについてそれぞれ整理した。なお、③の成形についてはエクセルのマクロ機能等の活用等、簡易で汎用的な技術で実現できると判断をし、本事業においては検証観点を設けず、検証対象から除外した。

1) 単純転記の精度検証

単純転記の精度検証のステップは図表 2-55 の通り整理した。

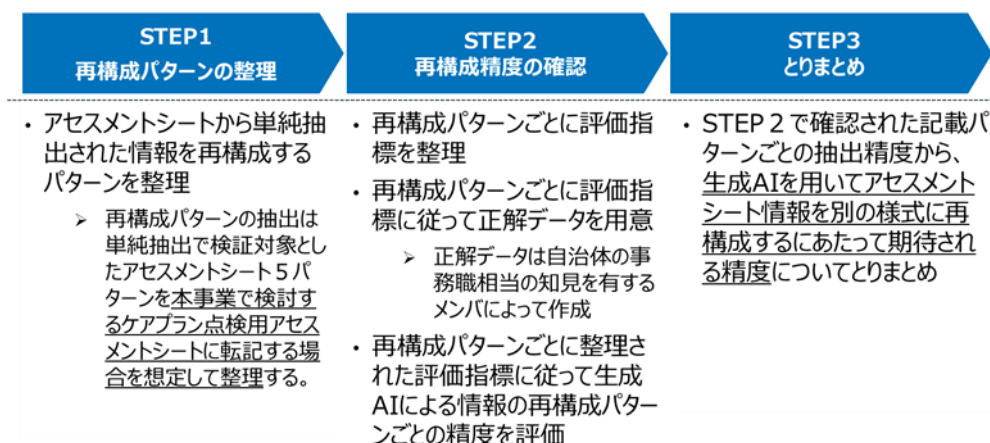
図表 2-55 生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証 | 単純抽出の検証方法



2) 再構成の精度検証

再構成の精度検証のステップは図表 2-56 の通り整理した。

図表 2-56 生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証 | 再構成の検証方法



(4) 『WEB 版ケアプラン点検支援ツール』のロードマップ案の更新

『WEB 版ケアプラン点検支援ツール』のロードマップ案の更新は、点検支援ツールの社会実装に向けた現実的な方法を整理することを目的として実施した。まず、本事業において実施した WEB 版ケアプラン点検支援ツールの試験開発、保険者による検証、生成 AI を活用したアセスメント様式への転記可能性の検証といった各種検証結果を踏まえ、短期的に実現可能と考えられる導入の方向性について検討した。

その上で、介護情報基盤の整備状況や関連制度の動向も踏まえつつ、点検支援ツールの将来的な位置付けや発展の方向性について検討を行った。また、関連分野に知見を有する関係者との意見交換を通じて得られた示唆も参考にしながら、社会実装に向けた段階的な取組の在り方について検討を行った。

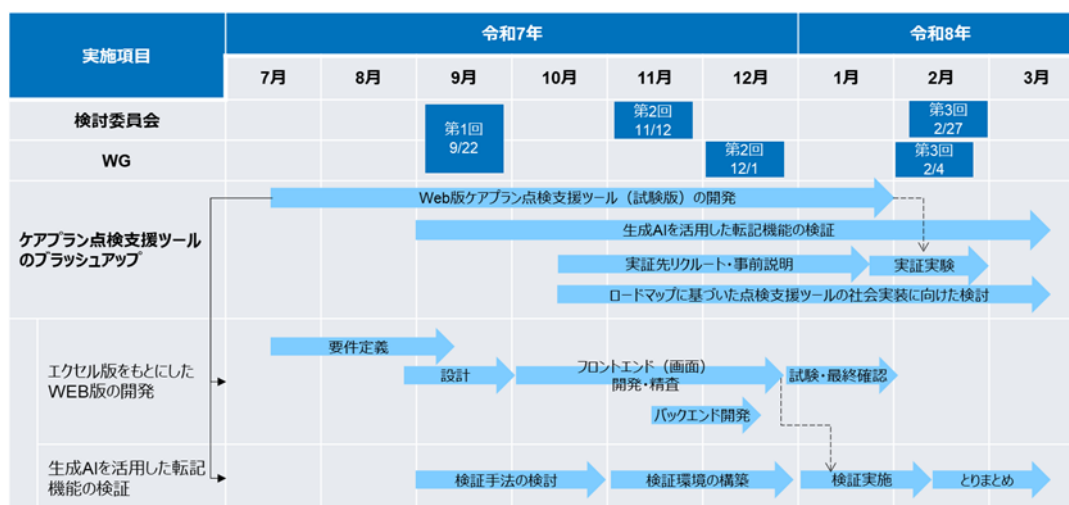
これらの検討結果を踏まえ、令和 6 年度に策定した『WEB 版ケアプラン点検支援ツール』のロードマップ案について、短期的に実現可能な取組と中長期的に目指すべき方向性の双方の観点から内容を再整理し、社会実装に向けた検討の進め方を含めてその内容の更新を行った。

3. 結果

(1) WEB 版ケアプラン点検支援ツールの試験開発

WEB 版ケアプラン点検支援ツールの試験開発では要件定義の内容に従って、アジャイル形式で適宜詳細仕様を追加で検討しつつ開発を行った。開発スケジュールの実績については図表 2-57 の通りである。

図表 2-57 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの試験開発 | 開発スケジュール実績



本開発を経て開発されたツールの各機能の概要について以下に示す。

1) 自動書類確認機能

自動書類確認機能は、対象書類をデータで取り込み、生成 AI サービスを活用してケアプラン点検項目に沿った書類確認を自動的に行う機能として実装した。なお、自動書類確認対象書類は本事業内で点検用様式を検討しているアセスメントシートと、厚生労働省がケアプランデータ連携システムのために標準出力形式を整理しているケアプラン第 1 表から第 3 表とした。

また、本実証で利用する端末は完全ローカル環境で動作することを想定して開発したため、本機能はリアルタイムに生成 AI の API と連携する仕様ではなく、開発段階で作成した実証用ケアプランとケアプラン点検項目の情報から生成 AI が導いた自動書類確認の結果をローカル環境に構築されたデータベースに格納し、適宜表示する仕様にて開発した。実際の画面イメージは図表 2-58 の通りである。

図表 2-58 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの試験開発 | 自動書類確認機能

b. 書類確認 | 自動書類確認の流れ (1/5)

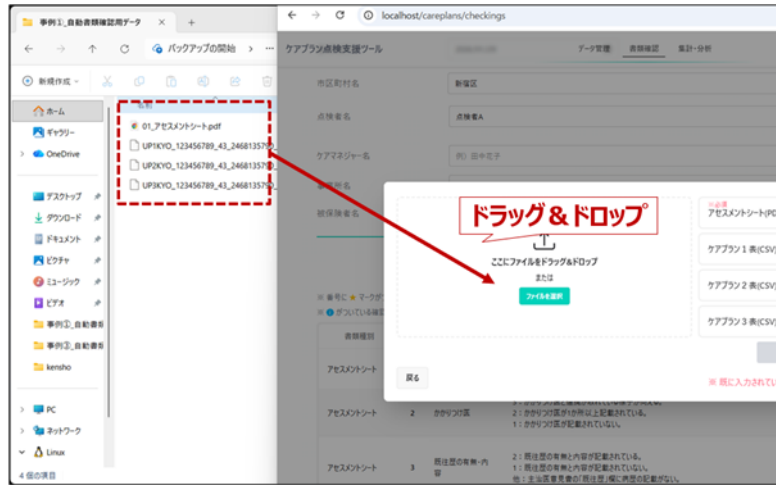
- 自動書類確認画面は、「自動書類確認」ボタンから起動できます。

b. 書類確認 | 自動書類確認の流れ (2/5)

- 自動書類確認画面は、「自動書類確認」ボタンから起動できます。

b. 書類確認 | 自動書類確認の流れ (3/5)

- 選んでいた事例に対応する自動書類確認用データをデスクトップからドラッグし指定します。(ファイル選択でも構いません。)



b. 書類確認 | 自動書類確認の流れ (4/5)

- その後、「自動書類確認を行う」ボタンを押すと自動書類確認結果が画面に現れます。これで自動書類確認は完了です。

書類種別	#	項目	判断基準	選択肢	確認結果	自動書類確認	分類
アセスメントシート	1	課題分析の理由	2: 初回、更新、区変、プラン変更、退院、状態変化等の理由が記載されている。 1: 初回、更新、区変、プラン変更、退院、状態変化等の理由が記載されていない。	1 2	1	(1)	課題の分析
アセスメントシート	2	かかりつけ医	3: かかりつけ医と連携が取れている様子が伺える。 2: かかりつけ医が1か所以上記載されている。 1: かかりつけ医が記載されていない。	1 2 3	2	(2)	疾病・心身状態の把握
アセスメントシート	3	既往歴の有無・内容	2: 既往歴の有無と内容が記載されている。 1: 既往歴の有無と内容が記載されていない。 他: 主治医意見書の「既往歴」欄に病歴の記載がない。	1 2 他	2	(2)	疾病・心身状態の把握

b. 書類確認 | 自動書類確認の流れ (5/5)

- 自動書類確認結果の詳細は、各項目の青い **i** ボタンから確認できます。

The screenshot shows a table with columns: 書類種別, #, 項目, 判断基準, 確認結果, 自動書類確認, and 分類. Item 1 is highlighted. A red dashed box highlights the '自動書類確認の結果' (Result of automatic document confirmation) section, which shows a score of 2 and a detailed explanation of the judgment criteria.

書類種別	#	項目	判断基準	確認結果	自動書類確認	分類
アセスメントシート	1	課題分析の理由	2: 初期, 更新, 区変, プラン変更, 退院, 状態変化等の理由が記載されている。 1: 初期, 更新, 区変, プラン変更, 退院, 状態変化等の理由が記載されていない。	1	1	課題の分析
アセスメントシート	2	ケアプラン内容	3: カラコン付属と連携が取れている様子がわかる。 2: カラコン付属が明記されている。 1: カラコン付属が記載されていない。	2	(2)	ケアプラン内容
アセスメントシート	3	居住環境の有無・内容	2: 居住環境の有無と内容が記載されている。 1: 居住環境の有無と内容が記載されていない。 例: 3. 居住環境の有無と内容が記載されていない。	1	1	居住環境の有無

自動書類確認の結果

自動書類確認結果: 2

区分変更がないと、ならびにサービス見直しに伴いアセスメントを実施した理由が明確に記載されていると判断しました。

判断となる箇所

書類名	項目名	判定対象テキスト
アセスメントシート	区分変更の理由	状態変化等

点検項目内容

#	項目	判断基準
1	課題分析の理由	2: 初期, 更新, 区変, プラン変更, 退院, 状態変化等の理由が記載されている。 1: 初期, 更新, 区変, プラン変更, 退院, 状態変化等の理由が記載されていない。

閉じる

2) 集計機能

集計機能は、エクセル版に備わっている事業所別・ケアマネジャー別の集計機能の他、地域別（全国・所属する都道府県と自保険者のデータが比較できる画面）の集計機能についても実装をした。実際の画面イメージは図表 2-59 の通りである。

図表 2-59 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの試験開発 | 集計機能



3) データ管理機能

データ管理機能は、面談実施有無やデータの検索・削除・過去の書類確認結果を表示できる機能として開発をした。実際の画面イメージは図表 2-60 の通りである。

図表 2-60 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの試験開発 | データ管理機能

ケアプラン点検支援ツール

データ管理

書類確認

集計・分析

表示対象を選択 ▲

書類確認日

期間指定

市区町村

事業所

ケアマネジャー名

点検者名

保険者名

面談完了

リセット

書類確認日 ▼

市区町村

事業所

ケアマネジャー名

点検者名

保険者名

面談完了

リセット

詳細列を表示

CSV出力

集計画面へ

No.	書類確認日 ▼	市区町村	事業所	ケアマネジャー名	点検者名	保険者名	面談完了	書類確認結果	評価画面	削除
1	2025-04-10	新富区	事業所B	ケアマネジャー-B	点検者B	保険者E	〇 未完了	評価は表示	評価結果へ	削除
2	2025-04-10	新富区	事業所B	ケアマネジャー-B	点検者A	保険者D	✓ 既読済	評価は表示	評価結果へ	削除
3	2025-04-10	新富区	事業所B	ケアマネジャー-C	点検者B	保険者C	✓ 既読済	評価は表示	評価結果へ	削除
4	2025-04-10	新富区	事業所A	ケアマネジャー-A	点検者A	保険者B	〇 未完了	評価は表示	評価結果へ	削除
5	2025-04-10	新富区	事業所A	ケアマネジャー-A	点検者A	保険者A	✓ 既読済	評価は表示	評価結果へ	削除
6	2025-02-11	新富区	事業所B	ケアマネジャー-D	点検者B	保険者F	✓ 既読済	評価は表示	評価結果へ	削除
7	2025-02-10	新富区	事業所B	ケアマネジャー-D	点検者B	保険者G	〇 未完了	評価は表示	評価結果へ	削除
8	2025-02-09	新富区	事業所B	ケアマネジャー-D	点検者B	保険者H	〇 未完了	評価は表示	評価結果へ	削除
9	2025-02-08	新富区	事業所B	ケアマネジャー-D	点検者C	保険者I	〇 未完了	評価は表示	評価結果へ	削除
10	2025-02-07	新富区	事業所B	ケアマネジャー-D	点検者C	保険者J	〇 未完了	評価は表示	評価結果へ	削除

10/10

次へ

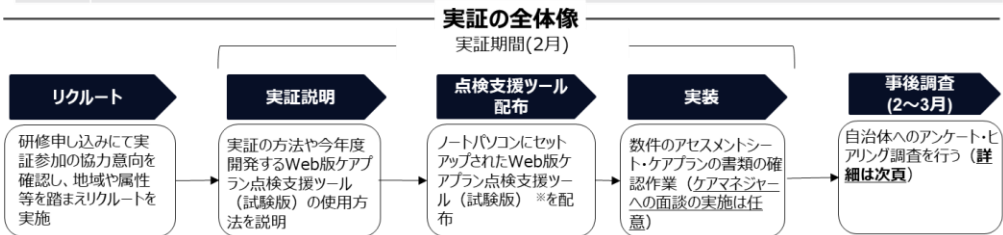
(2) WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証

1) 実証方法の全体像整理

実証の全体像は本事業内で実施する研修とともに実証に協力いただく保険者のリクルートを行い、その後アンケート・ヒアリング調査を実施する構成として整理した。整理の結果は図表 2-61 の通りである。

図表 2-61 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証 | 目的・全体像

項目	内容
目的	1. Web版ケアプラン点検支援ツール活用による効果（自治体業務の効率化、ケアプラン点検の質の底上げ等）の検証 2. Web版ケアプラン点検支援ツールの基本機能部分のUI/UXの課題の抽出 3. 自治体の利用環境を踏まえた、Web版ケアプラン点検支援ツールの開発要件の検討
対象	5～10保険者（自治体）程度を想定
実施内容	・ 本事業で実施する研修の事前アンケート等で実証への協力意向を確認 ・ 地域や属性等を踏まえ協力先をリクルート ・ 研修後等の時間に実証の方法やWeb版ケアプラン点検支援ツール（試験版）の使用方法を説明 ・ 保険者にWeb版ケアプラン点検支援ツール（試験版）を貸出し、数件のアセスメントシート・ケアプランの確認作業（ケアマネジャーへの面談の実施は任意）を実施いただく ・ 事後調査として、自治体へのアンケート・ヒアリング調査を行う



2) リクルート

保険者のリクルートの結果、9の保険者に本実証に協力いただけることになった。協力保険者の属性等については図表 2-62 に記す。

図表 2-62 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証 | 協力保険者一覧

#	地域	保険者名	ケアプラン点検 業務経験年数	保有している高齢者介護に 関連する資格
1	北海道・東北	A 町	なし	理学療法士・作業療法士・ 理学療法士
2	関東	B 市	2～3 年	理学療法士・作業療法士・ 理学療法士
3	関東	C 市	5 年以上	
4	関東	D 市	なし	
5	中部	E 市	5 年以上	介護支援専門員
6	中部	F 市	1～2 年	
7	中部	G 広域連合	2～3 年	介護支援専門員
8	関西・近畿	H 市	3～4 年	
9	九州	I 国保連合会	なし	

3) アンケート調査

アンケート調査の結果、自動書類確認機能を活用して書類確認した場合にかかる時間（実測）とすべて目検で書類確認した場合にかかる時間（想定）を比較したところ、自動書類確認機能を活用した方が約 3 分の 1 の時間で書類確認ができる可能性があることが示唆された。

また、実証に協力いただいた保険者の 100%が、本ツールが社会実装された場合には利用したいとの回答が得られた。アンケート調査結果のサマリーは図表 2-63 の通りである。

図表 2-63 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証 | アンケート・ヒアリング調査結果（サマリー）

調査目的：Web 版ケアプラン点検支援ツール活用による効果の検証 ※ ▶以降はヒアリング調査の結果	
検証観点	検証結果のサマリー
点検項目を用いた書類の点検時間の適正化	・ 自動書類確認機能を活用して書類確認した場合にかかる時間（実測）とすべて目検で書類確認した場合にかかる時間（想定）を比較したところ、約 3 分の 1 の時間で書類確認ができる可能性があることが示唆された

調査目的：Web 版ケアプラン点検支援ツール活用による効果の検証 ※ ▶以降はヒアリング調査の結果	
検証観点	検証結果のサマリー
継続利用意向	・ ツールが社会実装された場合 <u>100%が継続して利用したいと回答</u>
地域のケアマネジメント向上	・ <u>点検者ごとのスキル差があっても、同じ観点でケアプランを確認できる：約 77.8%</u> ▶ 担当者が数年で入れ替わるため、このようなツールがあると引継ぎがしやすい。AI が点検項目に沿って書類確認した結果も表示されるため、後任の担当も自分と近い視点で点検できると感じた。 ▶ 自動書類確認できない範囲では差が出る。 ・ <u>実際にケアマネジャーとの面談時に活用しやすい結果表示である：約 77.8%</u> ▶ ケアマネジャーとどのような切り口で会話すればよいか示されて助かる。 ▶ 現状の点検項目では利用者の個別性までは見られない。(現状行っている面談では、そこまで踏み込んでケアマネジャーと会話している。) ・ <u>WEB 版ケアプラン点検支援ツールの集計画面で示される情報は、業務に活用できる：約 88.9%</u> ▶ 事業者やケアマネジャーへの FB の際、カテゴリごとの点数の平均値などが他の事業所やケアマネジャーと比較可能な情報として示せると感じた。 ▶ 点検項目で確認できる範囲が限られる(利用者の個別性までは見られない)と感じているため、活用範囲は限られる。件数は使える。 ・ <u>地域のケアマネジメントの質の向上につながると思う：約 77.8%</u> ▶ ケアマネジャーと今よりも具体的に会話できることで、ケアマネジメントの質の向上につながると思った。
調査目的：Web 版ケアプラン点検支援ツールの基本機能の UI/UX 課題抽出 ※ ▶以降はヒアリング調査の結果	
検証観点	検証結果のサマリー
各画面で提供される UI・UX	・ <u>AI の示す内容は妥当だと感じた：約 77.8%</u> ・ <u>AI が項目に対して確認した範囲は妥当だと感じた：約 77.8%</u> ▶ 通常、情報が書いてある場所以外に項目の判断に関連する情報があった場合、チェックができていなかった。キーワード等でピックアップができるとよいのではないかと。

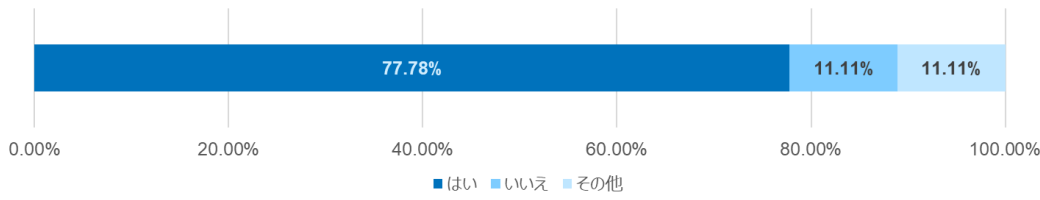
なお、個別のアンケート調査結果と、それに関連するヒアリング結果については図表 2-64～図

表 2-66 の通りである。

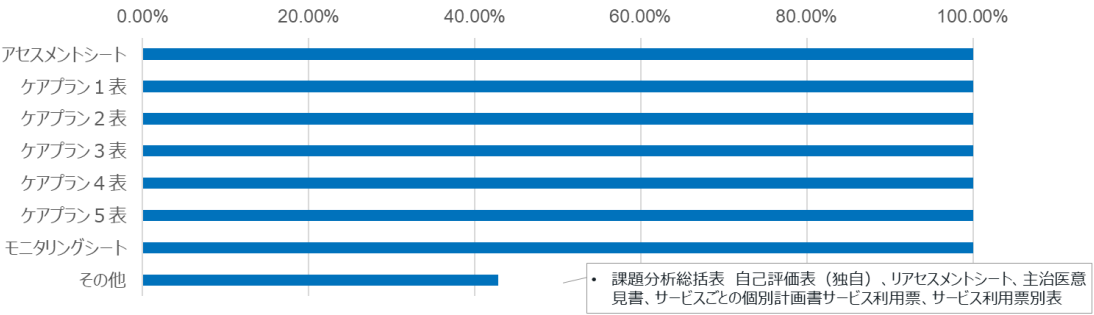
図表 2-64 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証 | アンケート調査結果（点検実施状況）

実証参加自治体のケアプラン点検実施状況

問 1：現状、ケアプラン点検の際にケアプランに関連する書類を確認していますか。（n=9）



問 1-1：点検を行う対象書類について教えてください。（n=7）



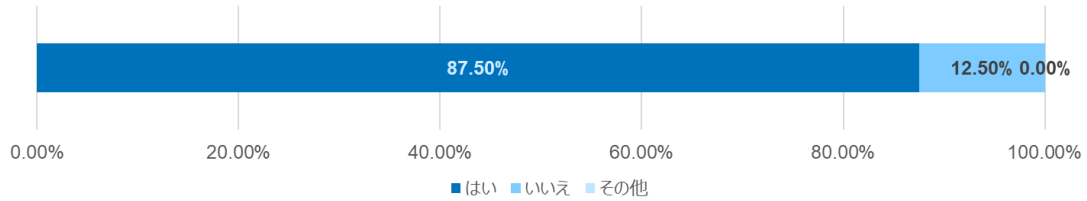
問 1-2：

1 事例のケアプランに関連する書類を確認するのにかかるおおむねの時間をお答え下さい。（分）（n=7）

平均的なパターン		最も長くなるパターン	
項目	(分)	項目	(分)
最大	90	最大	120
最小	20	最小	40
平均	55.714	平均	85.714

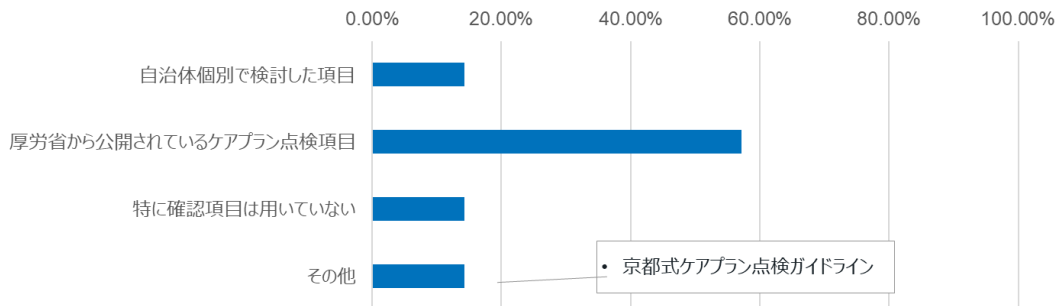
問 2 :

ケアプランに関連する書類を確認する際に、確認項目を使用していますか。(n=7)



問 2-1 :

ケアプランに関連する書類を確認する際に、確認項目を使用していますか。(n=7)



問 3 :

実証の中で、WEB版ケアプラン点検支援ツールの自動書類確認機能を活用してケアプラン点検の書類確認を行ったときにかかったおおむねの時間をお答え下さい。(分) (n=9)

問 4 :

実証の中で確認した事例を 1 から目検で、ケアプラン点検項目に沿ってケアプラン点検の書類確認を行った場合、どの程度の時間がかかると思うかお答え下さい。(分) (n=9)

自動書類確認機能を使用して確認	
項目	(分)
最大	50
最小	10
平均	21.667

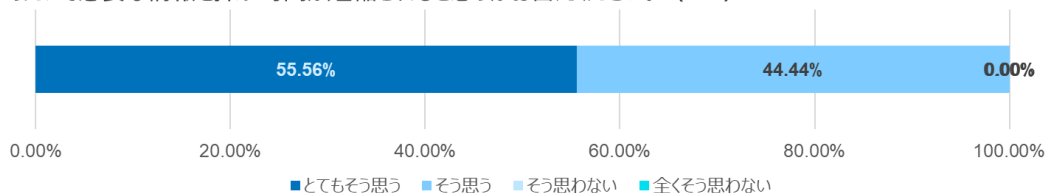
目検のみで確認	
項目	(分)
最大	90
最小	30
平均	57.778

図表 2-65 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証 | アンケート調査結果（支援ツールの効果）

WEB版ケアプラン点検支援ツール活用による効果

問 5：

WEB版ケアプラン点検支援ツールの自動書類確認機能を利用することで、点検項目に沿って書類を確認するにあたって必要な情報を探す時間が短縮されると思うかお答えください。（n=9）



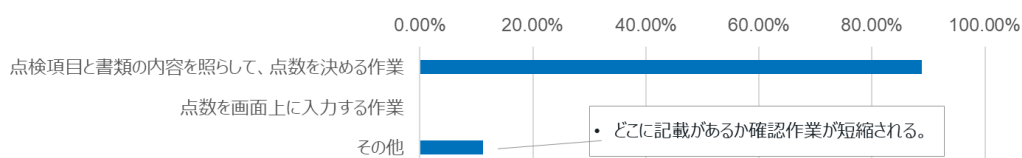
問 5-1：

（そう思わない、全くそう思わないと答えた場合）その理由をお答えください。

該当なし

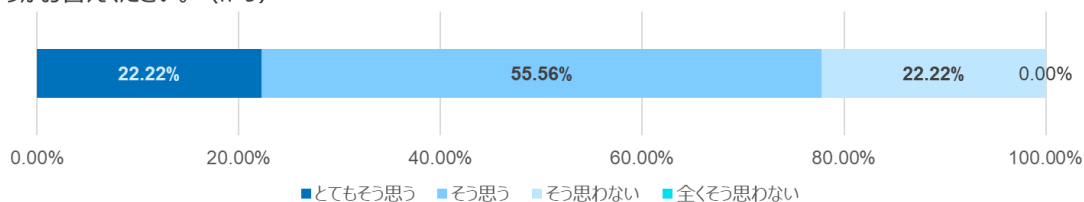
問 5-2：

WEB版ケアプラン点検支援ツールの自動書類確認機能を利用することで、点検項目に沿って書類を確認するにあたって必要な情報を探す時間が短縮されると思うかお答えください。（n=9）



問 6：

ケアプラン点検支援ツールを使うことで、点検者ごとのスキル差があっても、同じ観点でケアプランを確認できると思うかお答えください。（n=9）



問 6-1：

（そう思わない、全くそう思わないと答えた場合）その理由をお答えください。

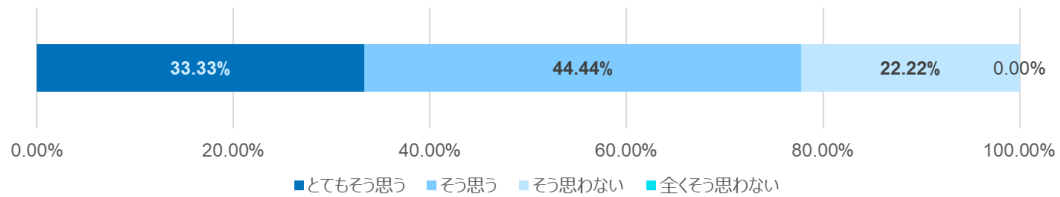
回答

ツールで認識できなかった部分についての差がついてしまうと感じました。

A I の判断が妥当か確認する必要があるため。

問 7 :

WEB版ケアプラン点検支援ツールの結果確認画面で示される情報は、実際にケアマネジャーとの面談時に活用しやすい内容だと思うかお答えください。(n=9)



問 7-1 :

(そう思わない、全く思わないと答えた場合) その理由をお答えください。

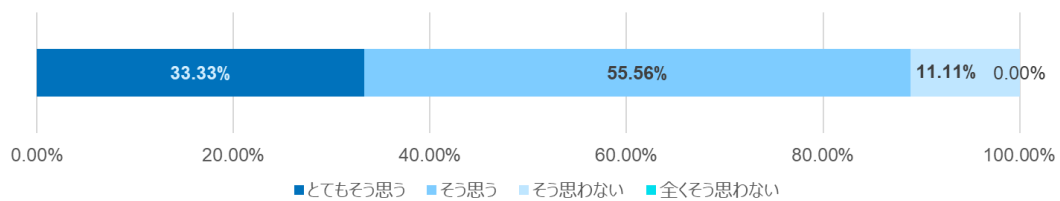
回答

個性や具体性に欠ける内容だったため

活用はできるが、そのまま伝えるだけでは誤った判断の可能性があるため。

問 8 :

WEB版ケアプラン点検支援ツールの集計画面で示される情報は、業務に活用できると感じましたか。(n=9)



問 8-1 :

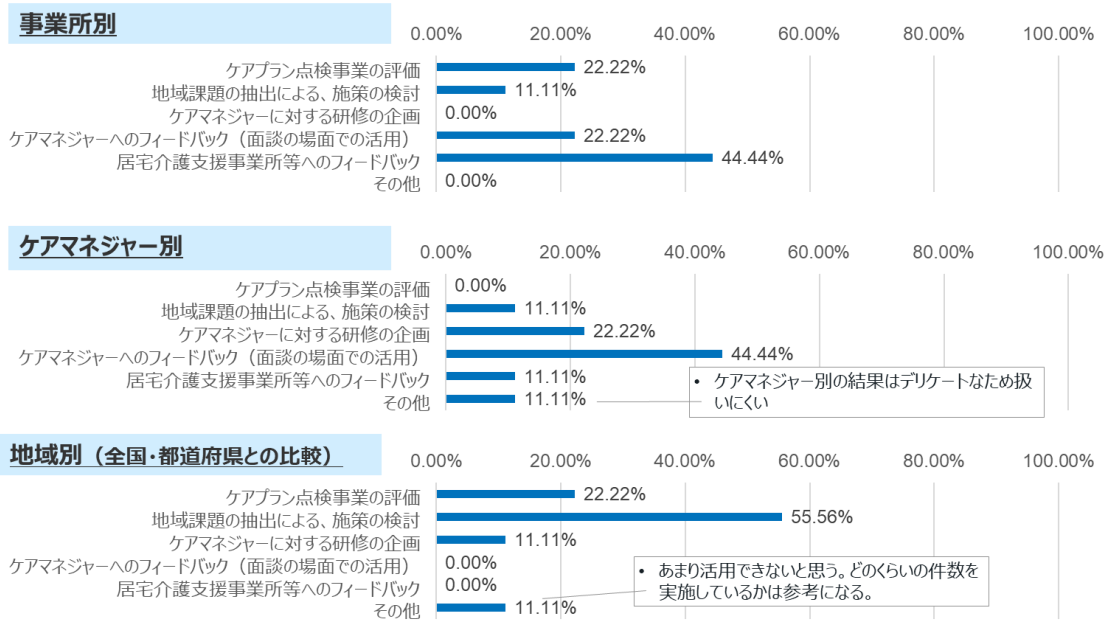
(そう思わない、全く思わないと答えた場合) その理由をお答えください。

回答

あくまでこのツールを使用した結果であり、この評価の信憑性に疑問があるため。

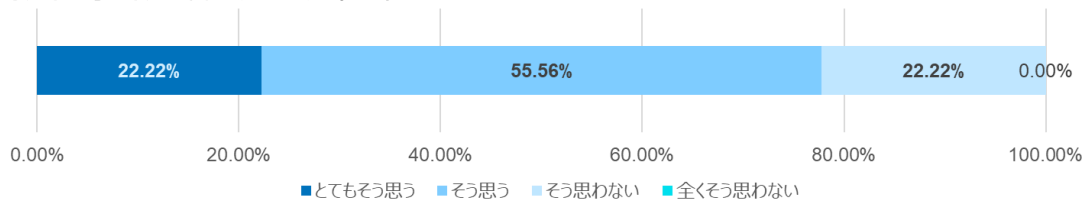
問 8-2、8-3、8-4：

（各画面について）業務のどのような場面で役立つと感じたかお答えください。（n=9）



問 9：

設問3～8の内容を踏まえ、WEB版ケアプラン点検支援ツールの活用は地域のケアマネジメントの質の向上につながると考えるかお答えください。（n=9）



問 9-1：

（そう思わない、全くそう思わないと答えた場合）その理由をお答えください。

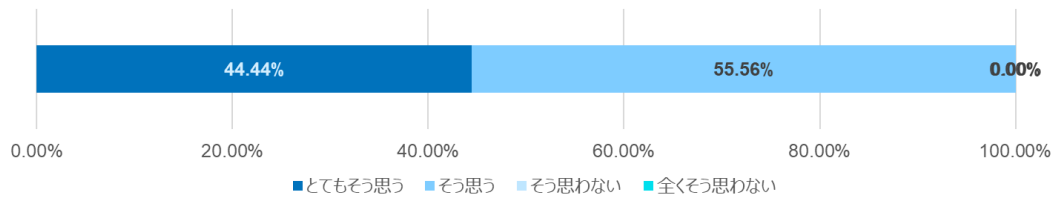
回答

書類の不備を確認するという意味では活用できるが、マネジメントの質自体が向上するかは疑問。

この評価のみでは判断できないため。

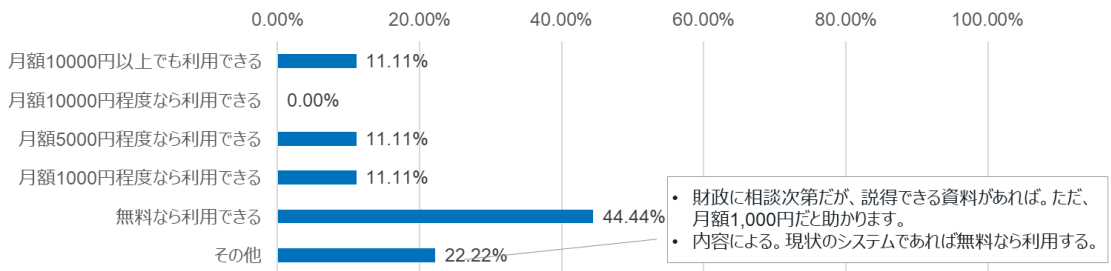
問 1 0 :

WEB版ケアプラン点検支援ツールが社会実装された場合、利用したいと考えるかお答えください。(n=9)



問 1 1 :

利用にあたって程度の費用負担ができるかとお答えください。(n=9)



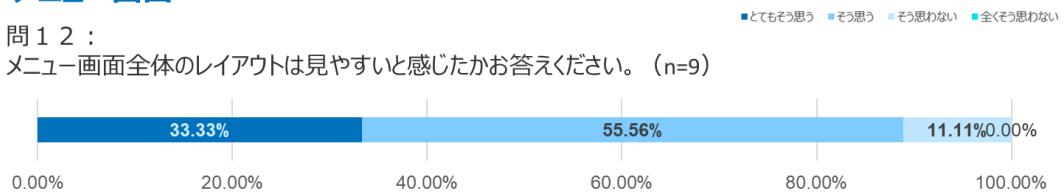
図表 2-66 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証 | アンケート調査結果 (UI/UX)

WEB版ケアプラン点検支援ツールの機能ごとのUI/UX (見やすさ・使いやすさ)

| メニュー画面

問 1 2 :

メニュー画面全体のレイアウトは見やすいと感じたかお答えください。(n=9)



問 1 3 :

各メニューの名称や説明はわかりやすいと感じましたか (n=9)



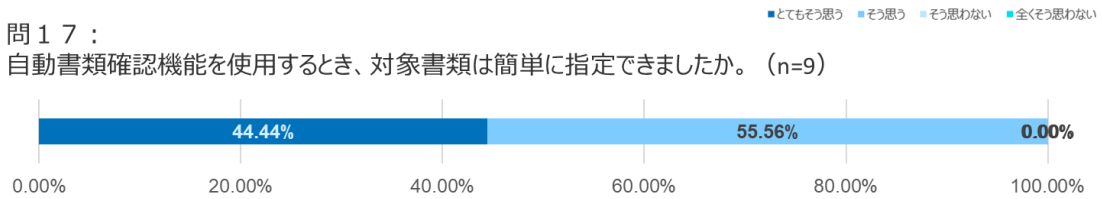
問 1 4 :

各メニューの名称や説明はわかりやすいと感じましたか (n=9)



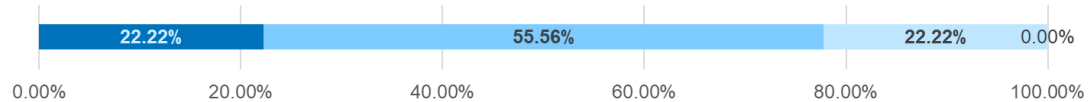
問 1 7 :

自動書類確認機能を使用するとき、対象書類は簡単に指定できましたか。(n=9)



問 1 8 :

AIが示す自動書類確認結果は見やすいと感じましたか。(n=9)



問 1 8-1 :

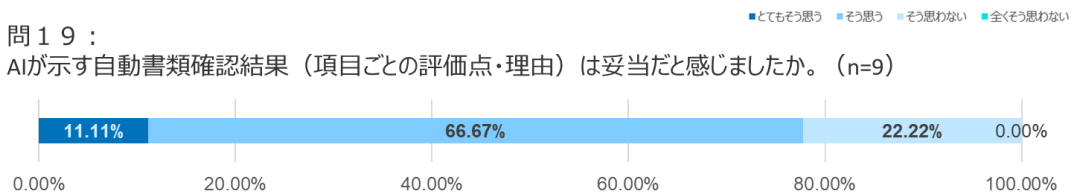
(そう思わない、全くそう思わないと答えた場合) その理由をお答えください。

回答

自動書類確認結果の文字が小さい

問 1 9 :

AIが示す自動書類確認結果(項目ごとの評価点・理由)は妥当だと感じましたか。(n=9)



問 1 9-1 :

(そう思わない、全くそう思わないと答えた場合) その理由をお答えください。

回答

課題分析の理由が妥当ではない。

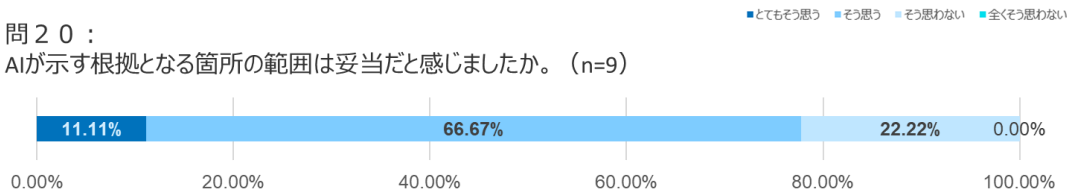
担当者による確認が必要であるため。

改善に向けた意見

作成年月日と認定有効期間とケアプランの長期・短期目標の期間の整合性がとれてなくても判断されていない。

問 2 0 :

AIが示す根拠となる箇所の範囲は妥当だと感じましたか。(n=9)



問 2 0 - 1 :

(そう思わない、全くそう思わないと答えた場合) その理由をお答えください。

回答

大まかには根拠となる場所から拾えていると思うが、例えば、アセスメントシート以外に記載しているアセスメント結果もキーワード等で抽出して、示してくれたら助言しやすい。

サービス利用の根拠が記載されていないが、高い評価がされていたため。

改善に向けた意見

それぞれの項目ごとではなく、全範囲から、そのキーワードがある箇所を抽出してほしい。

例えばアセスメントシートをPDFで出力した場合、色がついている

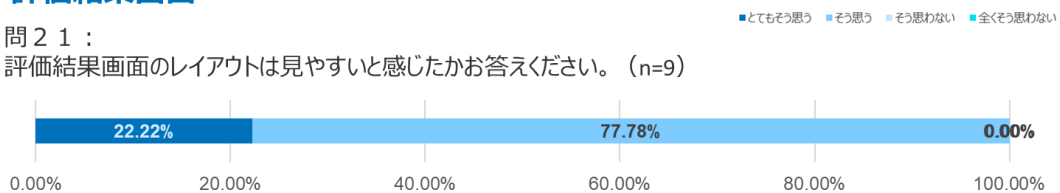
評価基準として示されている内容からは判断が難しい場合に、確認の根拠を見ても、まだ判断しがたいとすることがある。

WEB版ケアプラン点検支援ツールの機能ごとのUI/UX（見やすさ・使いやすさ）

| 評価結果画面

問 2 1 :

評価結果画面のレイアウトは見やすいと感じたかお答えください。(n=9)

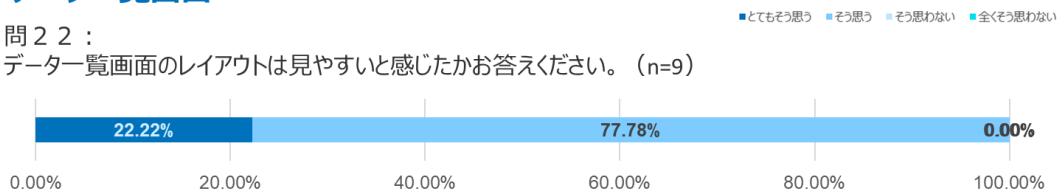


WEB版ケアプラン点検支援ツールの機能ごとのUI/UX（見やすさ・使いやすさ）

| データ一覧画面

問 2 2 :

データ一覧画面のレイアウトは見やすいと感じたかお答えください。(n=9)

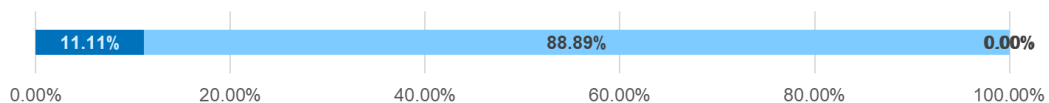


改善に向けた意見

テスト機の問題だと思いますが、一覧から個別情報の修正ができるように

問 2 3 :

目的のケアプランが探しやすいと感じたかお答えください。(n=9)



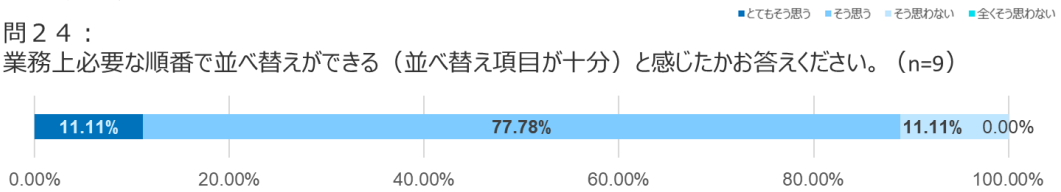
改善に向けた意見

ブルダウンだけでなく、文字検索がないと、件数が増えたときに不便かと

WEB版ケアプラン点検支援ツールの機能ごとのUI/UX（見やすさ・使いやすさ） | データー一覧画面

問 2 4 :

業務上必要な順番で並べ替えができる（並べ替え項目が十分）と感じたかお答えください。（n=9）



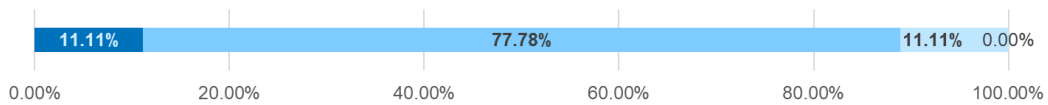
改善に向けた意見

評価区分順があるといい。分類毎の評価順があると良い

より直感的に並び替えができるUIを期待する。

問 2 5 :

業務上必要な順番で並べ替えがしやすい（操作がしやすい）と感じたかお答えください。（n=9）



改善に向けた意見

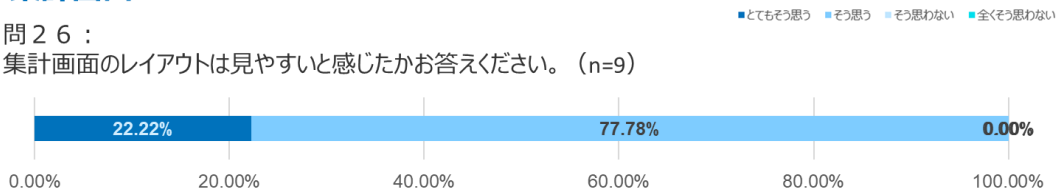
並べ替える項目は、各団体によって違う。CSV出力してエクセルなどで並べ替えれば良いが、一覧で項目を選択できるようになると良い

より直感的に並び替えができるUIを期待する。

WEB版ケアプラン点検支援ツールの機能ごとのUI/UX（見やすさ・使いやすさ） | 集計画面

問 2 6 :

集計画面のレイアウトは見やすいと感じたかお答えください。（n=9）



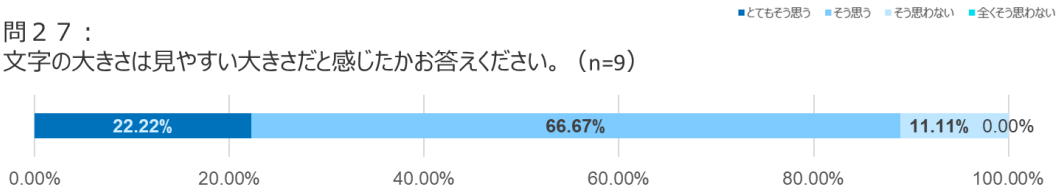
改善に向けた意見

右上の評価区分別件数。

WEB版ケアプラン点検支援ツールの機能ごとのUI/UX（見やすさ・使いやすさ） | 全画面共通

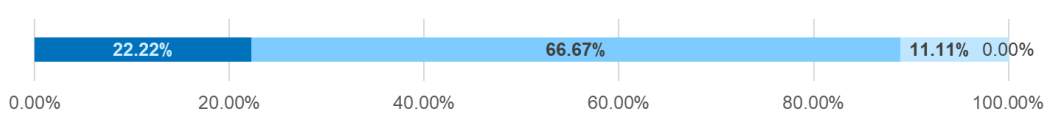
問 2 7 :

文字の大きさは見やすい大きさだと感じたかお答えください。（n=9）



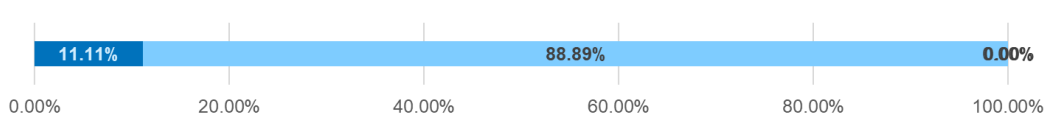
問 2 8 :

フォントの種類は見やすいと感じたかお答えください。（n=9）



問 2 9 :

画面間の移動は迷わず操作できると感じたかお答えください。（n=9）



WEB版ケアプラン点検支援ツールの機能ごとのUI/UX（見やすさ・使いやすさ） | 実証トラブル

問 3 0 :

実証時、トラブルはありましたか。（n=9）



問 3 0 - 1 :

（はいと答えた場合）トラブルの内容をお答えください。（n=4）

回答

ツールへのログインがわかりにくかった

電話や窓口等すぐに対応する他業務があるため離れたところ、時間が経ってしまったためエラーになり、取り込みまで戻ってしまいました。

操作の誤りで別のファイルを開き、ツールの起動ができなかった（実証時だけのものと思います）。

保存ができなかった。

4) ヒアリング調査

ヒアリング調査では①アンケート回答の背景と、②保険者がクラウドサービスを使用する際の障壁について主に聞き取った。

結果、①アンケート回答の背景の観点では、点検支援ツールを活用することで、ケアプラン点検項目による書類の確認時間が短縮することや、保険者のケアプラン点検業務の引継ぎに寄与する可能性があること、さらに近隣の地域（保険者）の状況と自らの所轄する地域の状況を比較できるようになることで、事実に基づいた事業の推進ができる可能性についても示唆された。②保険者がクラウドサービスを使用する際の障壁については、今回協力を頂いた9保険者については担当者個人

がいつでも自由に LGWAN に接続できる端末を利用できることが明らかになった。このことから、将来的に LGWAN 配下で利用できるツールとして WEB 版ケアプラン点検支援ツールが構築された場合には、各保険者の庁舎内で当該ツールが利用できる可能性があることが示唆された。

ヒアリング結果の詳細については図表 2-67～図表 2-73 の通り示す。

図表 2-67 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証 | ヒアリング調査結果（アンケート背景：①）

ヒアリング観点	主な意見
自動書類確認機能の効果	目検で確認するよりも確実に書類の確認時間を短縮できる。現状、厚生労働省のケアプラン点検項目を使って書類確認し、面談するという方法でケアプラン点検を行っているが、1 事例を行うのにかなり時間がかかるので、継続が難しいのではないかと考えていた。このようなツールが提供されれば、継続して厚生労働省のケアプラン点検項目を使ったケアプラン点検ができると思う。
	ケアプラン点検項目に沿って書類確認するときにはとにかくアセスメント様式のどこに情報があるのか探すのが手間。自動書類確認機能があればその時間が短縮できるため助かる。
	厚生労働省のケアプラン点検項目に沿って点数を判断するとき、基準が定性的で迷う場面も多い。AI が判定した結果があるとそれを参考に検討がすすむので心理的な負荷が軽減されるように思う。
	引継ぎをする際に、後任に「どうやって点検してるのか？」を伝えるとき、このツールがあれば、短時間で引継ぎができると感じた。
	引継ぎの観点でいうと、（難しいポイントが点検項目に沿った点数の判断になると想定するため）AI が判定をしてくれると、それを基準に説明ができるため助かる。
	ケアプラン点検項目に沿って点検をするなら自動書類確認機能は使えるが、ケアプラン点検項目に沿って点検しても個別性までは確認できない。その点に活用の課題を感じる。
	得られた示唆
	【想定される効果】 ・ 自動書類確認機能を用いると、確認すべき書類の箇所がガイドされるため書類確認にかかる時間が短縮できる。 ・ 判断に迷った時 AI の判断理由を参考に判断することで心理的負荷が軽減される。 ・ ケアプラン点検項目に沿った書類確認・面談の引継ぎにかかる業務負担が軽減される。 【問題・課題】 ・ 利用者の個別性に寄り添った書類確認が（ケアプラン点検項目に沿った）自動書類確認では実現できない。

図表 2-68 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証 | ヒアリング調査結果（アンケート背景：②）

ヒアリング観点	主な意見
自動書類確認 結果画面の UI	文字が小さいため、レイアウトを検討してほしい。
	運用するとしたら、初めは AI の結果はすべてチェックしたい。今は AI 結果を表示するためにいちいちクリックが必要なので、AI 結果表示画面のなかに次に送る操作ができればよい。また、AI 結果表示画面から評価の変更ができるとうい。
	得られた示唆
	【問題・課題】 ・ 文字の大きさ等、より適正なレイアウトを検討する必要がある。 自動書類確認結果画面の UI を実際の利用シーンに合わせて再設計する必要がある。

図表 2-69 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証 | ヒアリング調査結果（アンケート背景：③）

ヒアリング観点	主な意見
AI による自動書類確認結果の 妥当性	結果はおおむね妥当に感じた。よくを言えばケアマネジャーに説明するときにとの程度精度が保証されているものなのか明示があると助かる。
	一部結果については疑義がある。定性的に判断する項目について、自分とは意見が異なっている場合もあった。
	判断についてものすごく違和感があるわけではないが、参照する範囲が足りないと感じる場合があった。アセスメントシートで通常書いていないところに情報がある場合などにこのようなことが起きやすいようであったので、例えば外出に関する項目であれば「外出」等のキーワードでテキスト検索して想定外の項目にある情報もピックアップし、判断できるような仕組みとすべきではないか。
	得られた示唆 【想定される効果】 ・ （保険者職員の目からみて）一定の妥当性は確認されたため、現状の機能でも保険者が書類確認をする前のプレ的な書類確認の場では活用可能。 【問題・課題】 ・ ただし、精度については完全ではないため、更なる向上や定量的な結果を得られるような精度検証等を実施していく必要がある。 項目ごとの判定を行うにあたって参照する範囲についてはキーワードによる検索等を行いより汎用的な範囲を参照して判断できるロジック等を検討する必要がある。

図表 2-70 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証 | ヒアリング調査結果（アンケート背景：④）

ヒアリング観点	主な意見
集計画面の活用（地域比較）	実証用ツールでは都道府県・全国と自自治体が比較できるが、都道府県・全国との比較ニーズはあまりない。できれば近隣の同規模の自治体と状況を比較したい。自自治体の状況については（統計情報であれば）公開可能と考える。
	地域比較については全国・都道府県と比較できるのはいいが、やはり近隣の自治体の状況が気になる。
	地域比較結果はケアマネジャー向けの研修などで活用できると考える。（定量的にケアマネジャーに自自治体の状況を知っていただくことができる。）
	得られた示唆
	【問題・課題】 全国・都道府県単位ではなく、近隣の自治体との状況を比較できるような機能・枠組みを検討する必要がある。
	・ 主な意見
集計画面の活用（事業所比較）	事業所別の比較については、現在個別のケアマネジャーに面談した後、事業所に FB を行っているため、その場での活用ができると感じた。
	得られた示唆
	【想定される効果】 事業所別の比較結果は、事業所への FB 等で活用できる可能性がある。
	・ 主な意見
集計画面の活用（ケアマネ比較）	ケアマネ別比較については、データがたくさんたまっていけば面談に使えるかもしれないが、現在そのような状況ではない。そのため、経過がわかるような画面があるとよいのではないかと。
	得られた示唆
	【想定される効果】 ケアマネジャー別の比較結果は、面談の場等で活用できる可能性がある。

図表 2-71 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証 | ヒアリング調査結果（アンケート背景：⑤）

ヒアリング観点	主な意見
データ管理画面 の活用	過去の事例をいつでも呼び起せるので、これも引継ぎに活用できる。現在は当時の AI 判定結果は残らないので、残せるようにしてほしい。
	面談終了のみステータス管理できるが、ステータス管理は自治体によって運用が微妙に異なると思う。もしこのような機能を実装するなら設定で何段階でステータス管理するか、どのような意味合いとするか、変更できるとよいのではないか。
	面談結果などが書類確認結果に紐づけて保存できると、引継ぎに活用しやすい。このような機能があれば例えば、ひとりのケアマネジャーが数年おきに点検を受ける場合、担当者が変わっても一貫性のある面談ができるのではと考える。
	得られた示唆
	【問題・課題】 ・ 表示された AI の判断根拠を記録できるような仕組みを検討する必要がある。 ・ 汎用的なステータス管理機能の実装について検討する必要がある。 面談結果をメモ等で残せる機能の実装について検討する必要がある。

図表 2-72 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証 | ヒアリング調査結果（アンケート背景：⑥）

ヒアリング観点	主な意見
ツールの活用意向	現在、ケアプラン点検のために委託のケアマネジャー 2 名を複数月で雇用している。このようなツールを活用すればケアプラン点検の書類確認にかかる手間が削減できるため、より面談に力を入れてもらえる。そのため、もしこのようなツールがあれば有償でも利用できると感じる。
	業務にかかる負担の関係で厚生労働省が示しているケアプラン点検項目に沿ったケアプラン点検を続けることが、将来的に難しくなるのではないかと危惧している。そのため、このようなツールの提供があると項目に沿ったケアプラン点検の実施が続けられると思う。
	現状のケアプラン点検項目では個別性まで踏み込んだ確認が書類時点ではできないが、無償であればアセスメントシート・ケアプランの整合性等の確認の手前の記載確認ツールとしては使えるかもしれない。また、自動書類確認機能で、「本人の XX という状況を踏まえて評価しなおして」等対話型で活用できればぜひ使いたいと思う。
	得られた示唆
	【想定される効果】 ・ WEB 版ケアプラン点検支援ツールには一定の利用ニーズがある。 ・ WEB 版ケアプラン点検支援ツールは厚生労働省の示すケアプラン点検項目の利用促進に資する可能性がある。 【問題・課題】 より幅広い利用ニーズに対応するために、対話型で AI を活用できる仕組みについても検討する必要がある。

図表 2-73 WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証 | ヒアリング調査結果（クラウドサービス使用する場合の障壁）

ヒアリング観点	主な意見
LGWAN・インターネット利用環境	一人一台、LGWAN・インターネット環境が利用できる端末が割り当てられている。
	ケアプラン点検を行う場合、外部からケアマネジャーを雇用して行うことになると思うが、LGWAN に接続できる端末は十分用意可能。
	LGWAN につながる環境は一人一台用意されている。無線で利用可能な環境であるため、ケアマネジャーとの面談の際に会議室で利用することも可能だと思う。

(3) 生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証

今回検証対象とするアセスメントシート様式については図表 2-74 の通りとした。

図表 2-74 生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証 | 検証対象のアセスメント様式

番号	アセスメント様式名
A	居宅サービス計画ガイドライン方式（全社協版）
B	リ・アセスメント支援シート
C	独自様式（1）
D	独自様式（2）
E	独自様式（3）

また、今回精度検証の際に使用する生成 AI は「ChatGPT（GPT5.2）」とした。また、単純抽出の精度検証の際比較対象とする AI-OCR システムは、AI-OCR 市場でシェアの高い⁷「DX Suite」とした。

1) 単純転記の精度検証

単純抽出パターンの分類については、対象のアセスメントシート 5 パターンの内容を踏まえ、図表 2-75 の通り整理した。パターン分類のイメージは図表 2-76 の通り示す。なお、A～E のパターンの整理結果の全体は参考資料「生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証_単純抽出パターン分類」に示す。

図表 2-75 生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証 | 単純抽出パターン

パターン#	単純抽出パターン名
1	テキスト系 - 枠の外に項目名
2	テキスト系 - 枠の中に項目名
3	テキスト系 - 左側に項目名を示す四角い枠
4	テキスト系 - 上側に項目名を示す四角い枠
5	テキスト系 - 罫線区切りテキストブロック形式
6	選択肢系 - ○囲み - 択一
7	選択肢系 - ○囲み - 複数選択

⁷ デロイト トーマツ ミック経済研究所,「OCR ソリューション市場動向 2025 年度版」,(2025/8/26)

パターン#	単純抽出パターン名
8	選択枝系 - ○囲み - 数字選択
9	選択枝系 - 黒塗り - 択一
10	選択枝系 - 黒塗り - 複数選択
11	選択枝系 - 黒塗り・○ 複合
12	選択枝系 - 黒塗り（小項目グルーピング）
13	表形式 - セル選択式（図形記入）
14	表形式 - 黒塗り選択式
15	時系列 - スケジュール表

図表 2-76 生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証 | 単純抽出パターン定義イメージ⁸



記載 パターン 番号	凡例	概要
①		テキスト系 - 枠の外に項目名
②		テキスト系 - 枠の中に項目名
③		テキスト系 - 左側に項目名を示す四角い枠
④		テキスト系 - 上側に項目名を示す四角い枠
⑤		テキスト系 - 罫線区切りテキストブロック形式
⑥		選択枝系 - ○囲み - 択一
⑦		選択枝系 - ○囲み - 複数選択
⑧		選択枝系 - ○囲み - 数字選択
⑨		選択枝系 - 黒塗り - 択一
⑩		選択枝系 - 黒塗り - 複数選択
⑪		選択枝系 - 黒塗り・○ 複合
⑫		選択枝系 - 黒塗り（小項目グルーピング）
⑬		表形式 - セル選択式（図形記入）
⑭		表形式 - 黒塗り選択式
⑮		時系列 - スケジュール表
⑯		図形 - 家族構成図
⑰		図形 - 家屋見取り図
⑱		図形 - 障害等の部位

単純抽出パターンごとの生成 AI による単純抽出の精度検証の結果、平均の得点がテキスト系については 100 点満点中 80 点以上となった一方で、6 の単純抽出パターン（選択枝系 - ○囲み - 複数選択、選択枝系 - ○囲み - 数字選択、選択枝系 - 黒塗り - 複数選択、選択枝系 - 黒塗り（小項目グルーピング）、表形式 - 黒塗り選択式、時系列 - スケジュール表）については平均の得点が 50 点未満となった。詳細な結果は図表 2-77 の通りである。精度検証の指標としてはレーベンシュタイン距離から得点を算出する方法⁹を採用した。レーベンシュタイン距

⁸図表 2-76 中で単純抽出パターン定義の対象としたアセスメント様式の出典：社会福祉法人 全国社会福祉協議会、「居宅サービス計画ガイドライン ver.3」アセスメント様式、

<https://www.shakyo.or.jp/download/careplanGL/index.html>

⁹ 今回の検証では、レーベンシュタイン距離（編集回数）を文字列長で割って正規化（ $100 \times (1 - \text{距離} / \text{最大可能距離})$ ）し、100 点満点の得点に変換している。

離と実際の単純抽出結果のイメージについては図表 2-78 に示す。なお、レーベンシュタイン距離を算出するにあたっての正解データの作成はケアプラン点検を担当する事務職相当の知見を有する人間が作成している。

また、検証は生成 AI による単純抽出は、多様なアセスメントシートを汎用的に取り込めるような実装を想定し、アセスメントシートを A4 のページ 1 枚単位に分割したうえで生成 AI にインプットをし、情報を抽出する方法で行った。ただし、パターン B においては、表の構造が比較的複雑であったことから、A4 の用紙をさらに分割して生成 AI にインプットをした。

図表 2-77 生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証 | 単純抽出精度結果（生成 AI）

\アセスメントシート様式番号	A	B	C	D	E	平均
単純抽出パターン \事例数	21	10	5	5	3	44
テキスト系 - 枠の外に項目名	80.26	-	-	-	-	80.26
テキスト系 - 枠の中に項目名	82.98	-	99.79	99.07	48.64	82.62
テキスト系 - 左側に項目名を示す四角い枠	86.22	88.34	66.55	54.53	100.00	79.13
テキスト系 - 上側に項目名を示す四角い枠	80.10	97.72	97.70	100.00	96.03	94.31
テキスト系 - 破線区切りテキストブロック形式	92.38	-	-	-	-	92.38
選択肢系 - ○囲み - 択一	68.42	65.83	62.50	-	100.00	74.19
選択肢系 - ○囲み - 複数選択	83.89	48.27	-	-	15.91	49.36
選択肢系 - ○囲み - 数字選択	43.54	-	-	-	50.72	47.13
選択肢系 - 黒塗り - 択一	71.01	-	-	-	-	71.01
選択肢系 - 黒塗り - 複数選択	27.31	-	-	-	-	27.31
選択肢系 - 黒塗り・○ 複合	58.26	-	-	-	-	58.26
選択肢系 - 黒塗り（小項目グルーピング）	46.32	-	-	-	-	46.32
表形式 - セル選択式（図形記入）	72.52	-	-	-	-	72.52
表形式 - 黒塗り選択式	35.50	-	-	-	-	35.5
時系列 - スケジュール表	59.71	-	41.29	45.79	25.68	43.12
選択肢系 - チェックボックス - 択一	-	-	90.20	100.00	-	95.1
選択肢系 - チェックボックス - 複数選択	-	-	57.36	-	-	57.36
選択肢系 - 黒塗り・○ 複合	58.2	-	-	-	-	58.2

図表 2-78 生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証 | レーベンシュタイン距離による評価の一例

【評価の一例】

項目名	単純抽出イメージ 凡例： 正解データと異なる文字 抽出できなかった文字	正解データ	得点
フェイスシート_これまでの生活の経過	〇〇の下町出身。実家は酒屋で、結婚するまで稼業を手伝っていた。28歳で結婚しA市へ転居。夫はB県出身で建築会社に勤務していた。専業主婦として子供二人を育てる。市域の手芸サークル、高齢者施設のボランティアに参加するなど、80歳頃までは活発に地域の活動に参加していた。夫は平成30年頃逝去し、現在は長男と二人暮らし。長男は早朝に出勤し夜間帰宅するため、日中は独居。今も掃除と洗濯が日課。	〇〇の下町出身。実家は酒屋で、結婚するまで家業を手伝っていた。28歳で結婚しA市へ転居。夫はB県出身で建築会社に勤務していた。専業主婦として子供二人を育てる。市域の手芸サークル、高齢者施設のボランティアに参加するなど、80歳頃までは活発に地域の活動に参加していた。夫は平成30年に逝去し、現在は長男と二人暮らし。長男は早朝に出勤し夜間帰宅するため、日中は独居。今も掃除と洗濯が日課。	96.907
フェイスシート_相談内容_本人	本人様もお願いいたします。	本人様：お願いいたします。	76.923

指標の特性上、意味が離れても得点が比較的高く出る場合もある点に留意が必要

さらに、比較対象として AI-OCR の単純抽出精度の検証を実施し、生成 AI の精度と比較を行った。結果、「選択枝系 - 〇囲み - 複数選択」、「選択枝系 - 黒塗り・〇 複合」以外のすべての項目で AI-OCR の得点が上回る結果となった。なお、「選択枝系 - 黒塗り - 複数選択」の得点が顕著に AI-OCR のほうが高い直接的な理由は、生成 AI は黒塗り選択された結果を簡条書きと誤認したのに対して AI-OCR では正常に項目が選択された状態と認識できたためである。

両者の精度比較結果から、書類の読み取りに専門特化している AI-OCR のほうが生成 AI と比較して単純抽出精度については一定の優位性があることが確認された。その一方でテキスト系の読み取りについては AI-OCR のほうが精度としては勝るものの、生成 AI も近い性能を有していることが確認された。

検証の詳細な結果は図表 2-79 の通りである。なお、AI-OCR の検証ではアセスメントシートを A4 のページ 1 枚単位に分割したうえで、表内に定義されている項目名を UI 上からインプットし、情報を抽出させた（生成 AI、AI-OCR それぞれのサービス上の特性の関係から完全に同条件での試験は行っていない）。従って、この結果は当該 AI-OCR サービスに備わっている個別項目に対する詳細な読み取り設定等を行った結果ではないことに留意して参照する必要がある。

図表 2-79 生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証 | 単純抽出精度結果（AI-OCR・生成 AI 比較）

	AI-OCR	生成 AI	得点差
＼アセスメントシート様式番号	A	A	(AI-OCR-
単純抽出パターン ＼事例数	5	21	生成 AI)※
テキスト系 - 枠の外に項目名	92.70	80.26	12.44
テキスト系 - 枠の中に項目名	98.87	82.98	15.89
テキスト系 - 左側に項目名を示す四角い枠	97.55	86.22	11.33
テキスト系 - 上側に項目名を示す四角い枠	96.92	80.10	16.82

	AI-OCR	生成 AI	得点差
\アセスメントシート様式番号	A	A	(AI-OCR- 生成 AI)※
単純抽出パターン \事例数	5	21	
テキスト系 - 破線区切りテキストブロック形式	94.31	92.38	1.93
選択肢系 - ○囲み - 択一	100.00	68.42	31.58
選択肢系 - ○囲み - 複数選択	56.86	83.89	-27.03
選択肢系 - ○囲み - 数字選択	80.00	43.54	36.46
選択肢系 - 黒塗り - 択一	80.00	71.01	8.99
選択肢系 - 黒塗り - 複数選択	88.14	27.31	60.83
選択肢系 - 黒塗り・○ 複合	18.06	58.26	-40.2
選択肢系 - 黒塗り (小項目グルーピング)	66.67	46.32	20.35
表形式 - セル選択式 (図形記入)	81.86	72.52	9.34
表形式 - 黒塗り選択式	68.52	35.50	33.02

※ オレンジ色の行 = AI-OCR の方が得点が高かった単純抽出パターン、青色の行 = 生成 AI のほうが得点が高かった単純抽出パターン

また、単純抽出精度検証を実施する中で、単純抽出精度が低くなりやすい書類パターンについて整理をし、単純抽出の精度向上のために利用できる技術についてパターンに対応させるかたちで調査・整理し、さらに活用に向けた課題を検討した。結果は図表 2-80 に示す。

図表 2-80 生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証 | 今後利用可能な技術

読み取り精度が落ちやすい書類パターン	利用できる技術	活用に向けた課題	備考
・ 裏映りがある ・ 書類の濃度が極端に薄い、または濃い	画像鮮明化	自動で読み取りやすい濃度等に調整するためにはロジックの検討が必要	OpenCV を使用して検討
・ 書類が傾いている	傾き補正	適正な傾きに調整するためにはロジックの検討が必要	OpenCV を使用して検討
・ 表構成が複雑な様式	読み取り枠の自動分割	枠を分割する位置についてはある程度マニュアルで設定が必要 (様式別に設定する想定)	OpenCV を使用して検討 ※検証内では B のアセスメント様式で適用

2) 再構成の精度検証

単純抽出パターンの分類については、対象のアセスメントシート5パターンの内容と本事業内で検討するケアプラン点検用アセスメントシート様式の内容を踏まえ、図表 2-81 の通り整理した。

図表 2-81 生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証 | 再構成パターン

パターン#	再構成分類	再構成パターン名	備考
1	1:1	単純転記	ロジックで対応可能なため検証対象外とする
2-1	1:1	意味を踏まえた部分抜粋	-
2-2	1:1	意味を踏まえた部分抜粋 (選択項目)	-
3	N:1	複数項目の内容統合	-
4	N:1	複数項目の内容統合 (重複する内容を多く含む)	-
5	1:N	1 項目の内容を複数項目に分解	-
6	N:N	複数項目の内容を複数項目に分解	-

再構成パターンごとの生成 AI による再構成の精度検証の結果、すべての再構成パターンの平均得点が 100 点満点中、90 点以上となった。詳細な結果は図表 2-82 の通りである。なお再構成の精度検証は、再構成元の文章から、①再構成後の文章に含まれるべき情報（正解データ）が含まれているか、②余剰な情報が含まれていないかの 2 つの観点でチェックし、得点を算出した¹⁰。評価のイメージについては図表 2-83 の通り示す。なお、再構成後の文章に含まれるべき文節と、再構成後の文章に当該情報が含まれているかは（ケアマネジャー等専門知識を有する人間ではなく、）事務職相当の知見を有する人間が定義・判断した。また、精度検証対象データの選定は 44 事例から再構成パターンごと・アセスメントシート様式ごとに代表的な項目を抜粋して行った。

¹⁰再構成の得点は「（「①再構成後の文章に含まれるべき情報（正解データ）が含まれているか」の正解割合×100）－（「②余剰な情報が含まれていないか」の件数×5）」の式で算出した。①の算出の方法は、人間が作成する正解データの文の数…（a）を確認し、さらに生成 AI が再構成した文章にそれぞれの文がいくつ含まれているか…（b）を人が確認し、（b）を（a）で割って算出した。なお、（b）の判定は全く同一の表現ではなかったとしても、同様の意味の分が含まれていれば可とした。②の算出の方法は人間が作成する正解データに含まれない情報が文単位でいくつ存在するか人が確認をした。なお、点数が 0 点以下になった場合は 0 点として扱った。また、情報無しが正解の場合は生成 AI も同様に情報無しと判断できた場合は 100 点として扱った。

図表 2-82 生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証 | 再構成精度結果（生成 AI）

＼アセスメントシート様式番号	A	B	C	D	E	平均
再構成パターン 事例数	21	10	5	5	3	44
意味を踏まえた部分抜粋	82.33	95.00	80.00	-	-	85.78
意味を踏まえた部分抜粋 （選択項目）	100.00	99.50	100.00	100.00	83.33	96.57
複数項目の内容統合	97.00	84.00	98.00	55.00	81.67	83.13
複数項目の内容統合 （重複する内容を多く含む）	100.00	91.00	96.00	94.07	96.67	95.55
1 項目の内容を複数項目に分解	99.22	99.00	-	86.30	100.00	88.68
複数項目の内容を複数項目に分解	84.19	80.00	94.00	86.88	98.33	96.13

図表 2-83 生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証 | 再構成精度評価の一例

【評価の一例】

項目名	生成AIの再構成結果	①再構成後の文章に含まれるべき情報が含まれているか		②余剰な情報が含まれていないか	
		再構成後の文章に含まれるべき情報 (正解データ)	判定	余剰な情報の内容	判定
家族の 主訴・意 向	息子：XXに引っ越してから夫婦二人で引きこもりがちになっている。掃除や入浴もちゃんと出来ているか不安がある。認知症も進行してきているのでデイサービスに行ってほしい。	息子：XXに引っ越してから夫婦二人で引きこもりがちになっている。	○	夫：二人で閉じこもり、認知症の進行が心配なのでデイサービスに行ったりリハビリや入浴をしてほしい。	1件の余剰な情報あり
		息子：掃除や入浴もちゃんと出来ているか不安がある。	○		
		息子：認知症も進行してきているのでデイサービスに行ってほしい	○		
	夫：自分も高齢なので掃除を手伝ってほしい。二人で閉じこもり、認知症の進行が心配なのでデイサービスに行ったりリハビリや入浴をしてほしい。	息子：二人で閉じこもり、認知症の進行が心配	×		
		夫：自分も高齢なので掃除を手伝ってほしい。	○		
		正解割合	4/5 = 0.8	余剰な情報	1
((①の正解割合 = 0.8) × 100) - ((②の件数 = 1) × 5) = 80 - 5 = 75点					

3）精度検証の結果を踏まえた生成 AI による転記機能の実現可能性

単純抽出・再構成それぞれの精度検証の結果から、単純抽出については本検証における前提条件下¹¹において人間と同等の文字の読み取りをすることが難しいこと、再構成については完全ではないものの比較的人間（事務職）と同等のアウトプットが可能であることが示唆された。さらに、単純抽出についてはAI-OCRを活用することで一定の精度向上が見込めること、また生成AIを活用する場合にも画像鮮明化・傾き補正・読み込む様式の情報の事前インプット等を行うことでより精度向上が見込める可能性があることについても確認ができた。

¹¹ 多様なアセスメントシートを汎用的に取り込めるような実装を想定し、アセスメントシートをA4のページ1枚単位に分割したうえで生成AIにインプットをし、情報を抽出する方法で行った。ただし、パターンBにおいては、表の構造が比較的複雑であったことから、A4の用紙をさらに分割して生成AIにインプットをした。生成AIが文字情報を読み取りやすくなるように濃度や傾きを調整したり、読み取り範囲をある程度限定したうえで、あらかじめ紙面に記載されている項目名や記載方法（選択肢が否か・選択肢の場合どのような方式の選択肢か等）をプロンプトに指定したり等すれば、本検証以上の単純抽出精度になると想定する。

このような結果を踏まえ、生成 AI による転記機能の実現可能性は一定程度確認ができた。ただし、特にアセスメント様式からの文字情報の単純抽出精度の向上及び精度向上と汎用的な取り込み UI の両立可能性の検討については課題が残ると推察される。

(4) 『WEB 版ケアプラン点検支援ツール』のロードマップ案の更新

1) ロードマップ作成にかかるこれまでの取組の整理

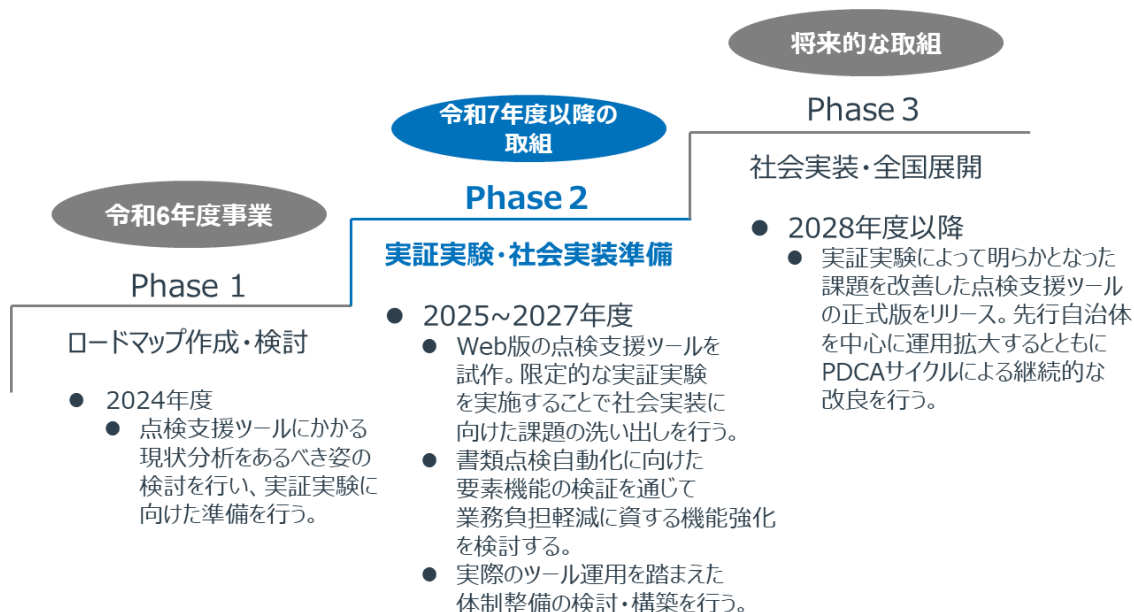
まず、点検支援ツールの社会実装に向けたロードマップの検討に至るまでの取組について整理を行った。本事業では、令和 2 年度以降、ケアプラン点検支援マニュアルの整備、ケアプラン点検データの分析、点検項目の検討等を段階的に実施し、保険者によるケアプラン点検業務の高度化・効率化に向けた検討を進めてきた。

これらの検討結果を踏まえ、点検支援ツールの開発や実証実験を行い、書類点検の支援や業務効率化に資する機能の検証を進めてきた。これらの取組を踏まえ、令和 6 年度には、点検支援ツールの社会実装を見据えたロードマップの整理を行った。

具体的には、ロードマップ作成・検討の段階、実証実験と社会実装準備の段階、社会実装・全国展開の段階という三つのフェーズを想定し、ツール開発や実証、運用体制の検討を段階的に進める方向性を整理した。点検支援ツールの社会実装に向けた段階的な取組（令和 6 年度検討）を図表 2-84 に示す。

また、ロードマップの検討にあたっては、ツールの機能開発だけでなく、運用体制や制度との関係も踏まえた整理が必要であることから、介護分野における情報連携基盤の整備状況との関係も考慮しながら、ツールの実証や社会実装の進め方について検討を行った。令和 6 年度に検討した点検支援ツール開発のロードマップ案を図表 2-85 に、点検支援ツール開発のロードマップ案（他のシステム状況との比較）を図表 2-86 に示す。

図表 2-84 点検支援ツールの社会実装に向けた段階的な取組（令和 6 年度検討）



図表 2-85 点検支援ツール開発のロードマップ案（令和 6 年度検討）

	FY24 (R6)年度	FY25 (R7)年度	FY26 (R8)年度	FY27 (R9)年度	FY28 (R10)年度
運用、情報・サービスの流れについて		基盤準備と現状把握 やり取りされる資料の整理、連携要件精査	実証準備・α版検討 点検フローにツールを組み込み有効性評価	運営準備・β版検討 例えば、ドキュメント読取、点検プロセス活用、データ分析の運用検討	社会実装・展開 先行自治体でのツール展開を開始。運用状況モニタリングしPDCA推進
PF・運営主体・ビジネスモデル		導入検討フェーズ 運営主体候補と関係構築、ツール必要性の訴求	実証実験フェーズ 提供価値の実証 運営モデル提案	運営準備フェーズ 関係者内での体制構築 先行実証地域の選定	社会実装フェーズ 先行自治体での運用開始、PDCAサイクル推進
ツールの機能について	1. 実証と学習モデルの再作成 2. ケアプラン点検支援ツール開発ロードマップの作成 3. ケアプラン点検支援ツールの機能の改良	ツール実証実験Step1 Web版を開発し、利用性及び業務効率化に関する検証 部分的機能検証 書類点検自動化に向けたAI-OCR、自然言語処理、RPAの機能検証	ツール実証実験Step2 介護情報基盤及び周辺システムとの連携による点検自動化に向けた検証 ツール実証実験 ツールα版を開発し、時間短縮、業務負荷低減の検証	社会実装準備 ケアプラン点検ポータルサイトの運用ルールの整備と先行自治体との調整 社会実装準備 ツールβ版を開発 業務効率化、ケアマネジメントの質への寄与検証	社会実装・展開 先行自治体での運用を開始し、全国展開に向けた課題解決 社会実装・展開 実証結果をもとにしたツールの改良、正式版リリース
点検項目とツールのブラッシュアップ		点検項目改定に伴うツールのブラッシュアップ・リリース (R6年度成果分)			点検項目改定に伴うツールのブラッシュアップ・リリース (R9年度成果分)
ツールの提供価値		エクセル版の機能を踏襲したケアプラン点検支援ツールをWebブラウザから利用可能	既存アセスメントシートの読込と統一的様式への転記が可能	書類点検の自動化 広域的なデータ分析が可能 セルフチェックへの活用	書類点検の自動化 広域的なデータ分析が可能 他システムとの連携

図表 2-86 点検支援ツール開発のロードマップ案（他のシステム状況との比較）（令和 6 年度検討）

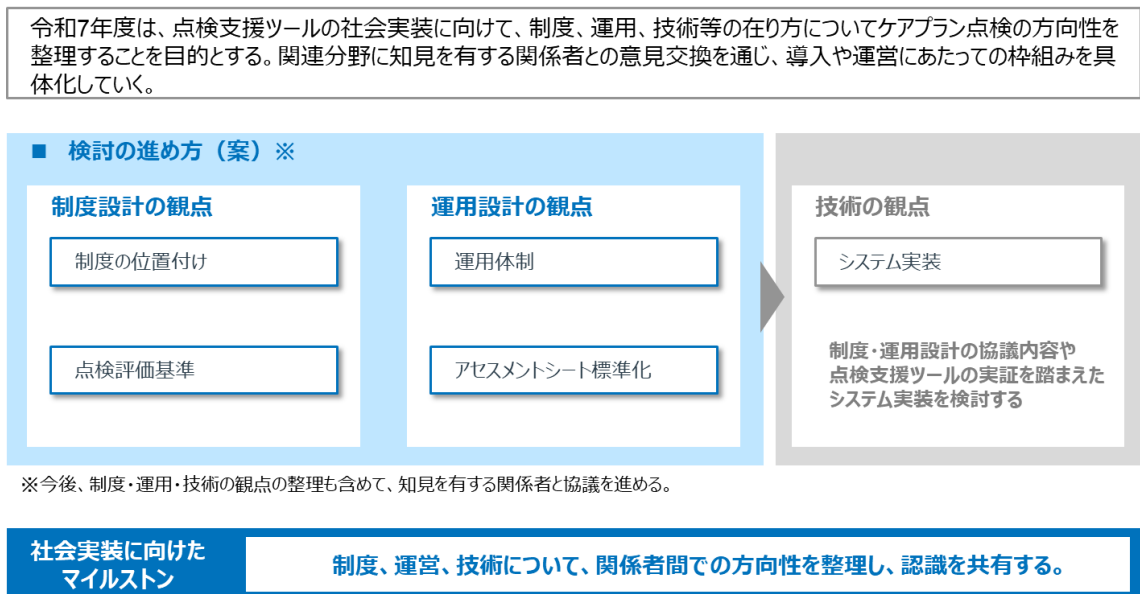
	FY24 (R6)年度	FY25 (R7)年度	FY26 (R8)年度	FY27 (R9)年度	FY28 (R10)年度
ツールの機能について	1. 実証と学習モデルの再作成 2. ケアプラン点検支援ツール開発ロードマップの作成 3. ケアプラン点検支援ツールの機能の改良	ツール実証実験Step1 Web版を開発し、利用性及び業務効率化に関する検証 部分的機能検証 書類点検自動化に向けたAI-OCR、自然言語処理、RPAの機能検証	ツール実証実験Step2 介護情報基盤及び周辺システムとの連携による点検自動化に向けた検証 ツール実証実験 ツールα版を開発し、時間短縮、業務負荷低減の検証	社会実装準備 ケアプラン点検ポータルサイトの運用ルールの整備と先行自治体との調整 社会実装準備 ツールβ版を開発 業務効率化、ケアマネジメントの質への寄与検証	社会実装・展開 先行自治体での運用を開始し、全国展開に向けた課題解決 社会実装・展開 実証結果をもとにしたツールの改良、正式版リリース
ツールの提供価値		エクセル版の機能を踏襲したケアプラン点検支援ツールをWebブラウザから利用可能	既存アセスメントシートの読込と統一的様式への転記が可能	書類点検の自動化 広域的なデータ分析が可能	Web版のツールの機能拡充 ・広域的なデータ分析が可能
地方公共団体情報システム	業務システム統一・標準化 先行事業、本格移行期		全自治体ガバクラ化 約300自治体の作業完了が2025年度末に間に合わない見込み		
介護情報基盤	システム開発 2024.10～※先行実施 大分・都城		運用開始予定は2026.04～であるが 多くの自治体が対応が困難と回答している		
CPデータ連携システム・LIFE	データ蓄積にかかる改修、実績確認 2024.04～ 運用 w/厚生労働省	システム開発 2025.04～	運用開始予定 2026.04～		
LIFEシステム		中央会向LIFE 開発・移換2025.04～	運用開始予定 2026.07～		

2) ロードマップの具体化に向けた整理の方向性

これまでの検討を踏まえ本事業では点検支援ツールの社会実装に向けたロードマップを具体

化するため、検討の方向性を整理した。本検討にあたっては、ツールの機能開発やシステム実装のみを個別に検討するのではなく、制度・運用・技術の各観点を総合的に検討する必要があると考えた。このため、まず制度設計および運用設計の観点から、ケアプラン点検の制度上の位置付け、点検評価基準、運用体制、アセスメント様式の標準化等の論点を整理し、それらを踏まえて技術面での実装の方向性を検討することとした。ロードマップの更新に向けた対応方針を図表 2-87 に示す。

図表 2-87 ロードマップの更新に向けた対応方針



3) 点検支援ツールの運用の全体像の検討

次に、点検支援ツールの社会実装を見据え、「WEB 版ケアプラン点検支援ツールの試験開発」「WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証」、「生成 AI による所定のアセスメント様式への転記可能性の検証」の結果を踏まえてツール運用の全体像について検討を行った。

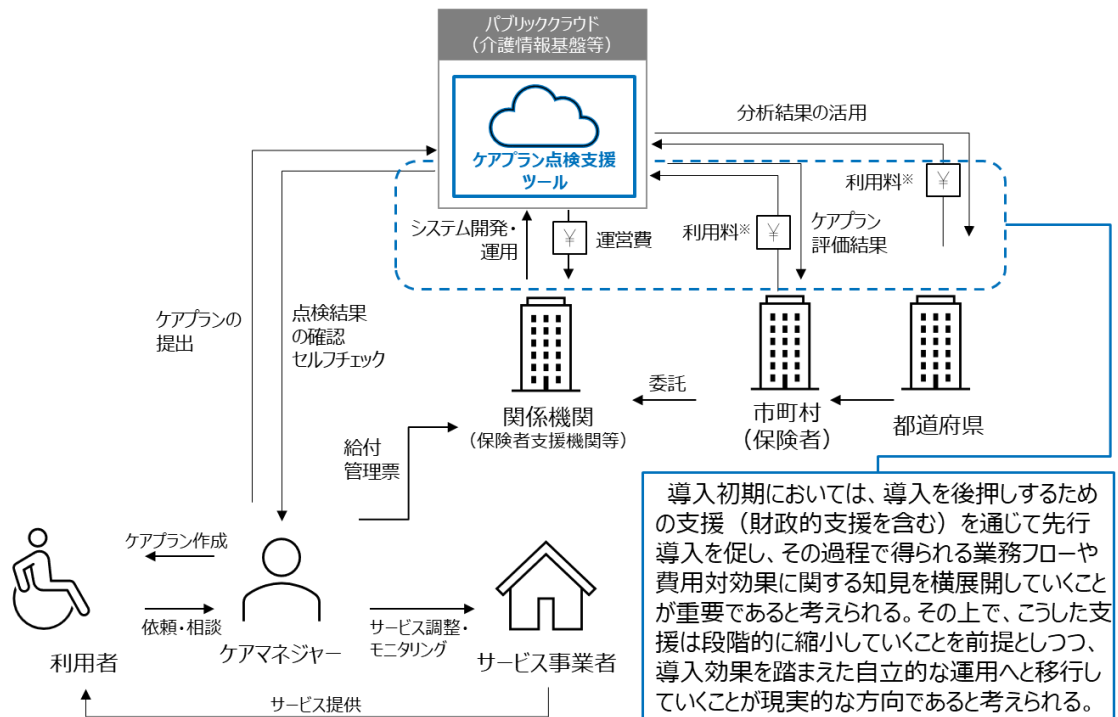
まず、ケアプラン点検業務におけるツールの活用の流れとして、ケアマネジャーが作成するケアプランやアセスメントシートの情報を点検支援ツールに取り込み、AI 等の技術を活用して書類確認を補助する仕組みを想定した。ケアマネジャーは、ツールによるアセスメント様式への転記結果等を確認・修正したうえで保険者へ提出し、保険者はツールにより示される確認結果を参考に書類確認を行う。

必要に応じてケアマネジャーとの面談を行うことで、点検業務を進めていく流れである。このような仕組みにより、点検作業の負担軽減に加え、点検の観点を共有しやすくなることが考えられる。

また、この業務フローを支えるシステムの提供形態については、パブリッククラウド上でツールを提供し、保険者がクラウドサービスとして利用する形を基本とする方向で検討した。クラウド型とすることで、自治体ごとの個別整備を必要とせず、機能改善や更新を一体的に行うことが可能となるため、将来的な展開や運用管理の観点からも現実的であると考えられる。あわせて、ツールの運用主体や

運用支援体制の在り方についても検討を行った。さらに、ツールを継続的に運用していく観点から、開発・運用費用の負担の在り方についても概略を整理した。以上を踏まえ、本事業では、点検支援ツールの社会実装を見据え、業務の流れおよび運用体制を中心にツール運用の全体像を示した。ケアプラン点検支援ツールの運用の全体像（案）を図表 2-88 に示す。

図表 2-88 ケアプラン点検支援ツールの運用の全体像（案）



4) ロードマップにもとづく点検支援ツール活用イメージ

以上の検討を踏まえ、点検支援ツールの社会実装に向けた段階的な活用の考え方についても整理した。点検支援ツールの活用イメージについて、図表 2-89 に示す。

まず導入段階では、保険者によるケアプラン点検業務の効率化および標準化を目的として、点検支援ツールを活用することを想定した。

次に、ツールの利用が普及する段階では、ケアマネジャーが転記機能等を通じてケアマネジャー自身が作成したケアプランの内容の振り返りができるようになり、これまでに保険者が行っていた点検の観点を踏まえた見直しも行うことが可能となる。このような活用を通じて、ケアマネジャーによるセルフチェックの取組が進み、ケアマネジメントの質の向上にもつながる可能性がある。

さらに将来的には、ツールの利用を通じて蓄積される点検データを活用し、地域におけるケアマネジメンツの傾向や課題の把握につなげることも視野に入れる。これにより、地域課題への対応やケアマネジメンツの質の向上に資するデータ活用が進むことが期待される。

	STEP1 ケアプラン点検での活用	STEP2 セルフチェックでの利用	STEP3 将来
時期	導入期（R11年度以降）	普及・定着期（導入後1-3年程度）	高度化期（導入後4年目以降）
位置付け	➢ 保険者によるケアプラン点検の効率化、業務負荷低減	➢ ケアマネジャーによる自律的なセルフチェック用途における利用	➢ 電子化された点検データ等活用
主な期待効果	➢ 保険者の点検業務の効率化・標準化 ➢ 保険者とケアマネジャーの間で、ケアプラン点検にかかる共通認識の醸成が期待される。	➢ ケアマネジャーが転記作業を通じてケアプランを振り返ることによる、ケアマネジメントの質の向上	➢ 地域課題の明確化 ➢ 地域のケアマネジメントの質向上

ツールの活用イメージ

```

graph TD
    A[多様なアセスメントシート] -- 転記 --> B[本事業のアセスメント様式 ELSX]
    B -- 点検 --> C[保険者 受益者]
    D[転記機能 + 点検支援ツール] -- 点検 --> C
    E[保険者が提供する点検支援ツールを活用し、ケアマネジャーによるセルフチェックの取組みを促す想定] --> F[ケアマネジャー]
    F -- データに基づく地域課題への対応 --> G[データに基づく地域課題への対応]
    
```

多様なアセスメントシート

PDF PDF

転記

本事業のアセスメント様式

ELSX

点検

保険者 受益者

転記機能 + 点検支援ツール

保険者が提供する点検支援ツールを活用し、ケアマネジャーによるセルフチェックの取組みを促す想定

ケアマネジャー

データに基づく地域課題への対応

(1) 今年度の検証の成果

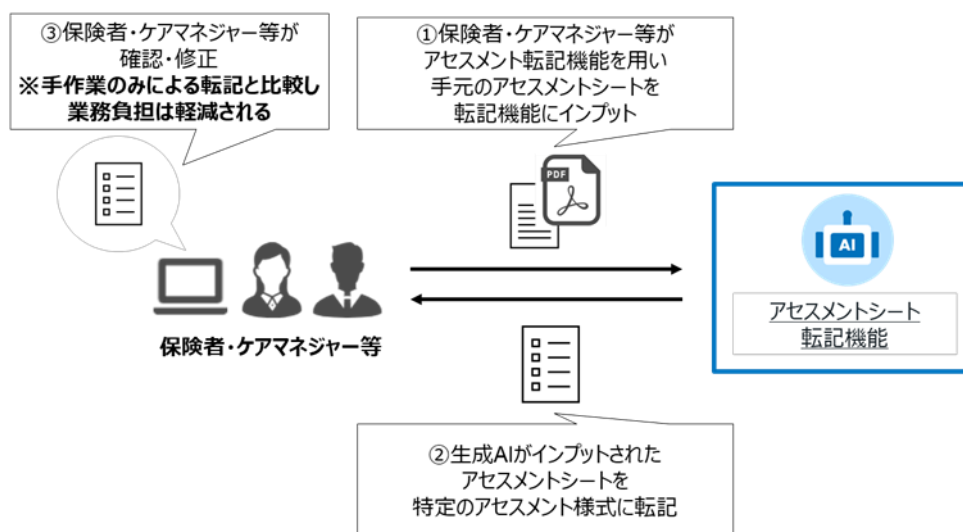
「WEB 版ケアプラン点検支援ツールの試験開発」では、完全ローカル環境で動作する WEB 版ケアプラン点検支援ツールを開発し、WEB 版ケアプラン点検支援ツールを用いた「WEB 版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証」を実施した。保険者検証では、エクセル版ケアプラン点検支援ツールでは実現できない WEB 版ケアプラン点検支援ツールの効果や、WEB 版ケアプラン点検支援ツールの UI/UX の課題について示唆を得ることができた。具体的には WEB 版ケアプラン点検支援ツールの効果としては自動書類確認機能による業務効率化、保険者（特に事務職間での）の業務引継ぎへの活用可能性や、地域比較によるファクトに基づいた地域の施策検討可能性について示唆が得られた。

92

図表 2-90 転記機能実装に向けた課題と対応（案）

課題	対応方法	対応にあたって想定される課題
単純抽出の精度がパターンによって低い	単純抽出の精度を向上させる	AI-OCR技術を活用する - 書類の読み取り方式を利用者（ケアマネジャーや自治体職員を想定）が様式ごとに設定する必要がある - 生成AIのみを利用するパターンよりシステム構成が複雑になり、費用が高額になる可能性がある
		生成AIに読み取り領域や読み取り方法を厳密に指示する 書類の読み取り方式を利用者（ケアマネジャーや自治体職員を想定）が様式ごとに設定する必要がある
	単純抽出を回避する	システム同士で電子データの情報連携を行う - 情報連携のための仕様を検討する必要がある - 記録ソフト側の改修が必要な可能性がある - 手書きには対応できない
再構成の精度は一定程度あるものの完全ではない	決められた様式のExcelシート等に入力されたデータが出力・記入される	（記録ソフトを利用している場合）記録ソフト側の改修が必要になる可能性がある （手書きの場合）利用者側に文字起こしの手間が発生する
	アセスメントシート作成者（ケアマネジャー）が生成AIの出力した内容のチェックをする	ケアマネジャーがダブルチェックする業務負担が発生する

図表 2-91 転記機能の利用モデル（案）



さらに、これらの結果を踏まえ、『WEB 版ケアプラン点検支援ツール』のロードマップ案の更新を行い、ケアプラン点検事業の DX を推進していくために必要なアクションを確認した。

ロードマップの具体化にあたっては、本事業における検討結果を踏まえ、ケアプラン点検の制度上の位置付け、運用体制の在り方、システム実装の方向性等について検討を行った。

その結果、ケアプラン点検支援ツールの社会実装を検討する上では、主に三つの論点が重要であると位置付けた。

第一に、ケアプラン点検の制度的な位置づけの明確化の必要性である。現在のケアプラン点検は、自治体ごとに取り組状況や実施方法にばらつきが見られ、その目的や役割が十分に共有されているとは言い難い。このため、ケアプラン点検がケアマネジメントの質の向上や給付の適正化にどのように寄与するのか

を改めて整理し、制度としての位置付けを明確にしていく必要がある。

第二に、関係機関との協議の必要性である。点検支援ツールを制度的な枠組みの中で位置付けていくためには、厚生労働省、国民健康保険中央会、職能団体などの関係機関と連携しながら、制度、運用、技術の各観点から実現可能な枠組みを検討していくことが不可欠である。

第三に、ツールの効果検証に向けたモデル事業の必要性である。ツールの導入効果や運用上の課題を把握するためには、実際の自治体において試行的に活用し、その結果を踏まえて制度設計や運用方法を具体化していく取組が求められる。

これらを踏まえ、本事業では、ケアプラン点検の制度的な位置付けの整理、関係機関との協議、モデル事業の実施等を今後の検討課題として位置付け、制度、運用、技術の各観点からロードマップの見直しを行った。あわせて、これらの検討の進捗を踏まえ、実現可能性を考慮したスケジュールとした。ケアプラン点検支援ツールロードマップ更新版（案）図表 2-92 に示す。

図表 2-92 ケアプラン点検支援ツールロードマップ更新版（案）

	令和7年度	令和8年度	令和9年度	令和10年度	
点検支援ツール	WEB版開発 転記検証	モデル地域における検証準備			モデル地域による先行的な検証
アセスメント様式	現場実証～ 様式案改訂	様式案検討～確定			
セルフチェックツール	点検項目マニュアルセルフチェック版、使い方ガイド作成	ケアプラン点検項目マニュアルセルフチェック版の実用事例創出			

※上記の点検支援ツールPKGの検討と並行して、ケアプラン点検の意義・役割の整理や関係機関との協議を進めていく必要がある。なお、ケアプラン点検の再定義については重要な論点であるが、本事業での取扱いについては別途整理が必要と考えられる。

（２）残された課題

残された課題としては大きく2つある。1つ目はWEB版ケアプラン点検支援ツールのブラッシュアップ及び社会実装である。今年度事業において、WEB版ケアプラン点検支援ツールの利用ニーズが保険者にあることが確認された。さらに、ケアプラン点検項目を使った書類確認の業務負担が大きく削減できる可能性があることも確認された。このことから保険者検証で得られたUI/UXの課題を解消しつつ、WEB版ケアプラン点検支援ツールを社会実装し、広く保険者が利用できる環境を醸成していくことが望まれる。また、社会実装に向けてWEB版ケアプラン点検支援ツールの効果（特に、業務改善効果）を定量的に実証していくにあたっては、推奨されるケアプラン点検の枠組みをより明確化していくことも求められる。具体的には、保険者規模等にあわせたケアプラン点検の実施の規模（件数等）について、ケアプラン点検事業の目的と整合する形で整理していくことも検討できる。

2つ目はケアプラン点検用アセスメント様式への転記機能の実現である。本事業の中でケアプラン点検用アセスメント様式のニーズは一定確認されたものの、転記にかかる負担感の軽減が課題として提起されている。さらに、WEB版ケアプラン点検支援ツールに情報を構造化して取り込ませ、自動書類確認機能を実現していくにあたって、所定のアセスメント様式への転記機能は重要な要素になる。「生成AIによる所定のアセスメント様式への転記可能性の検証」では単純抽出の精度向上、再構成精度のケアマネジャーによる検証の必要性があることが確認された。このような課題の検討を継続し、ケアプラン点検

用アセスメント様式への転記機能の実現につなげていく必要がある。

さらに、これらの課題に加え、点検支援ツールの社会実装に向けては、制度・運用面の整理も重要な論点となる。本事業におけるロードマップの検討を踏まえると、ツールの機能開発や実証にとどまらず、制度、運用、技術を一体的に捉えた検討が求められる。具体的には、ケアプラン点検の制度上の位置付けや評価基準の明確化に加えて、運用主体や関係機関間の役割分担、他の情報基盤との連携のあり方の検討が挙げられる。また、社会実装にあたっては、モデル地域での検証を通じて得られる知見を踏まえ、運用方法や必要な機能を具体化していくとともに、その結果を全国展開の前提として位置付けていくことが重要である。これらの課題については、これまでに検討してきた方向性を踏まえつつ、今後の取組の中で検証と改善を重ねながら実現していく必要がある。その際、実証結果や技術動向を踏まえ、必要に応じてロードマップの見直しも行いながら、点検支援ツールの社会実装に向けた取組を着実に進めていくことが重要である。

第4章 ケアプラン点検のためのアセスメント様式の検討

1. 目的

現状、ケアプラン作成のために実施されるアセスメントにおいては、ケアマネジャーごとに用いるアセスメント様式が異なるが、アセスメント様式に記載枠がない項目は記載／未記載が分かれており、点検結果やアセスメントの質に影響することが指摘されている。また令和6年度に実施したケアマネジャーヒアリング調査からも、実際にはアセスメントを行っていても、アセスメント様式に記載枠がなければ記録として残していない場合がある実態が明らかとなった。

加えて、点検支援ツールを効果的かつ効率的に用いるという側面からも、現状では点検支援ツールに自動的にアセスメント様式上の情報を読み込めず、点検に手間がかかることが懸念されている。

これらの課題に対し、令和6年度事業においてアセスメント様式案を開発した。本事業においては、開発したアセスメント様式案の充足性やケアプラン点検において用いる効果を検証することを目的に、7つの保険者の参加を得て実証を行った。

2. 方法

(1) リクルート及びアセスメント様式案の精査

本実証においては機縁法によるリクルートを行い、7保険者の参加を得た。

保険者のケアプラン点検担当者及びケアプラン点検を受けるケアマネジャー双方の観点でアセスメント様式案を精査した。

アセスメント様式案を精査する方法は以下のいずれかとした。

A：実際のケアプラン点検の場面でアセスメント様式案を用いる

B：ケアプラン点検の場面を想定してアセスメント様式案を精査する

(2) ヒアリング

アセスメント様式案を精査した結果を、ヒアリングにて聞き取った。

ヒアリングはオンラインにて1時間程度とし、原則として点検担当者及びケアマネジャーそれぞれ個別に機会を設定した。但し、双方の合意のもと、点検者及びケアマネジャー合同でのヒアリングを希望された場合は合同ヒアリングとした。

ヒアリング項目は下表の通りとした。

図表 2-93 ヒアリング内容

ヒアリング対象	ヒアリング項目
点検者	【総論】 ・ 様式の不揃いが点検に影響しているか

ヒアリング対象	ヒアリング項目
	- 点検用アセスメント様式統一のメリットは何か 【各論】 - 点検に必要な項目を充足しているか - 掲載の順番は妥当であるか - 様式案を用いることで点検が容易になるか - ケアプラン点検のプロセスにおいて AI 活用を期待する場面はあるか
ケアマネジャー	【総論】 - 点検書類の提出において課題があるか - 点検用アセスメント様式統一のメリットは何か 【各論】 - 点検に必要な項目を充足しているか - 掲載の順番は妥当であるか - 様式案を用いることで点検の納得度が向上するか - 通常のアセスメント業務に必要な項目を充足しているか - より適切な（抜け漏れの無い）アセスメントが可能となるか

（３）ワーキンググループにおける検討

ワーキンググループにおいて、実証の結果をふまえ、アセスメント様式案について今後検討すべき事項を整理した。

３． 結果

（１）アセスメント様式案の確認

7つの保険者の協力を得て実証を行った。実際のケアプラン点検の場面でアセスメント様式を確認した保険者は6 保険者であった。（以下、本章図表内ではケアマネジャーを CM と表記する。）

図表 2-94 アセスメント様式案確認方法

保険者	アセスメント様式案の確認方法	実証参加 CM 数
A	ケアプラン点検の場면을想定してアセスメント様式案を精査した	2 名
B	実際のケアプラン点検の場面でアセスメント様式案を用いて確認した	1 名
C	実際のケアプラン点検の場面でアセスメント様式案を用いて確認した	1 名
D	実際のケアプラン点検の場面でアセスメント様式案を用いて確認した	1 名
E	実際のケアプラン点検の場面でアセスメント様式案を用いて確認した（保険者） ケアプラン点検の場면을想定してアセスメント様式案を精査した（CM） ※ CM が提出したアセスメント様式の内容を保険者にて転記し、転記後のア	1 名

保険者	アセスメント様式案の確認方法	実証参加 CM 数
	セメント情報をケアプラン点検にも活用	
F	実際のケアプラン点検の場面でアセスメント様式案を用いて確認した	2 名
G	実際のケアプラン点検の場面でアセスメント様式案を用いて確認した	2 名

(2) ヒアリング結果

アセスメント様式案の内容については、充足度や掲載順は概ね妥当であるとの意見が多かった。既存の様式にはない項目もあり、気づきにつながる効果があることも示された。一方で、ケアマネジャーが実際にアセスメントを行う場面を想定すると、現場でのアセスメントの実態との乖離からいくつか改善すべき点があることも示唆された。

アセスメント様式案の活用可能性については、アセスメント様式を一種に統一することで、保険者からは点検の効率化につながる可能性が、ケアマネジャーからは保険者との共通認識の構築によりフィードバックの納得度につながる可能性や、転記作業を通したセルフチェックにもつながるとの意見が得られた。一方で、アセスメント様式案を実際に導入する場合、転記作業の負担感が大きいことが懸念点として示された。実際に転記を行うことが想定されるケアマネジャーの立場からはもちろんであるが、保険者の立場からも、アセスメント様式案の導入にあたっては転記機能をセットで示すことが必須であるとの意見が多かった。

ヒアリング結果詳細を以下に示す。

1) アセスメント様式不揃いの影響

アセスメント様式の不揃いによって「書類点検に時間がかかる」や「様式の情報不足」のような意見が挙げられた。

図表 2-95 アセスメント様式不揃いの影響

#	カテゴリ	・ 主な意見
1	書類点検に時間がかかる	・ 複数の様式が混在しているため、提出様式を読み込む手間が大きく、必要情報の記載場所を探したり、23項目が網羅されているかを毎回確認したりする作業に時間を要する。(A自治体・B自治体・F自治体・G自治体)
2	様式情報不足	・ 様式によっては記載欄が無い項目もあり、利用者ごとに必要な情報についてケアマネジャーが把握していた場合でも様式の問題で記録はされていない場合がある。(A自治体) ・ 事業所独自の様式で23項目がもとも欠けているものも一部存在する。(E自治体)
3	点検項目との照合のしにくさ	・ 様式ごとに評価方法や記載の仕方が異なるため、点検者が各様式の特徴を理解していないと、点検支援ツールの評価項目と適切に照合することが難しい。(C自治体・D自治体)
4	影響なし	・ アセスメント様式が不揃いでも、ケアマネジャーが23項目の情報をきちんと把握し課題整理・分析していれば、点検上は大きな支障にならない。但し、点検経験が浅い場合は同様にはいかない可能性もある。(E自治体)

2) 点検における書類提出時の課題

点検書類の提出に関する課題は感じていないものの、ケアプラン点検自体に心理的プレッシャーがあるとの意見が得られた。

図表 2-96 書類提出時の課題

#	カテゴリ	主な意見
1	書類提出の負担よりも心理的な負担感が大きい現状	- 原則作成している書類を提出するため書類提出そのものには負担はないが、ケアプラン点検自体が「指摘を受ける場」という認識のケアマネジャーも多く、心理的なプレッシャーがある。(D自治体CM) - 活用しているアセスメント様式は記載に時間がかかる。(E自治体CM) - 特に課題整理統括表に時間がかかる。(A自治体CM) - 原則作成しているものを提出するため、特段負担はない。(A自治体CM・B自治体CM・C自治体CM・F自治体CM・G自治体CM)

3) 点検用アセスメント様式を統一するメリット

アセスメント様式を統一することで、「振り返り機会の確保」や「点検の効率化」につながるとの意見が得られた。一方で、ケアマネジャーの転記負担といった点検用アセスメント様式の導入による懸念点も挙げられた。

図表 2-97 点検用アセスメント様式を統一するメリット

#	カテゴリ	主な意見
1	振り返りの機会の確保につながる	- 新たな様式に落とし込む際、自身の聞き取りの不足や抜けを改めて認識でき、アセスメントの質を見直すきっかけになる。(A自治体CM・B自治体CM・B自治体CM・C自治体CM・D自治体CM・G自治体CM) - 統一した様式で、推測や見立てに最低限必要な情報として提示されることで、アセスメントの目的（収集した情報の関係性を捉え、分析から仮説（課題）を導き出す）が明確になり、ケアマネジャー・点検者双方の気付きに繋がる。(G自治体)
2	点検の効率化につながる効果	- 点検者が複数のアセスメント様式に精通する必要がなくなり点検が容易になる。(A自治体・D自治体) - 確認場所や内容の確認に要していた時間が短縮でき、点検業務の効率化に繋がる。(G自治体) - 評価項目や記載方法が共通化され、点検支援ツールとの照合も容易になる。(D自治体) - アセスメントができていない・できていないの評価が把握しやすくなる。(F自治体)
3	点検の公平化につながる効果	- ケアマネジメントの評価を行う際に様式による影響（掲載のない項目がある等）がなくなる。(A自治体・D自治体) - アセスメント情報確認時の点検者側の技量の差が是正される。(F自治体) - ケアマネが把握している情報にもかかわらず、記載がないため確認するという作業が少なくなる。(A自治体) - ケアプランの趣旨や、利用者のどこ見ている／見ていないかが判断できるため、アセスメント様式が共通言語のような役目を果たす期待感がある。(E自治体・E自治体CM)
4	情報共有の標準化につながる効果	- 情報取得項目の基準が一律となり、ケアマネジャー間の引き継ぎが標準化される。(C自治体) - 指摘内容や指導内容を事業所内外で共有しやすくなる。(F自治体) - 居宅介護支援事業所から、アセスメント様式についても標準様式を示してほしいとの声が多数あり、その要望に応えることができる。(F自治体)

#	カテゴリ	主な意見
5	点検用アセスメント様式を統一する際の懸念点	- ケアマネジャーの業務負担の大きさが指摘されている。現状、自治体からわざわざ点検のためにゼロベースで様式間の転記作業を依頼することは難しい。(全点検者) - ケアプラン点検用の様式に転記する場合、転記作業の負担感が大きい。(D自治体CM・F自治体CM) - 通常業務でも使う様式として統一されるならよいが、点検専用として扱う場合、ケアマネジャーの立場としては手間が増え、大きなメリットは感じない。(A自治体CM・F自治体CM)
6	点検用アセスメント様式を導入する際に必要な対策	- ゼロベースで情報を転記していく作業は現実的ではない。一定程度は自動で転記できるツールの存在は必須だと感じる。(全CM) - 仮にAIで転記の作業をした場合でも正確にアセスメントした内容が転記されたかの確認作業が必要となる。(F自治体CM) - 従来のアセスメント様式でチェックした項目（取得している情報）の転記先が点検用アセスメント様式になかった場合、その情報の扱い／記載先に迷ってしまう可能性がある。チェック方式が中心で自由記述が少ない従来様式からの転記はケアマネが追加で多くの記載を行う必要があることにも留意が必要である。(C自治体CM) - AIを活用し自動転記するとしても、ケアプラン点検の趣旨の理解度や経験値等、ケアマネジャーの状況によっても負担感が異なるのではないか。(F自治体CM)

4) アセスメント様式案を用いる点検上の効果

実証の結果、アセスメント様式案を用いることで「負担軽減」や「効率化」、「点検の質向上」につながるとの意見が得られた。

図表 2-98 アセスメント様式案を用いる点検上の効果

#	カテゴリ	主な意見
1	負担軽減・作業効率化	- アセスメント情報の読み込みは容易になる。(A自治体・B自治体・C自治体・D自治体) - 点検者側のアセスメント確認時の技量差や視点のばらつきが是正され、ケアプラン点検後の取りまとめ作業等が容易になる。(F自治体) - ケアマネが把握している情報にもかかわらず、記載がないため確認するという作業が少なくなることが期待できる。(A自治体) - ケアマネジャーがどの部分の評価ができており、どの部分が評価できていないのかが分かりやすくなり、ケアプラン点検の出だしの作業が容易になる。(福岡介護保険広域連合) - 一般行政職員が点検を行う場合、事業所ごとにアセスメント様式が異なり、記載箇所の確認に時間を要するという問題が解消される。(G自治体)
2	点検の質向上	- ケアマネジメントの評価を行う際に様式による影響を除外できる。(A自治体) - 最低限必要な情報の項目が意向欄含め整備されているため、新様式に慣れてくると情報の分析に充てる時間が持て、面談においても仮説への考察が深められるのではないかと感じる。(G自治体)

5) アセスメント様式案を用いるフィードバック上の効果

アセスメント様式を統一することで、保険者とケアマネジャーの間で共通認識が生まれ、フィードバックに対する納得度が向上するとの意見がある一方で、様式案の統一自体はフィードバックの納得度に影響しないとの意見もあった。

図表 2-99 アセスメント様式案を用いるフィードバック上の効果

#	カテゴリ	主な意見
1	向上する	- 指摘が具体化し、理解度・納得度が高まる期待感がある。(D自治体CM) - 様式統一で必要情報を確認・共有しやすくなる。(G自治体CM) - 様式を1種にすることでよりアセスメント項目に対しての意識付けが行える。(F自治体CM) - 事業所によってアセスメント項目が違つたため必要事項の記載ができないなどの理由が解消される。(F自治体CM) - 様式統一により、点検者とケアマネの共通認識ができ、新たな気づきや対等な話し合いにつながる。(A自治体CM・F自治体CM)
2	変化なし	納得度は点検者のスキルに依存する部分が大きいため、ケアプラン点検用の様式を統一するだけでは納得度は大きくは変わらないのではないか。(A自治体CM・C自治体CM・E自治体CM)

6) アセスメント様式案の充足度①

実証の結果、「充足している」と感じている保険者・ケアマネジャーが多かった。

不足点としては、既往歴やアセスメント理由などが挙げられた。また、利用者そのものが多様であり、すべての利用者にとって充足した様式を作成すること自体が難しいとの意見もあった。

図表 2-100 アセスメント様式案の充足度①

#	カテゴリ	主な意見
1	充足している	充足していた。(A自治体CM・B自治体・B自治体CM・D自治体CM・F自治体・F自治体CM・G自治体・G自治体CM)
2	一部不足している	- 本人や家族の疾病に対する理解や受け止めについて確認できる項目が不足している。(G自治体CM) - アセスメント理由、家族の基本情報(連絡先、年齢)、本人の既往歴を記載する欄が不足している。(A自治体) - 既往歴について、予防策の検討に直結する重要情報を整理できる欄が不足している。(C自治体) - なりたかった自分、行きたかった場所、やりたかったことを病気のために諦めてしまっている利用者に対して、意欲を引き出すための情報を記載する欄が不足している。(E自治体) - アセスメント様式(2)は、課題と意向の横にケアマネからの意向を記載する欄があるとよい。(E自治体CM) - 自立度に関するケアマネの見立て、生活保護の情報、初回の経緯などの補足があるとよい。(G自治体)
3	充足困難	利用者や多職種間のコミュニケーションの中で補っていく情報も多い。基本的にアセスメントシートのみですべてを充足することは難しい。(F自治体CM)

7) アセスメント様式案の充足度②

アセスメント様式案は通常のケアプラン点検業務を想定しても「充足している」と感じているケアマネジャーが多かった。

不足点としては、活動量を把握する項目や「排便の周期」などの頻度や回数を把握する項目が挙げられた。

図表 2-101 アセスメント様式案の充足度②

#	カテゴリ	主な意見
1	充足している	- 充足していた。(B自治体CM・D自治体CM・E自治体CM・F自治体CM・G自治体CM) - 利用者の多様性を鑑みると、不足している情報については、各自で追加するか、多職種と連携して補足するのであれば問題ないだろう。(A自治体)
2	一部不足がある	- MDSに存在する「日中・夜間の排尿回数」や「排便の周期」など、頻度や回数を把握する項目が不足している。(C自治体CM) - 疾患欄には現病名や内服・処置の記載はできるが、既往歴を整理する欄がなく、利用者理解に不可欠な情報が補足しづらい。(C自治体CM) - 活動量(外出頻度、活動日数、1日の活動時間)を把握する項目があるとよい。(C自治体CM) - 認知機能面の欄が小さい。(F自治体CM)

8) アセスメント様式案の掲載順の妥当性

ほとんどの保険者やケアマネジャーが、掲載順について「妥当である」または「影響がない」との意見を示した。

図表 2-102 アセスメント様式案の掲載順の妥当性

#	カテゴリ	主な意見
1	妥当である	妥当であった。(A自治体・A自治体CM・B自治体・B自治体CM・C自治体CM・E自治体・E自治体CM・G自治体CM・F自治体CM)
2	掲載順による影響なし	記載できるところから記載するため、掲載順は点検に影響しない。(C自治体・D自治体)
3	点検支援ツール順への統一	点検のみに焦点を当てるのであれば、ケアプラン点検支援ツールの項目の順番に合わせた方が使いやすい。(F自治体)
4	一部不足がある	特別な状況等の記載場所に迷いが生じるため、補足があればよい。(G自治体)

9) アセスメント様式案の活用可能性

アセスメント様式案を用いることで「適切なアセスメントが可能である」との意見が得られた。一方で「抜け漏れが全くないアセスメント様式を作ることは難しい」との意見もあった。

図表 2-103 アセスメント様式案の活用可能性

#	カテゴリ	主な意見
1	可能	- 項目が多岐にわたっており、抜け漏れはない。睡眠の状況等、新たな気づきになった項目もある。(B自治体CM・G自治体CM) - 状況や課題を十分に書ける印象がある。(E自治体CM) - 可能になると思う一方で、記載に対しての業務負担をどのように改善していくかも考えていく必要があると感じた。(F自治体CM)
2	一部不足	- 多くの観点が網羅されているが、まだ不足する観点(日中・夜間の排尿回数、活動量など)がある。(C自治体CM) - 抜け漏れが減る事はあると思うが、完全になくす事は難しい。(G自治体CM) - 高齢者の生活は千差万別であるため、万人に対して抜け漏れがないアセスメント様式を作ることは難しいだろう。(A自治体) - 重複や情報の取り方(例：月単位の情報が年単位の情報か)には改善の余地がある。(B自治体CM)

10) アセスメント様式案の改善すべき点

アセスメント様式案は大枠としては活用可能であると考えられる一方で、細部においては改善すべき点があることが指摘された。

図表 2-104 アセスメント様式案の改善すべき点

#	カテゴリ	主な意見
1	日付の整合	- アセスメント日付の欄が分散しており実施日が分かりにくい。訪問して実施した日付が明確になる形にしたい。併せて実施場所も記載できるようにしてほしい。(F自治体) - アセスメント実施日は一本化し、初回/更新など区分を選べる形にしたい。(A自治体CM) - 各日付(受付日・初回・更新等)と実施日の関係が分かるよう整理してほしい。(B自治体CM)
2	アセスメントの理由	- 相談受付欄に初回経緯を追記し、アセスメント理由は「区分変更」だけでなく具体理由(新規・更新・短期見直し・退院退所・サービス変更等)を選べる/記載できるようにしてほしい。(G自治体) 「今回のアセスメントの理由」を自由度高く記載できるとよい。(F自治体)
3	基本情報_年金の種類・年収等	- 介護認定の認定期間と生活保護の有無を記載できるようにしてほしい。(G自治体) - 年収より月収の表記の方が分かりやすい。(B自治体CM・G自治体) - 年金のみでの年収がそれ以外も含めての年収が迷う。収入の対象を明確にしてほしい。(A自治体CM) - 利用できる費用額の欄は年収から推測できるため、不要である。(A自治体CM) - 利用できる費用額の「介護以外」の定義を明確にしてほしい。(B自治体CM・C自治体CM)
4	基本情報_高額医療サービス費	項目として不要ではないか。(A自治体CM)
5	基本情報_要介護認定	被保険者番号をアセスメント様式上で確認できれば効率的である。(A自治体CM)
6	基本情報_日常生活自立度	- 日常生活自立度(障害・認知症)は主治医とケアマネ双方の見解を書けるよう、判定者欄を複数にほしい。(F自治体・G自治体) - 自立度(障害・認知症)の判定者が曖昧なため、主治医意見書、認定調査員、ケアマネージャーのいずれかを明記するなどして明確にする必要がある。(B自治体CM)

#	カテゴリ	主な意見
7	家族情報	- 家族欄に年齢・就労・健康状況を記載できるようにしてほしい。(G自治体) - 家族の連絡先・年齢は氏名横に簡潔に書ける形にほしい。(A自治体) - 家族状況欄に「ヤングケアラー」の文言を入れることで、点検側・作成側の双方がその視点を意識できるため、追加してほしい。(A自治体CM)
8	ジェノグラム・エコマップ	ジェノグラムやエコマップはなじみがないケアマネジャーもいる。モデルが置いてあると書きやすい。(A自治体CM)
9	生活歴等	- サービス利用状況の枠をサービス事業所名や頻度等具体的に記載する等で縮小し、生活歴・生活状況・趣味/特技・価値観/強みを記載する欄を拡大してほしい。(G自治体) - 生活歴・趣味・地域活動等はケアマネジャーが把握しているものの、記載の優先度が低く省略されやすいため、十分に書けるスペースを確保してほしい。(E自治体) - 全体的に課題の把握が中心となっており、本人の強み・生きがい等のポジティブな情報を記載する欄や示唆が不足している。(C自治体・D自治体)
10	居住環境	- 居住環境の記載欄が、見取り図・生活動線・段差情報など何を書けばよいかが不明確であった。(C自治体CM・D自治体CM) - 表記方法(書き方)を統一できるよう、記載ルールや推奨例を示してほしい。見取り図だけでなく、危険箇所や環境要素を記号等で書けるようにするとよいのではないか。(F自治体) - 居住環境のリスク要因や自宅周辺環境を把握できる項目がほしい。(G自治体CM)
11	留意すべき事項	留意すべき事項としてどのような内容を記載すべきか、補足説明があるとよい。(G自治体CM)
12	健康状態等_傷病に関する情報	- 主傷病と既往歴は記載欄を分けてほしい。(F自治体) - 健康状態も主病名・既往歴(時系列に)、内服・処置や医師の助言、現在の病態の程度(バイタルや検査値等の変化)本人家族の認識等がわかると良い。(G自治体) - 各受診先医療機関の電話番号を活用することはほばない。記載は不要ではないか。(A自治体CM)
13	健康状態等_生活上配慮が必要な事項等	運動の可否/制限など医師の注意事項を把握したい。(どの程度の活動が必要で、どの程度の安静が求められるのが不明確である場合、適切な助言を行うことは難しい)(G自治体CM)

#	カテゴリ	主な意見
14	健康状態等_かかりつけ医療機関	- 歯科医療機関の欄があると口腔状況を聞き取りやすく、確認の根拠づけになる。受診状況や支援の着眼点にもつながるためあった方がよい。(A自治体CM・C自治体CM・D自治体) - かかりつけ薬剤師の有無も上記同様の理由で確認項目として設ける価値がある。(C自治体CM)
15	コミュニケーション等の状況	使用しているコミュニケーションツールを把握する必要がある。コミュニケーションの特記事項を記載できる欄が追加されると良い。(G自治体)
16	ADL/IADLの状況	- ADL欄は「現状→意向・専門職意見→課題」の順に整理するとよい。(G自治体) - ADLの「課題」欄が「転倒・骨折」等に記載が偏る。(F自治体) - IADLの「課題」は利用者が現に抱える問題点ではなく、ケアマネジャーから見た総括的な課題が記載されるため、「解決すべき課題等」の表記の方が良いのではないか。(F自治体) 「転倒・骨折のリスク等」という例示があることで他のリスクに目が行かなくなるリスクがある。(F自治体) - 本人・家族意向の後に、Dr等専門職との意見調整を記録できる欄を追加してほしい。(E自治体) - 本人・家族意向に加えて、ケアマネの意向を記載できる欄を追加してほしい。(E自治体CM) - 課題中心で強みが整理しにくいいため、利用者や環境の強みを明確に書ける欄がほしい。(D自治体CM)
17	ADL/IADLの状況_自立度	食事摂取をはじめとする自立度(自立/見守り/一部介助等)について、福祉用具使用時か未使用時か等、判定の仕方を明確にしてほしい。(E自治体)
18	ADLの状況_食事	- 必要栄養量・必要水分量/摂取量の把握は難しく、ケアマネが判断しやすい項目・表現にほしい。BMI・体重変化・食事内容など実務的な代替指標で評価するのも一案である。(A自治体CM・D自治体) - BMI/体重は増減の「変化」を追える形にして、低栄養への気づきを促せるようにするとよい。(A自治体) - 必要栄養量・水分量は一般的にケアマネジャーには把握が困難だと考えられるため、疾患特異的に必須の情報とそうでない情報のすみ分けが必要ではないか。(B自治体CM)
19	ADLの状況_口腔衛生	口腔の状態(口腔衛生・口腔ケア含む)を把握することは重要。但し、記載欄は1カ所にまとまっている方が整理しやすい。(B自治体CM)
20	ADLの状況_排泄	- 尿/便、日中/夜間など状況別に分けて記載できるようにしてほしい。(A自治体) - 便秘・下痢等の項目に排尿障害も含めてほしい。(A自治体) - 失禁の有無を確認できる項目を追加してほしい。(F自治体CM)

#	カテゴリ	主な意見
21	ADLの状況_清潔の保持	「皮膚や爪の状況」の部分に「（褥瘡の有無も含む）」等と表記があると把握すべき情報が分かりやすく、漏れも生じない。（A自治体）
22	IADLの状況	- IADLにICT（スマホ／インターネット等）の活用状況が追加されると良い。（A自治体CM） - 家事（調理・掃除・洗濯・買い物等）を個別に記載するのは負担が大きいため、家事全般について記載できるような形に統合されると良い。（A自治体CM）
23	生活リズム等	- 生活リズム・社会交流は「役割」につながる重要な情報であるため、日・週・年の単位で把握できるようになっていると良い。（G自治体） - 生活リズムの記載方法が分かりにくいいため、時間軸など書きやすい形式になると良い。（A自治体CM）
24	生活全般の解決すべき課題	- 生活全般の解決すべき課題の欄は現在の1つの大枠では不十分だと感じる。課題整理総括表との連携を意識した構成が必要ではないか。（B自治体CM） - 複数の課題を抱える利用者が多いため、優先順位付けができる仕組みが必要である。（B自治体CM）
25	その他_新たに加えるべき項目	- 利用者本人の健康理解・健康意識を把握し記載する項目があると良い。（G自治体CM） - 災害時の避難・備えの意識を確認する項目が追加されると良い。（A自治体CM）
26	その他_統廃合すべき項目	食事に関する情報、皮膚の状態に関する留意点については、一部観点が「健康状態等」と「ADLの状況」の両方に重複して配置されている。同じテーマは1カ所にまとめている方が整理・把握しやすい。（A自治体・A自治体CM）
27	その他_様式の体裁	- IADLの状況の右横罫線が細かい。記載量を控える意識につながる可能性があり、枠を予め大きくしておいても良いのではないかと。（A自治体CM） - 自由記載欄（家族状況・主訴等）は改行ができるよう入力仕様を改善してほしい。（G自治体CM） - チェック欄はし点では見づらいため、黒塗り等で見やすくすると良い。（D自治体CM） - チェック方式よりもブルダウン方式の方が馴染みがあり、活用しやすい。（A自治体CM）
28	その他_記載ガイド	項目ごとの補足説明や記入時に迷った際の手引書があると良い。（E自治体・G自治体）

1 1) ケアプラン点検における AI 活用の可能性

記載漏れや整合性のチェックなどの点検の効率化に AI を活用したいとの意見が得られた。また、AI を活用する上で、信頼性の確保や人との役割分担が重要であるとの意見も得られた。

図表 2-105 ケアプラン点検における AI 活用の可能性

#	カテゴリ	主な意見
1	点検の効率化	- 記載漏れ・整合性を自動チェックし、基本的な点検作業を効率化したい。（A自治体・D自治体・F自治体） - 内服薬名から作用・注意点・副作用・高齢者リスク等を自動提示し、注意事項整理の負担を軽減したい。（C自治体） - ケアプラン選定をAIで補助し、手間削減と公平な選定につなげたい。（D自治体）
2	面談・コミュニケーション支援	- 面談録音の要約で質問の流れ・意図を整理し、振り返りに活用したい。（D自治体） - 指摘しづらい内容でも、適切な言い回し（面談での表現）を教えてもらいたい。（E自治体）
3	AI活用の留意点	- 情報収集はAIで効率化しつつ、課題解釈など核心の判断は人が担う前提で使い分けたい。（C自治体） - エビデンス等の信頼性が担保されることが重要である。（A自治体）

（3）ワーキンググループにおける検討

以上の結果をふまえ、アセスメント様式案について今後検討すべき事項をワーキンググループで整理した。

結果、今後、実証で得られた意見をもとにアセスメント様式案をブラッシュアップしていく必要がある一方で、実証で得られた「アセスメント様式案の改善すべき点」はケアプラン点検の場面に加え、ケアプラン作成のためのアセスメント場面や、育成の観点も含んだ意見であることが指摘された。アセスメント様式案を「点検における判断のみに特化した様式」とするか「ケアプラン作成のためのアセスメントにおいても活用可能な様式」とするかにより、ブラッシュアップの方向性が変わることも指摘された。

そこで、今後、アセスメント様式案の位置づけを明確化した上でブラッシュアップを進めることとした。

4. まとめ

(1) 実証によるアセスメント様式案の検討

7 保険者の点検者、ケアマネジャーの参画を得て、令和 6 年度事業において開発したアセスメント様式案を用いた実証を実施した。実証では 6 保険者においてアセスメント様式案を用いたケアプラン点検で、1 保険者においてケアプラン点検の場面を想定し机上でアセスメント様式案の精査を行い、その所感をヒアリングした。

結果、アセスメント様式案そのものについては、点検者、ケアマネジャー双方から掲載順、掲載項目は概ね妥当であり、今後細部の修正を行うことでケアプラン点検及びアセスメント場面における活用可能性が高まるとの意見が得られた。様式案を今後どのように位置づけるかについては、様式案の導入によりケアプラン点検の業務効率化や質向上への期待感がある反面、転記業務の負担が強く懸念され、転記機能とセットでの導入が必須であるとの意見が多かった。

これらの実証の結果をふまえ、ワーキンググループ及び検討委員会において、アセスメント様式案のブラッシュアップを検討した。検討過程で、アセスメント様式案をケアプラン点検においてのみ活用する様式とするのか、アセスメント実務での活用も見据えたものとするのかによりブラッシュアップの方向性が変わることが指摘された。そこで、アセスメント様式案の位置づけを十分に検討し確定した上でブラッシュアップを進めることを今後の方針とした。

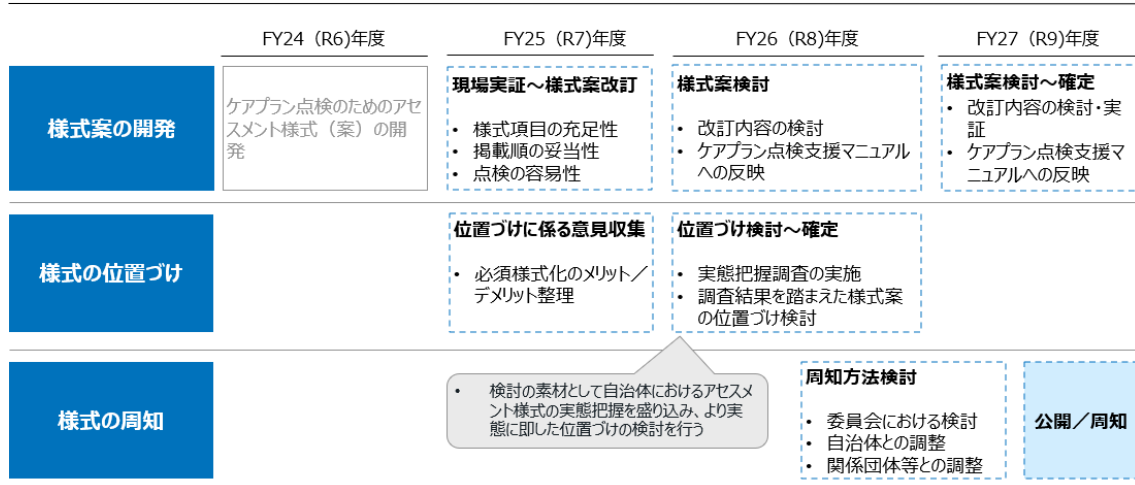
(2) 残された課題

本事業において実施した実証より、アセスメント様式案はケアプラン点検及びアセスメント場面において活用可能性が一定程度あることが示された。一方で、具体的な活用を想定した場合、細部において記入のしやすさへの対応の必要があることに加え、アセスメント様式案の位置づけにより整理すべき項目が異なるといった課題があることも示唆された。

今後、アセスメント様式案を確定し広く活用を促進するためには現状のアセスメント様式案をブラッシュアップする必要がある。一方で、様式の構成ブラッシュアップの方向性はアセスメント様式案の位置づけにより異なる。具体的には、アセスメント様式案をケアプラン点検の場面でのみ活用するものと位置付けて開発するのか、ケアマネジャーがアセスメント場面で活用することまで想定して開発するのかを、ケアプラン点検の実施実態をふまえて検討する必要がある。

そこで、アセスメント様式案の位置づけを検討した上で具体的な様式内容のブラッシュアップを進めることが必要である。アセスメント様式案の位置づけの検討にあたっては、全国的なケアプラン点検の実施状況、ケアプラン点検において提出される書類の種類、提出されるアセスメント様式の種類等を把握することが必要である。

図表 2-106 ケアプラン点検のためのアセスメント様式作成のロードマップ
FY27（R9）までのロードマップ：最新実態把握後に位置づけ検討とブラッシュアップ



第5章 ケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールの検討

1. 目的

地域のケアマネジメント力の向上を図る上で、ケアマネジャーのスキルアップは重要な役割を果たす。ケアプラン点検支援パッケージを、ケアプラン点検の場だけでなく、ケアマネジャー自身のセルフチェック・育成の場面で活用することができれば、行政・居宅介護支援事業所が同じ指標をもって地域のケアマネジメント力の向上に取り組むことができると考えられる。そこで、令和6年度事業において、行政・居宅介護支援事業所が同じ指標をもって地域のケアマネジメント力の向上に取り組むためのツールを開発することを目的に、ケアマネジャーが活用できる点検項目及び点検項目マニュアルセルフチェック版（以下、セルフチェック版という）を開発した。

本事業においては、ケアプラン点検項目マニュアルのブラッシュアップに合わせてセルフチェック版をブラッシュアップするとともに、そのセルフチェック版が広く認知され効果的に活用されることを目指し、周知の方法を検討した。

2. 方法

（1）セルフチェック版のブラッシュアップ

令和6年度事業において開発したセルフチェック版に対し、本事業で実施したケアプラン点検項目マニュアルのブラッシュアップ内容を反映した。

（2）セルフチェック版の周知方法の検討

セルフチェック版の認知及び効果的な活用を促進するため、周知方法についてワーキンググループ及び委員会での検討を行った。

3. 結果

（1）セルフチェック版のブラッシュアップ

ケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールは、行政・居宅介護支援事業所が同じ指標をもって地域のケアマネジメント力の向上に取り組むためのツールを提供することを目的としている。そこで、セルフチェック版のケアプラン点検項目及び点検項目マニュアルの内容は、通常のケアプラン点検項目及び項目マニュアルと同様とすることとした。

そこで、本事業において実施したケアプラン点検項目マニュアルのブラッシュアップ内容をセルフチェック版マニュアルにも反映した。ケアプラン点検項目マニュアルのブラッシュアップについては第2章を参照されたい。

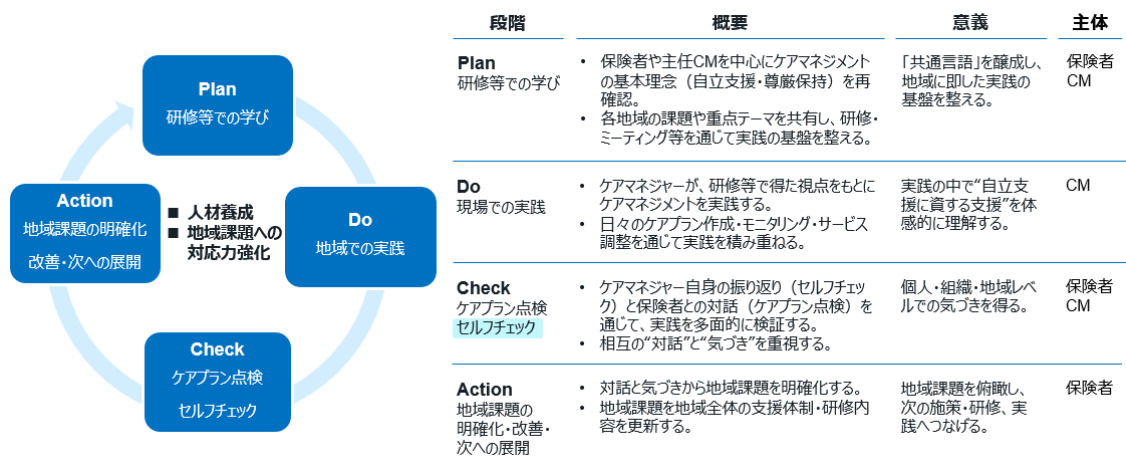
（2）セルフチェック版の周知方法の検討

ワーキンググループ及び委員会にて検討を行い、セルフチェック版の周知・活用促進のプロセスを以下の通り整理した。

1) セルフチェック版の位置づけ

ケアプラン点検は人材養成や地域課題への対応力強化に効果的なツールとして位置付けられる。今後、ケアプラン点検とセルフチェックを軸とした「ケアマネジメント力向上の PDCA サイクル」を循環させていくことが重要である。

図表 2-107 ケアマネジメントの質向上の PDCA サイクル（イメージ）



2) セルフチェック版の周知・活用促進のプロセス

セルフチェック版の周知・活用促進は、ケアプラン点検を「評価」ではなく「気づきの機会」として捉え、保険者とケアマネジャーが共通の視点を持ってケアマネジメントの質向上を図るための土壌を作ることを目指し、「①認知を広げる」「②理解を得る」「③実践を支える」の三段階で体系的に推進することとした。

①認知を広げる（事実ベースの周知と理解につなげる周知）

第1段階として、制度や取組の趣旨を正確に伝えるため事実ベースの周知を行う。具体的には、国による厚生労働省ホームページでの公表や全国の保険者への事務連絡の発出、職能団体からの情報発信等を通じて、広く情報を届けることを想定する。

次に、理解の深化につなげるための周知を行う。積極的な活用が見込まれる保険者に対しては、保険者が開催する点検説明会や報告会等の場を活用し、マニュアルの趣旨や使い方を丁寧に紹介することを推進する。また、地域ケアマネ連絡会や主任ケアマネジャー研修等の既存の機会を活用し、実践に結び付く形で説明を行うことや、職能団体が開催する研修会等においてマニュアルの目的や活用方法を周知することを推進する等により、現場での理解促進を図る。

②理解を得る（モデル事例の創出と共有）

第2段階として、理解を一層深め具体的な活用イメージを共有するため、モデル事例の創出を行う。モデル事業所において実証的に活用を進め、活用を通じて得られた気づきや効果を可視化するとともに、効果的な活用方法を抽出する。その成果を事例集等の形で取りまとめ公表することで、他地域・他事

業所への横展開を図る。

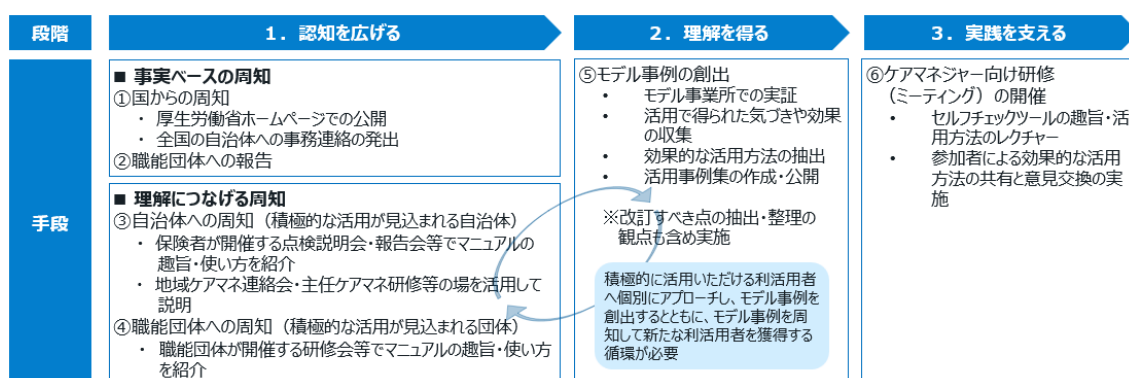
あわせて、活用過程で明らかとなった改善点や課題について整理・抽出を行い、改訂すべき点の検討を進めるなど、継続的な改善の観点も踏まえて取り組む。

③実践を支える（研修・対話の場の確保）

第 3 段階として、実践段階ではケアマネジャー向け研修（ミーティング）を開催し、具体的な活用を支援する。研修（ミーティング）においては、セルフチェックツールの趣旨や活用方法を共有するとともに、参加者同士が効果的な活用方法を持ち寄り、意見交換を行う場を設ける。

これにより、単なる情報提供にとどまらず、実践的な学びと相互支援を促進する。

図表 2-108 周知・活用促進のプロセス



3）セルフチェック版使い方ガイドの開発

ワーキンググループにおける検討において、保険者及び職能団体への周知にあたっては、効果的な活用方法を簡潔に示したガイドが示されることでケアマネジャーへの周知がしやすくなるとの意見が得られたことから、『ケアプラン点検項目マニュアルセルフチェック版 使い方ガイド』（以下、「使い方ガイド」という）を開発した。

使い方ガイドでは、ケアマネジャーのセルフチェック、OJT、研修という 3 つの想定活用場面ごとに、効果的な使い方のコツやセルフチェック版を活用する効果を簡潔に示した。使い方ガイドの詳細は別紙を参照されたい。

4. まとめ

（1）周知方法の検討及びセルフチェック版使い方ガイドの開発

本事業では主に、セルフチェック版の公開方法、具体的には周知・活用促進のための施策を検討した。検討の結果、認知を広げる、理解を得る、実践を支えるという 3 つのステップで周知・活用促進を進めることとした。

認知を広げるための方策としては、厚生労働省ホームページにおいてセルフチェック版を広く一般に公開することに加え、保険者や職能団体がケアマネジャーにセルフチェック版の利用を推奨する際に活用す

るツールの必要性が指摘されたことから、使い方ガイドを作成した。使い方ガイドでは、ケアマネジャーのセルフチェック、OJT、研修という3つの想定活用場面ごとに、効果的な使い方のポイントや期待される効果を簡潔に示した。

（２）残された課題

今後、セルフチェック版及び使い方ガイドを広く保険者や職能団体等へ周知し、ケアマネジャーの認知・活用を促進していく必要がある。特にケアプラン点検においてケアプラン点検支援パッケージを活用しており、セルフチェック版についても積極的な活用が見込まれる保険者には個別の周知を図り活用を促進することで、具体的な活用事例の創出が期待される。

認知を広げる、理解を得る、実践を支えるという3つのステップを段階的に進め、好事例の創出と周知を図りながら、普及促進を目指す。

第6章 総括（今後の課題と展開）

1. 結果のまとめ（課題を含む全体の総括）

（1）保険者研修

ケアプラン点検支援パッケージの理解と活用を促進し、経験の浅い担当者を中心にケアプラン点検の質の平準化を図ることを目的として、基礎編と実践編の2部構成による保険者向け研修を実施した。

事後アンケートの結果、基礎編、実践編ともに研修内容の実務への関連性や理解度に関して肯定的な評価が多く、特に基礎編ではすべての回答者がケアプラン点検の目的や基本的な考え方を理解できたと回答した。今後の実践意欲についても肯定的な評価が多かったことから、本研修は点検業務の平準化や自立支援に資するケアマネジメントの推進に向けた基礎的な理解の形成に寄与したと考えられる。

一方、研修が地域のケアマネジメント力の向上や点検の質のばらつきの是正等の成果につながるかについては、他の項目と比べて評価が相対的に低く、学びを各保険者の実務改善・組織的実践へ橋渡しする支援が課題として示唆された。実践編のグループワークでは、評価基準の解釈や複数情報を統合した総合判断の難しさ、面談による補完の必要性等が共有され、判断が分かれやすい論点への具体例・事例解説の充実が求められる。また、受講者の立場・役割が多様であることを踏まえた研修内容・方法の設計、ならびにケアプラン点検支援パッケージの認知向上に向けた周知の継続も引き続き課題である。

（2）ケアプラン点検項目のブラッシュアップ

ケアプラン点検項目及び項目マニュアルの改訂は、令和6年度事業において残された課題である「基準や判断方法の説明について追加検討が必要な項目」について、検討委員会及びワーキンググループでの検討を経て改訂を行った。改訂は、点検者がより判断しやすく、ケアプラン点検を通したケアマネジメントの質の向上に資するものとなることを目指す一方で、ケアプラン点検支援ツールの開発と足並みを揃える観点から、基準そのものは改訂せず「マニュアルの充実化」に焦点を絞って検討した。

結果、本事業では「はじめに」、「8. 認知機能や判断項目」、「10. 一日に摂取すべき水分量」等、計18の項目に改訂を加えることとした。

また今後、介護報酬改定や社会情勢の変化を踏まえ、3年に一度は基準も含む大幅改定を行うことに加え、マニュアルについては適宜修正を加えていくことが求められる。

（3）点検支援ツールのブラッシュアップ

「WEB版ケアプラン点検支援ツールの試験開発」では、完全ローカル環境で動作するWEB版ケアプラン点検支援ツールを開発し、WEB版ケアプラン点検支援ツールを用いた「WEB版ケアプラン点検支援ツールの保険者検証」を実施した。保険者検証では、エクセル版ケアプラン点検支援ツールでは実現できないWEB版ケアプラン点検支援ツールの効果や、WEB版ケアプラン点検支援ツールのUI/UXの課題について示唆を得ることができた。具体的にはWEB版ケアプラン点検支援ツールの効果としては自動書類確認機能による業務効率化、保険者（特に事務職間での）の業務引継ぎへの活用可能性や、地域比較によるファクトに基づいた地域の施策検討可能性について示唆が得られた。

「生成AIによる所定のアセスメント様式への転記可能性の検証」では生成AIを活用して現場で運用される多様なアセスメント様式から特定のアセスメント様式への転記を実現するための障壁を明らかに

することができた。具体的には転記の作業を情報の①単純抽出、②再構成、③成形に分解したとき、①②の箇所でも生成 AI を活用する余地があるが、①単純抽出の精度を保証できるようにシステムを検討するためには更なる検討が必要になる。その一方で、②再構成精度については一定の精度が確認できた。ただし、①単純抽出から②再構成までの一連の仕組みとして実装することを考えると、生成 AI を活用した「転記」の精度を完全に保証することは難しい。したがって、生成 AI による転記機能が社会実装された場合には、生成 AI が転記した内容について、ケアマネジャー等の専門職が確認・補正を行うことが求められると考えられる。このような将来像を踏まえると、今年度の検証ではケアプラン点検を担当する事務職相当の知見を有する者が正解データを作成して精度検証を行ったが、今後はケアマネジャー相当の知見を有する者の観点からみて再構成精度が妥当であるかについても明らかにしていく必要がある。

これらの結果を踏まえ、『WEB 版ケアプラン点検支援ツール』のロードマップ案の更新を行い、ケアプラン点検事業の DX を推進していくために必要なアクションを確認した。

その結果、点検支援ツールの社会実装に向けては、ツール単体の機能改善にとどまらず、制度、運用、技術を一体的に捉えた検討が必要であることが示唆された。具体的には、ケアプラン点検の制度上の位置付けや評価基準の明確化に加え、運用主体や関係機関間の役割分担、他の情報基盤との連携の在り方などが論点として挙げられる。

また、社会実装にあたっては、モデル地域での検証を通じて得られる知見を踏まえ、運用方法や必要な機能を具体化していくとともに、その結果を全国展開の前提として位置付けていくことが重要である。あわせて、実証結果や技術動向を踏まえ、必要に応じて見直しを行いながら、検証と改善を重ねていくことが求められる。

（４）ケアプラン点検のためのアセスメント様式の検討

アセスメント様式の検討においては、令和 6 年度事業において開発したアセスメント様式案を用いた実証を実施した。実証には 7 つの保険者の点検者、ケアマネジャーの参画を得た。実証では 6 つの保険者においてアセスメント様式案を用いたケアプラン点検で、1 つの保険者においてケアプラン点検の場면을想定し机上でアセスメント様式案の精査を行い、その所感をヒアリングした。

結果、アセスメント様式案そのものについては、点検者、ケアマネジャー双方から掲載順、掲載項目は概ね妥当であり、今後細部の修正を行うことでケアプラン点検及びアセスメント場面における活用可能性が高まるとの意見が得られた。様式案を今後どのように位置づけるかについては、様式案の導入によりケアプラン点検の業務効率化や質向上への期待感がある反面、転記業務の負担が強く懸念され、転記機能とセットでの導入が必須であるとの意見が多かった。

これらの実証の結果をふまえ、ワーキンググループ及び検討委員会において、アセスメント様式案のブラッシュアップの方向性を検討した。検討過程で、アセスメント様式案をケアプラン点検のためだけの様式と位置付けて開発するのか、アセスメント業務での活用までを見据えた様式とするのかにより、様式の構成ブラッシュアップの方向性が変わることが指摘された。そこで、アセスメント様式案の位置づけを十分に検討し確定した上でブラッシュアップを進めることを今後の方針とした。

（５）ケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールの検討

本事業において、行政・居宅介護支援事業所が同じ指標をもって地域のケアマネジメント力の向上に取り組むためのツールを提供することを目的として、セルフチェック版を開発した。

セルフチェック版の周知・活用促進は、ケアプラン点検を「評価」ではなく「気づきの機会」として捉え、保険者とケアマネジャーが共通の視点を持ってケアマネジメントの質向上を図るための土壌を作ることを目指す、「①認知を広げる」「②理解を得る」「③実践を支える」の三段階で体系的に推進することとした。

ケアマネジャーへの周知にあたっては、保険者及び職能団体等を経由することが想定される。ワーキンググループにおける検討において、効果的な活用方法を簡潔に示したガイドが示されることで、保険者及び職能団体等がケアマネジャーへの周知をしやすくなるとの意見が得られたことから、セルフチェック版の周知のためのツールとして使い方ガイドを開発した。使い方ガイドでは、ケアマネジャーのセルフチェック、OJT、研修という3つの想定活用場面ごとに、効果的な使い方のポイントを簡潔に示した。

2. 今後の展望

ケアプラン点検は、利用者の自立支援に資するケアマネジメントを地域全体で底上げするための重要な保険者の取組の一つである。ケアプラン点検が各保険者において適切かつ効果的に実施されることが重要であり、ケアプラン点検支援パッケージを活用したケアプラン点検が全国的に展開されることが望まれる。

このような認識の下、今年度の調査事業では、ケアプラン点検支援パッケージの理解と活用を促進するための保険者向け研修の実施をはじめ、点検項目及び点検支援ツールのブラッシュアップ、ケアプラン点検のためのアセスメント様式の検討、ケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールの検討を進めてきた。

その結果、研修については、点検の意義や基本的な考え方、実務との関連性に対する理解は進んだものの、学びを各保険者の実務改善や組織的な実践へと十分に橋渡しする仕組みはなお検討の余地があることが示唆された。また、点検項目についても、判断の手がかりや評価基準の解釈において点検者間で差が生じやすい項目があることが課題として示唆された。さらに、点検支援ツールについては、業務効率化や点検視点の平準化に一定の有用性が確認された一方で、操作性（UI）の改善や生成 AI の精度に加え、点検支援ツールの社会実装に向けた検討が課題として残されている。これに関連して、ケアプラン点検のためのアセスメント様式についても、点検支援ツールとの関係性を踏まえつつ、その位置付けや活用場面を整理した上で検討を進めていく必要がある。ケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールについては、ツール本体に加えてケアマネジャーへの周知を想定した「ケアプラン点検項目マニュアルセルフチェック版 使い方ガイド」を作成した。今後は、使い方ガイドを活用したセルフチェックツールの周知を実施していく必要がある。

このような課題等への対応については、今後継続的に検討していくことが重要であるが、その前提として、各保険者におけるケアプラン点検の実施体制や運用方法、点検項目や支援ツールの活用状況等について全国的な実態を把握することが不可欠である。実態調査を通じて課題や好事例を体系的に整理し、その結果を研修内容の充実や点検項目・支援ツールの改良に反映させることで、ケアプラン点検が現場に定着し、持続的に機能する仕組みへと発展させていくことが求められる。

以下では、これらの課題を踏まえ、今後特に対応が求められる事項について整理する。

（1）保険者研修

今後は、基礎編を継続的に実施してケアプラン点検の理解の促進と点検の質の底上げを図るとともに、実践編については受講者の立場・役割・経験に応じたプログラムの整備を検討する必要がある。その際、

グループワークで把握された評価基準の解釈の難しさを踏まえ、判断の手がかりとなる具体例や事例解説を研修内容に組み込むことが有効と考えられる。

（２）点検項目のブラッシュアップ

ケアプラン点検項目は、介護報酬改定や社会情勢の変化等を踏まえ、3年に一度は基準も含む大幅改定を行うことに加え、項目マニュアルについては保険者にとっての判断のしやすさ、あるいは判断のしにくさを把握しながら、適宜必要な修正を加えていく必要がある。今後、ケアプラン点検におけるケアプラン点検項目及び項目マニュアルの活用実態を把握した上で、活用されている場合にどの項目において判断の難しさがあるか等を確認し、より活用しやすいマニュアルとしていくことを今後の方針とする。

（３）点検支援ツールのブラッシュアップ及び社会実装

点検支援ツールについては、本事業で整理したロードマップに基づき、社会実装に向けた具体的な進め方を見据えた段階にあると考えられる。今後は、モデル地域での検証を通じて得られる結果を踏まえて、運用方法や必要な機能を段階的に具体化し、その成果を全国展開につなげていくことが期待される。また、ツールの実装にあたっては、制度上の位置付けや運用主体の役割分担、既存の情報基盤との連携の在り方といった観点も含めて検討を進めていく必要がある。さらに、実証の積み重ねを通じて、業務効率化やケアマネジメントの質の向上といった効果を可視化していくことで、ツールの有用性を裏付ける基盤が形成されていくことが見込まれる。その過程においては、実証結果や技術動向を踏まえ、必要に応じた見直しを行いながら、検証と改善を重ねていくことが重要である。こうした取組を通じて、点検支援ツールの社会実装に向けた取組が着実に進展していくことが期待される。

ケアプラン点検支援ツールとしては、残された課題としては大きく2つある。1つ目はWEB版ケアプラン点検支援ツールのブラッシュアップ及び社会実装である。今年度事業において、保険者にWEB版ケアプラン点検支援ツールの利用ニーズがあることが確認された。さらに、ケアプラン点検項目を使った書類確認の業務負担が大きく削減できる可能性があることも確認された。このことから保険者検証で得られたUI/UXの課題を解消しつつ、WEB版ケアプラン点検支援ツールを社会実装し、広く保険者が利用できる環境を醸成していくことが望まれる。また、社会実装に向けてWEB版ケアプラン点検支援ツールの効果（特に、業務改善効果）を定量的に実証していくにあたっては、推奨されるケアプラン点検の枠組みをより明確化していくことも求められる。具体的には、保険者規模等にあわせたケアプラン点検の実施の規模（件数等）について、ケアプラン点検事業の目的と整合する形で整理していくことも検討できる。このような整理を行うにあたっては、検討の根拠となる好事例の収集や全国的にケアプラン点検の実施がどのような目的のもと、どの程度の規模で行われているかについて把握することも考えられる。

2つ目はケアプラン点検用アセスメント様式への転記機能の実現である。本事業の中でケアプラン点検用アセスメント様式のニーズは一定確認されたものの、転記にかかる負担感の軽減が課題として提起されている。さらに、WEB版ケアプラン点検支援ツールに情報を構造化して取り込ませ、自動書類確認機能を実現していくにあっても、所定のアセスメント様式への転記機能は重要な要素になる。「生成AIによる所定のアセスメント様式への転記可能性の検証」では単純抽出の精度向上、再構成精度のケアマネジャーによる検証の必要性があることが確認された。このような課題の検討を継続し、ケアプラン点検

用アセスメント様式への転記機能の実現につなげていく必要がある。

（４）ケアプラン点検のためのアセスメント様式の検討

アセスメント様式の検討は、当初「ケアプラン点検のための様式」と位置付けて検討を開始したが、実証におけるヒアリングにおいて、公開後にケアマネジメントの現場においてケアプラン作成のための様式として位置付けられる可能性があることが示唆された。

アセスメント様式案の構成ブラッシュアップの方向性は様式をどのように位置づけるのかにより変わってくるため、今後、アセスメント様式案の位置づけを検討した上で具体的な様式の構成ブラッシュアップを進めていく必要がある。一方で、アセスメント様式案の構成及び内容が確定し公開された際にどのように現場で活用されるかを検討する材料は不足しているため、位置づけの検討に先立ち、検討に必要な情報を収集する必要がある。

そこで、検討に必要な情報として全国的なケアプラン点検の実施状況、ケアプラン点検において提出される書類の種類、提出されるアセスメント様式の種類等を把握し、アセスメント様式案の位置づけについて検討を行った上でブラッシュアップを進めていくことを今後の方針とする。

（５）ケアマネジャーのセルフチェックに活用できるツールの検討

ケアマネジャーのセルフチェックは、ケアマネジメントの質の向上を図るうえで重要な取組であると言える。ケアマネジャーがセルフチェックを通じて自らの実践を多面的に振り返った上で、セルフチェックの結果とケアプラン点検を通じて示される保険者の視点とをすり合わせることで、ケアマネジャーと保険者が互いに気づきを深める効果も期待される。

そこで、今後、セルフチェック版及び使い方ガイドを広く保険者や職能団体等へ周知し、ケアマネジャーの活用を促進していく必要がある。特に、ケアプラン点検においてケアプラン点検支援パッケージを活用しており、セルフチェック版についても積極的な活用が見込まれる保険者には個別の周知を図り活用を促進することで、具体的な活用事例の創出が期待される。

認知を広げる、理解を得る、実践を支えるという３つのステップを段階的に進め、好事例の創出と周知を図りながら、普及促進を目指すことを今後の方針とする。

（６）ケアプラン点検の実態把握

保険者研修、点検支援ツール及びケアプラン点検のためのアセスメント様式について、ケアプラン点検の実態に即したものとなるよう検討するためには、各保険者におけるケアプラン点検の実態を把握することが不可欠である。

調査において把握すべき内容としては、各保険者におけるケアプラン点検の実施体制・運用方法（実施件数・頻度・担当体制等）、点検支援パッケージ（点検項目・アセスメント様式・セルフチェックツール・支援ツール）の認知状況及び活用状況、点検項目・マニュアルの活用における判断困難箇所、ケアプラン点検において提出される書類の種類及びアセスメント様式の種類、ならびに好事例等が考えられる。これらについて、全国的なアンケート調査等を通じて体系的に把握することを今後の方針とする。

調査によって得られた結果については、課題や好事例を体系的に整理した上で、保険者研修の内容

の充実、点検項目・マニュアルのブラッシュアップ、点検支援ツールの社会実装に向けた検討、アセスメント様式の位置づけの整理、ならびにセルフチェックツールの周知促進にそれぞれ反映させていくことが重要である。実態調査をこうした継続的な改善サイクルの起点として機能させることにより、ケアプラン点検支援パッケージ全体の実効性を高め、ケアプラン点検が全国的に展開されることが期待される。

第3部 参考資料

参考資料

- 参考資料 1 ケアプラン点検項目マニュアル 令和 7 年度改訂版
- 参考資料 2 ケアプラン点検項目マニュアル 令和 7 年度改訂内容_新旧対照表
- 参考資料 3 ケアプラン点検項目マニュアル セルフチェック版
- 参考資料 4 ケアプラン点検項目マニュアル セルフチェック版_使い方ガイド